業界恐怖新聞号外

処刑宣告

宅八郎

宅八郎
処刑宣告

太田出版

処刑宣告

序文

これは3年間にわたる「処刑」の記録である……。

94年11月2日、ボクは警視庁代々木警察署に道交法違反の疑いで逮捕された。この事件は「宅八郎、当て逃げで逮捕」と、各マスコミで大きく報道された。

しかし、ボクは「当て逃げ」なんかしていなかった！

この初期報道は警視庁発表をそのままタレ流したもので、事実は決して「当て逃げ」などではなかった。事件はまさに不当な懲罰的逮捕であり、しかも、これは別件逮捕だったのだ。交通違反による強引な逮捕の裏には、巨大出版社・小学館とボクをめぐる事件（本件）が隠されていたのである。

3年前のことだ。小学館が発行する『週刊ポスト』の犯罪的な取材と捏造記事によって、ボクはあまりにもひどい「報道被害」を受けた。それは犯罪報道ならぬ「報道犯罪」と呼ぶべきものだった。

ボクは傷つき、血を吐き、涙を流した。しかし、それでもボクは泣き寝入りしなかった。

復讐を誓ったボクは「処刑宣告」を発した！

コノ・ウラミ・ハラサデ・オクベキカ!!

そして月日は流れ、ついに復讐鬼と化したボクの処刑が始まった……。

かつて86年に、写真週刊誌『フライデー』編集部に殴り込みをかけたビートたけしは、「ほかに方法があったら

教えてほしい」と言っている。ＯＫ！　ボクが考え出した方法は「逆取材逆報道」というものだった。
まったく同じ方法でヤツらを血祭りにあげてやるッ！
そのために、『週刊ポスト』の取材記者とカメラマンをボクは逆撮影し、その「報道犯罪」を指揮した担当責任者・小牧三平デスクの徹底調査に乗り出したのだ。
そして、ついにボクは、その小牧デスクが、外国人女性とホテル・ニューオータニに宿泊した不倫現場を完全監視尾行することに成功した！
ボクはその取材結果（横領疑惑にもとづく不倫事実）を、自分が発行する「業界恐怖新聞」（雑誌『噂の真相』の看板連載コラムだった）で告発報道。さらにデスクの自宅を直撃追取材したのである。
ところが、小学館側はボクの「復讐逆取材」を犯罪であるとして、警視庁に告訴し働きかけていた。その結果、警察との激突を繰り返したボクは、別件逮捕として、道交法違反による「当て逃げ」事件をデッチ上げられてしまったのである。
なぜだ、どうしてなんだ！「獄中」でボクは叫んだ……。
何が「別件不当逮捕」を生んだのか。ボクが「犯罪者」なら、小学館も犯罪出版社、同じことをしている全マスコミだって犯罪集団じゃないか。マスコミの「報道犯罪」とは何か？「報道・言論の自由」と「人権尊重・プライバシー保護」という矛盾を含んだ命題の接点はどうあるべきなのか？
これは３年間にわたる復讐と処刑の物語である。巨大メディアに蹂躪（じゅうりん）された一人の個人の怒りが、すべてのメディアを撃つ！　ボクは自らの怒りの引き金を引いたッ!!

第6章 支援者 193

カバー写真―増田岳二
ブックデザイン―鈴木成一デザイン室

第1章
事件

❶別件「当て逃げ」事件

交通違反で別件不当逮捕され、見せしめのために、大々的に警視庁発表された男がここにいる。

その上「当て逃げ」でもないのに勝手に「当て逃げ」と報道され、主張した反論は報道されず、誤報さえ訂正されずに、世間には「当て逃げ犯」と決めつけられた男が、ここにいる。

それはボクのことだ！

１９９４年11月2日午前10時22分、ボクは警視庁代々木警察署に道交法第72条違反の疑いで逮捕された。

「宅八郎逮捕」という衝撃の事態に、色めき立って、全

●「当て逃げ」という言葉が氾濫する11月3日各紙の報道

マスコミは踊った。

逮捕の当日、11月2日の夜すでに「宅八郎逮捕！」の第一報が流れ、翌3日には報じないマスコミがないくらい、大きく事件は報道された。ＮＨＫも民放各局も、朝日新聞も、読売、毎日も、そして東スポなどスポーツ紙でも。

軽微な道交法違反がここまで大きく報道された例は今だかつてない。並のタレントなら、とてもこうは報道されまい。

#0003 ◎宅八郎容疑者を逮捕　　当て逃げ事件で警視庁　　94.11.02
共同　　版 面 段　527文字　KY60720　共Ｔ６５３社会００６７　０２完

警視庁代々木署は二日、駐車場から車を出す際に他人の乗用車にぶつけて破損させ逃げたとして、道交法違反（当て逃げ）の疑いで、東京都渋谷区■■■■、タレントの宅八郎■■■■容疑者（３２）を逮捕した。

調べでは、宅容疑者は七月二十二日午後七時ごろ、自宅のあるマンション前の駐車場から自分の車を出そうとバックしたところ、止めてあった近所の女性会社員（４６）の乗用車に衝突。左前部の車体やドアを壊したが、警察に届け出ず逃げた疑い。

目撃者の話から、宅容疑者が当て逃げしたことが分かり、女性会社員が翌日、警察に届けた。代々木署員が宅容疑者から任意で事情を聴こうとこれまでに十回近くマンションを訪ねたが、インタホン越しに「関係ない。知らない」などと聴取に応じなかったという。

宅容疑者の車は外車で後部右バンパーを破損したが、修理に出さず放置。調べに対し、宅容疑者は「その通りです」と逮捕事実を認めているという。

宅容疑者は雑誌のコラムや週刊誌の連載などを手掛けるほか「おたく評論家」の肩書でテレビ番組に出演している。

●共同通信が配信した527文字の第一報

2日午後6時、第一報であったらしい共同通信はこの種の事件としては異例とも思える527文字の原稿を配信している。しかし、これがクセモノだった。その配信原稿はそっくりそのまま警視庁発表だけを書き記したものだったからである（スポーツ紙、地方紙は特に、通信社の原稿を参考にして書かれることが多い）。

全マスコミの初期報道は100％「宅八郎、当て逃げで逮捕」というものだった。いわばマスコミは警視庁発表を一方的に、そのままタレ流したわけだ（もっとも無責任に、当て逃げの方が面白い、という判断はあったろう）。

しかし、事実は「当て逃げ」などではなかった。

ボクの逮捕容疑は、道交法第72条違反「報告義務違反」（事

故不申告）だった。つまり、これは事故があったが示談ですませて警察に届けていなかった、という交通違反である。

しかし、それも微妙なセンで「何月何日どこで接触事故があり」「その加害者は自分である」という事実関係は、電話で警察に報告してあった。その上、出頭の意志も伝えてあったのだ。

「でも違法なんでしょ」と言い張る人もいるかもしれないが、言ってみれば、これじゃあ立ちションで逮捕されたようなものだ。でも立ちションだって、リッパな軽犯罪法違反、罰金だって食らうだろう。

「10回近く警察が宅八郎の家を訪ねたが、宅は『知らない、関係ない』と応えたために逮捕におよんだ」という報道もあったが、実際は、警察からの呼び出しは3回前後であった。そして発行されるハズの呼出状は何と1回も来ていない。結果的に、多忙のために調書作成が遅れていただけなのだ。

しかも、ボクが起こした事故は物損事故である。もちろん飲酒運転でも人身事故でもない。そんな取るにたりない交通違反でボクは突然、逮捕されてしまったのだ。

当然「当て逃げ」などではない。示談はすでに成立していたし、クルマが当たってしまったのは事実だが、ボクはどこにも逃げてはいない。事故の加害者がどこの誰かもわかっているのだ。これで「当て逃げ」と、警視庁発表を大々的に行ってのタイホはないだろう。

刑事訴訟法の上では、「逃亡のおそれがある」「証拠隠滅のおそれがある」という要件を満たさなければ、逮捕はできないことになっている。引っ越して行方をくらましていたわけでもなく、出頭の意志を伝えていたボクが、なぜ逮捕されなければならないのか。まさに不当な「懲罰的逮捕」じゃないか。

しかし、「当て逃げ」とされた報道はすさまじかった。

「当て逃げ」という語感が与えるイメージダウンはすごい。まるでボクが逃げ回って、犯行が見つかり観念した、と取られるようなデタラメ報道の嵐。たとえば「加害者がわからないまま事件になった」とか「警察に届けずに逃げた」とか。あげくには「宅八郎、緊急逮捕」(法律用語では、逮捕状を取る時間もないほど急を要する凶悪な現行犯逮捕を指す)とまで報じている。

さらに事故事実にしても、「車を追突させた」とか「ドアとミラーも壊した」などと、被害をできるだけ大きく大きく報じようとしていたが、実際はボディ横側の、中1日で修理が完了した程度の軽いキズだったのである。修理費用は9万3029円(あくまで相手方の見積もり)だ。

接触事故、そして、事故後の「特殊な事情」を説明しておこう。

事故発生は逮捕から逆上ること約3カ月前の、7月22日。ボクが車庫からクルマをバックで出そうとした時に、向かい側マンション駐車場に止まっていたクルマに接触してしまったのである。

しかし、この時点でボクは事故に気づかなかった。

ボクが乗っていたクルマは左ハンドルで、接触してしまったのは右後ろ角のバンパー。つまり死角に入っていたのも運が悪かった。また、排気音の比較的大きなクルマだったせいもある。気づかず、そのままクルマを発進させてしまったのである。つまり「事故」そのものを認識していなかったわけだ。これが後にとんでもないことになるとは、この時点では知る由もなかった。

ところが翌23日の早朝にボクが帰宅すると、向かいのマンションに住む、おばさんが飛び出してきて、スゴイ形相でにらみながら「当て逃げしましたね」と言う。相手のクルマをよく見れば、確かに左側前輪タ

イヤの約10センチ横側が傷ついている。ドアの横だ。その申し出で、ようやくボクは事故事実を確認したわけだ(法的な責任のスタート点)。

ボクは「ああ当たっちゃってたのかぁ」と思い、被害者のおばさんに「ごめんなさい。すみませんでした」と繰り返し繰り返し謝った。気づかなかったことを告げて、誠心誠意を込めて謝罪したつもりだ。だいたい隣近所でトラブルを起こすつもりもない。トボケて逃げるわけにもいかないだろう。

それでクルマの修理費を全額弁償するという「覚書」を書いて渡した。いわゆる示談交渉である。この時にはさすがのおばさんもわかってくれて、「当て逃げ」疑惑は解けた、ハズだった。何といっても、おばさんは「相手がいい人でよかったわ」と言ったのだ、この時点では。もっともおばさんの感情のあまりの起伏にどこか病的なものを感じたことは事実だったが。

弁護士によれば、法律的にはこれで示談は「成立した」のだという。

しかし、おばさんはすでに警察に届け出ていた。それでボクは「ボクの方からも電話しなきゃマズイですね」と言って、警察の交通課担当者の名前を聞こうとした。

「誰に電話をすればいいんですか」と。ところがおばさんは「それなら、私が電話をかけておきますよ。それでいいでしょう」と応えた。

ボクは「それもそうだな、そうかもな」と思い「じゃあ絶対にお願いしますよ。ボクも誤解は避けたいから」と応じた。ここはきわめて重要な点である。

示談ですんで良かった、と思っていた。ところがその後が大変だった。いきなり午前3時や朝6時に訪ねてきたり電話があったり、一般的に考えて常軌を逸した、おばさんの病的な態度に悩まされる。しかし

とにかく7月25日午前11時に、一緒に指定された修理工場へ相手のクルマを持っていく約束をしたのだった。クルマは勝手に持っていってくれ、というのでは誠意がなさすぎるからだ。接触事故に関してはボクが悪いのだからと、なかば呆れ、なかばあきらめていたのである。

しかし7月25日は悪夢の日になった。約束より1時間以上早い9時45分。ドアチャイムが激しく鳴らされ、ボクはたたき起こされた。インターフォンを取ると、おばさんだ。

仕事で遅くなり、朝6時か7時頃にようやく寝入ったボクは「約束は11時だったはずですが」と応えた。するとおばさんは「ちょっと約束より早いけど、代理人が早めに来ていますので、今すぐ出てきてください」と勝手なことを言う。電話予告もなく、おばさんは代理人と称する氏名不詳の男を連れてボクの家へやって来たのだ。

早すぎる。ボクは「約束は11時ですよね。今すぐ、と言われても困ります」と言ったが、おばさんは「でも代理人が来ているんだから」と言う。仕方がない。「とにかく急いで、そちらのお部屋にうかがうようにしますから、いったん戻って待っていてくださいよ」。

あわてて、とび起き、眠い目をこすって身支度。すると15分ほどたった午前10時頃、またドアチャイムが激しく十数回も鳴った。インターフォンを取る。

「今すぐ出てこい。工場へ行くぞ!」

スゴイ剣幕だ。ボクはまいりながらも、「アナタねえ、ボクは誠意を持って解決すると言っているんですよ。約束は11時だったのに、早く来て今すぐ出ろと言われても困ります。とにかく今急いで支度をしてい

ます。マンションの下へ降りて待っててください」と言った。
するとおばさんは急に「約束は、10時か11時と言ったと思う」と言いだした。ボクは困ってしまい、「いや、アナタが最初に月曜日ではどうかと言い、返してボクが月曜日だったら午後ではどうですか、と言ったら午前でないとダメだと言って、じゃあ遅めの11時ということで約束したじゃないですか」と応じた。
おばさんは一瞬言葉に詰まりながらも「いや、確か10時か11時と言った」と言い張る。ボクは「それにしても来たのは9時45分じゃないですか」と言うと黙ってしまう。それでボクは「とにかく今大急ぎで出ますから、お待ちください」と続けて告げた。
おばさんたちの非常識には困ったが、仕方がないと思い、着替えて顔を洗っていると、二人は施錠してなかったドアを激しく開いて、ずかずかと部屋に上がり込んできた。
「ちょ、ちょっと。何ですか」あまりのことにビックリしてボクは、洗面所から廊下に出た。「どういうつもりなんですか。すぐ、出てください」しかし男は退去どころか、廊下をこちらへ歩いてくる。その時におばさんもこちらをこわい顔でにらんでいた。
そして男は「うるさい。払え。クルマの修理費を払え。コノヤロー、払え」と、恐ろしい剣幕で怒鳴った。
「アナタ、自分がしていることがわかっているんですか。だいたいアナタはどこの誰なんです」とボク。
「てめえ、クルマをぶつけておいて、どういうつもりなんだ。じゃあ、金を払うつもりないんだな。払わねえんだな」と怒鳴って、男は突然「コノヤロー」と叫んでボクの顔を思い切り殴ったのだ！
「おれが誰だか、おまえなんかに言う気はないね。警察を呼べよ、おまえッ」

左アゴからほほにかけて、火が出るような激痛に苦しみ、ボクはうずくまった。
「前に、おまえはおれのクルマにもぶつけただろう。そうだよ。おれのクルマもぶつけたんだよ」「てめえはとんでもない大悪人だ」などと毒づき、男は怒鳴り散らしている。わけがわからない。まったく意味がわからない。酔っぱらってるのか。それとも薬物中毒か、とさえボクには思えた。
思い切りぶん殴って、言いたいことを言い放ったせいだろうか。「修理代金は払ってもらうぞ」と捨てゼリフを残して、二人は勝手に出ていってしまった。すぐに時刻を確認した。午前10時5分だった。
午前10時半過ぎ。ボクが部屋で顔をゆがめていると、電話がかかってきた。おばさんだった。何と代々木署に来ている、と言う。そして、あんな暴行の末にまだ「今から修理工場へ行くから来い」だのと言っている。ボクは電話機の録音ボタンを押して、先ほどの暴力行為の事実を繰り返し会話した。誘導して相手にも事実を話させる。テープに録音するためだった。
そして「あんなことがあったのです。今から工場へ行けるわけがないでしょう。それは承認しません」と言うと、おばさんは一方的に電話を切ってしまった。そして二人は、工場には同行する、という示談を無視して勝手に修理工場に持っていったわけだ。
この直後に、ボクはあまりにくやしくて、連載をしていたクルマ雑誌の編集者に電話をかけて相談している。また、何かあればと、ボクはこの事実をすぐに記録報告文書の形にしてワープロに入力した。その記録文書は、その後に、ボクが逮捕された後に代々木署に提出した。その入力日時を見て、さすがの警察と検察庁も証拠として調書に採用している。録音テープもある。編集者も証言を約束してくれた。
しかしボクとしては、刑事事件として二人を告訴するのは、隣近所同士でマズイと思った。ここは話し

合いで解決すべきだと。今思えば、この情けがマズかった……。
2日後の7月27日、おばさんの日産セフィーロは修理工場から戻ってきた。
その後、おばさんは毎日のようにボクの前に現れて、ボクのクルマにしがみつきながら「金を払えー」と泣きわめき、ボクが外出しようとするとボンネットに乗り上がって「近所のみなさん、助けてくださーい！」と絶叫し続けた。何回も何回も。発進妨害は重なって、ボクの愛車のボンネットは傷だらけになった。あまりにも病的なおばさんの態度だった。ボクはそのたびに相手をしなければならなかった。
「冷静になってくださいよ。ボクはお金を払わないなんて一言も言っていません。払うものは払いますよ。誠意を見せて全額弁償するという覚書も出してるじゃないですか。でもアナタたちがこの間ボクを殴ったことは何ですか。この間の暴行は何ですか。いったいあの男は誰なんです？」
男はおばさんが勤務する会社の社長だ、と言っていたが、本当かどうかわからない。また、「警察は、何をしてもいいから金を取っていいと言っていた。殴ってもいいと言っていた」とも、おばさんは語ったのだ。いくらなんでも本当だとは思えないが……。
そして「第三者立会いのもとで、冷静に話し合いましょう」とボクが申し入れても、興奮状態のおばさんには聞き入れてもらえないまま、時間が経過した。そして、代々木署はおばさんの被害届けを受けていたのである……。
ボクは示談というのは「誠意と誠意」によって出来上がると思っている。そしてボクは誠意を持っていたつもりである。こうした経緯で関係は破綻した。弁護士の見解によれば、これは「明らかに示談は成立している」が「事情によって、条件の履行が困難になった」といえるのだそうだ。

……そしてボクは逮捕された。事故事実はすべて認め、示談も成立しているのだ。こじれていた事情があるにしても、民事事件として解決されるべき事件である。いくら何でもおかしい。こんな事で逮捕されるなんて。そうこの逮捕には裏があったのだ……。

❷事件報道

全マスコミは「宅八郎、当て逃げで逮捕」と事件を大々的に報じた。

たとえば朝日新聞はこうだ。

〃タレントの宅八郎容疑者（三二）が二日、道交法違反（当て逃げ）の疑いで警視庁代々木署に逮捕された〃とした上で〃宅容疑者は容疑を認めているという〃と記事は書かれている（94年11月3日付け朝刊）。

他マスコミもほぼ同様であった。これでは、まるでボクが「当て逃げ」の疑いを認めている、と読めてしまう。何だそれは。

確かにボクの逮捕容疑である道交法第72条「報告義務違反」（事故不申告）の概念の中に、最も悪質なケースとして「当て逃げ」や「ひき逃げ」は含まれるのだろうが、ボクの違反事実はど

●朝日新聞94年11月3日

宅八郎容疑者を
当て逃げで逮捕

タレントの宅八郎容疑者（三二）＝■■、東京都渋谷区■■＝が二日、道交法違反（当て逃げ）の疑いで警視庁代々木署に逮捕された。

調べでは、宅容疑者は七月二十二日午後七時ごろ、自宅近くの路上で乗用車を運転、近くに住む女性会社員（四六）が止めていた乗用車に衝突し、会社員の車を破損させたが、同署への連絡をしなかった疑い。

同署によると、同署が任意で事情を聴くため、宅容疑者に再三出頭を求めたが、応じなかった、という。

宅容疑者は容疑を認めているという。同日夜、弁護士を通じ、「出頭要請に応じなかったのは、多忙だったためで、拒否したわけではない」などとするコメントを出した。

う考えても「当て逃げ」の概念の中には含まれまい。だって逃げてはいないのだから。
こんな簡単な集合論など吹っ飛んで、一気に「当て逃げ」と報じられ過熱していくあたりは、報道機関のマス・ヒステリーぶりを象徴しているようだった（第5章参照）。
また報道が「真実か否か、よりもニュースになるかどうか」によって作られるという〈真実〉をボクは再確認した。また「警察によれば……」という報道の問題も考えることになった。つまりウラを取らなくても、〝（警察発表など）ニュースソースから聞いた情報を、ニュースソースを明らかにした上で報道すれば、責任はニュースソースだけにあって、報道機関の責任は免れる〟といった無責任を知ることにもなった。
事件報道は「当て逃げ」ならぬ、記事の「書き逃げ」、電波の「流し逃げ」。
「気の毒な被害者」として報じられた、おばさんの話を検証するでもなく、そのままタレ流した情報はとんでもないものだった。
「私をボンネットに乗せたまま、宅は１００メートル爆走した」という物理的にも無理な話（おまえはスタントマン・千葉真一か）や、「宅にひき殺されそうになった」（それじゃ、殺人未遂だよ）、「オレの時間は高いよ。話したければ時間を買え、と宅に言われた」（仕事に行くので、今は話し合えない、と言っただけなのに）だのというムチャクチャな話が、センセーショナルに流されまくった。
そして、何と「宅が逮捕されて、私の気持ちは、せいせいした」とまで言っているのだ。えてして「おばさん」という人種は感情的だろうけれども、それにしても、この事故相手のおばさんの話はあまりにも度を越しているように思える。
それだけではない。事件とはまったく関係ない便乗報道として、ボクが住むマンションのオーナー婆さ

上●「スーパーモーニング」94年11月3日放送
下●「おはようナイスデイ」94年11月3日放送

んの発言もすごかった。乗ったことも見たこともないのに「宅の運転はヘタッピーだ」とか「部屋が汚い」「家賃が遅れた」だとか。あげくの果てに、見当もつかないが「母親らしい人を妻ですと紹介してマンションに入居した」（爆笑）だのといった、老人のカン違いやタダのグチまでもそのまま報じられてもいる。

もちろん、あまりのカン違いにはどう応えていいのかわからないものの、家賃が遅れた原因は、マンション管理会社が伝えてきた口座番号が間違っていて、振り込んだお金が銀行に凍結されていたからであり、クルマ雑誌でも連載するボクの運転はたぶんヘタなほうではない、とかいちいち応えていくことは可能だった。しかし、部屋が汚いのだけは事実だけど（笑い）、これらのことが交通違反といったいどう関係あるのか。これは明らかな人権侵害である。

こうした報道を受けて、ワイドショー報道などでは、無責任な司会者や文化人コメンテーターの発言も目立った。

日大法学部・板倉宏教授は「別件逮捕はあってはいけないことだが、よくあること」（11月5日付東スポ）とコメント（けっこう笑える）。しかし、それどころじゃなかったのは、7日放送『スーパーモーニング』の弁護士・

牧義行の発言だ。「警察は別件逮捕なんてしません」とか「リッパな犯罪、逮捕は当然」「懲役もあります」と飛ばす飛ばす（もう笑えないレベル）。ここまで完全に警察寄り（にボクには見えた）の弁護士もいるのかと驚いた。

また大宅賞作家の吉永みち子は3日放送の『スーパーモーニング』で「普通の人なら、この程度のことで逮捕ってのはありえないんでしょうけど、宅八郎なら仕方がないか」と、おたく差別発言（笑い）。3日の『めざましテレビ』で八木亜希子アナが「またですか」と言えば、あげくコピーライター・眞木準は8日放送『スーパーモーニング』で、「宅さんは、もうたくさん」と抜群のコピーセンスを披露してくれた。また心理学者・富田隆は3日の『おはようナイスデイ』で「宅八郎には、たしなめてくれるような人が必要だった」だって。ほっといてくれ。

しかし、深刻なイメージダウンを生んだ「当て逃げ」報道を訂正したメディアはなかった。報道によってみごと「当て逃げ犯」にされたボクの報道被害を、マスコミの誰も救済してはくれないのである。

③本件「小学館——週刊ポスト」事件

1994年11月2日午後11時45分。道交法違反容疑でボクが逮捕された当日の深夜、「宅八郎弁護団

と支援者グループの記者会見」が行われた（第3章「ドキュメント『逮捕』」参照）。
　この異常な対応の早さ、を不思議に思った人もいたかもしれない。なぜ、こんなに早く宅八郎サイドが会見を行ったのか。その理由は、10月からボクはすでに逮捕を予期していたからだ！　弁護団も支援団体も結成され、準備を進めていたからだ！（第3章参照）
　ボクは一部マスコミ関係者に「自分はもうすぐ逮捕されるんです」と事情を話し、10月中には支援者の本多勝一氏、中森明夫氏、大泉実成氏らから「不当逮捕に抗議し、宅氏を支援する声明文」を受け取っていたのである（第6章参照）。もちろん、これは代々木署の「報告義務違反」による逮捕であるはずもない。「報告」すれば「そんな逮捕」はストップできるのだから。あの逮捕は「別件逮捕」だったのである。
　予定された逮捕＝ボクが逮捕された「真の理由」は、警視庁本庁および小平署によって捜査されていた「小学館―週刊ポスト事件」の住居不法侵入などによる容疑だったのである。すでに8月から捜査が開始されていたその「本件」の取り調べは、何とこの逮捕2日前の10月31日にも行われていた。
　そしてボクは11月2日の逮捕の際、代々木署員に「2日前は小平署でご苦労さん！」と言われ、また弁護士はボクの逮捕を、当日の逮捕直後に、小平署から聞かされているのだ！　交通違反とは何の関係もない小平署がこれだけ早く、逮捕を知っているのはおかしい。ならば、青森県警だろうが、宮崎県警だろうが、全国どこの署でもボクの逮捕を知っていなければならないリクツになってしまう。
　その他にも、異例なことに、この軽微な道交法違反に対して警視庁本庁、検察庁の指揮が入って、送検前にあらかじめ検事が決定していた（通常、書類送検された事件は何人かの検事にアトランダムに配布されていく）ことや身柄送検までしたこと、また交通違反の調書に何と「業界恐怖新聞」が使われていたこ

となど、多くの状況証拠はまさに別件逮捕を指し示している（第3章参照）。
また、その後の調査によれば、あの事故相手のおばさんにもウラがあることもわかってきた。確かに、あのおばさんは一般的に考えて常軌を逸した病的な人なのだろうが、それだけではなかったのだ。ただし、そのことに関しては残念ながら今は書くことができない。
もちろん、警察もが認める形で「別件逮捕」が完全証明されたことは、この国の歴史上でも聞いたことはない。しかし、今回の事件について検証してみれば、恐ろしいことだが、いくら何でも誰もがこの事件は「別件不当逮捕」と思うことだろう。
しかし10月の時点では、支援者の誰もがまさか、警察が道交法違反で逮捕に踏み切るとは思ってもみなかった。別件逮捕をいくらか予期できたのは、極道出身の異色作家・安部譲二氏（前科14犯）だけだったのである。
では、本件「小学館―週刊ポスト事件」の容疑とは何なのか？
2年前に『週刊ポスト』から受けた報道被害に対して、ボクが小学館側の小牧デスクを調査・逆取材した件が、犯罪に問われ捜査を受けていたのだ（第2章参照）。
つまり、ボクが小学館という学習出版社社員・小牧の不倫スキャンダルを暴き、その記事を自分の新聞で報道し、その記事を持って、東京都下・小平市にある小牧の自宅を「今のお気持ちは？」と直撃取材したこと。これは、まるで今の報道のあり方そのものだ。
ところが、小学館の小牧は一言も話し合うでもなく110番通報、「住居不法侵入」として警察沙汰になった、というわけだ。しかし、2年前にボクは小学館側から、深夜早朝にわたってアポもなく、「取材」

として踏み込まれているのだ（住居侵入だ）。ボクはそれでも泣き寝入りせず、スジを通すために、何度も小牧邸前で警官隊と激突し続けたのである。

小学館側が警察と打ち合わせを繰り返していたことも調べの結果、判明している。また、小牧は元警察番記者らしいとのことだった。そして、確かにボクが警察そのものも刺激していたことも間違いない。出動したパトカーや警察官の写真をバシャバシャ撮って、業界恐怖新聞に掲載していたのだから……。

整理すると

①小学館側がボクに報道被害を与えた

②反論さえ封じられたボクは小学館側を逆取材逆報道して反撃した

③小学館側は一言もなくボクを警察力で排除しようとした

④小学館に動かされた警察はなりふりかまわず、別件でボクを逮捕した——ということになる。

これらの背景が、94年11月7日に行われた記者会見終了後に、ボクが小学館に討ち入り、抗議とともにポスト編集部を直撃逆取材した理由である。その模様は全国ネットのテレビや新聞でも報じられている（第4章参照）。

そして、この「週刊ポスト事件」という背景と全体像をみれば、今回の一件が単なる「道交法違反」では決してなく、ジャーナリズム、取材、報道といったものの根幹にかかわる、言論にとって重大な事件であることは明らかだ。

そう、この事件は86年に起きた「たけしフライデー事件」以上の問題をはらんでいる。スキャンダル報道に対して、たけしは暴力を持って応じ、そのことをして「報道のあり方そのものを問う」ことになった。

暴力に対して講談社側が警察に通報したのは仕方がなかったかもしれない。しかし、ボクの行為は言論による正当な取材活動である。これに対し小学館側は、言論でなく警察力という暴力でボクを排除しようとした。これこそが、より問題なのだと考えている。

そもそも、最初に小学館側がボクに対して犯した報道犯罪がどのようなものであったのか。そして血を流したボクがどう怒り狂ったか。ボクが復讐を誓って、3年間にわたってやってきた「報復取材・復讐報道」は具体的にどのようなものであったのか。その一部始終、詳細は本章に続く第2章に書き記した。

第2章 三年目の復讐

❶発端／小学館『週刊ポスト』の犯罪

あれは3年前。

小学館『週刊ポスト』の犯罪的な取材と捏造記事によって、あまりにも酷い報道被害を受けたボクは復讐を誓い、こんな原稿を残している。

〝何年かかっても必ずやる。いや何年かかけてやるつもりだ。思わぬ方法、意外な手段で何年かけても必ず復讐すると、宣戦布告しておく〟と（業界恐怖新聞92年6月号）。

「目には目を」。メディアに蹂躙された個人が、最後に責任追及する手段はそれしかない！

しかも相手も個人。「責任」は個人の人格にしかないからだ。被害を受けた時、ボクは法的措置（＝告訴・裁判）を講ずるという選択をしなかった。

そんなことをして何になる。小学館の顧問弁護士が出てくるだけだ。そして何年もかかって、結局「3行のお詫び」広告を出してもらっても、ボクはうれしくなかった。取材という形で、報道の名のもとに行われた「報道犯罪」に対して、ボクは「逆取材逆報道」を決意したのである。

決して泣き寝入りはしない。あくまでも、裁くのはボクだ！

さて、3年前にボクが『週刊ポスト』にやられた報道被害はどんなものだったのか? その前に、当時トラブっていたコミネ事件から説明しなければならないだろう。
92年春、ボクをめぐって大騒動が巻き起こっていた。すべてのスポーツ紙、女性週刊誌、写真週刊誌、そしてテレビ各局のワイドショーでも。
第一報は92年3月20日。「おたく評論家・宅八郎が週刊プレイボーイなどで活躍するフリーライター・小峯隆生から〈嫌がらせ〉を禁止する仮処分の申し立てを3月3日、東京地裁に起こされた」というものだ。「小峯の住む同じマンションに部屋を借り、生活妨害行為を行っている」といった内容だった。
ここから騒ぎは大きくなり、3月21日に日本テレビで緊急記者会見、翌22日に全スポーツ紙で報道、さらに翌23日には、ボクと小峯が同時に東京地裁に現れる場面もテレビ新聞等で報道された。しばらくの間は毎日のように取材を受けることにもなっていた。
ボクが彼と同じマンションに部屋を借りたのは事実だ。なぜ、ボクは小峯のマンションに移り住み「隣人」になったのか。
じつは90年末に、『週刊プレイボーイ』編集者・コミネからボクが脅迫された事件があった。そして、その直後にボクは反撃キャンペーンを開始している。ところが、もともとボクを脅迫していながら、いざボクが反撃しだすと、コミネは謝罪もせず逃げ続けていた。
ボクは筋を通したい人間だ。何とか突破口を見いだすため、素晴らしいアイディアを思いつく。それが小峯と同じマンションに引っ越し、隣人となることだった。ボクは当時、『噂の真相』で連載を開始した「業界恐怖新聞」でこのことを発表し、彼へのメッセージとしたのである。

〈追跡スクープ〉
元女性アシスタントが自首して告白！
ついに刑事告訴
宅八郎「いやがらせ事件」のぞっとする内情

●『週刊ポスト』92年4月17日号

【見出し】ついに刑事告訴・宅八郎「いやがらせ事件」のぞっとする内情
〈追跡スクープ〉元女性アシスタントが自首して告白！

コミネ事件についての発端は、『イカす！　おたく天国』（小社刊）に記している。また、隣人化計画以降の動きに関しては、いずれ3年間連載した「業界恐怖新聞」を単行本化するつもりなので、その中でより詳しい事情説明をしたい。

しかし、まさかコミネが言論人のクセに突然法律を持ち出し、仮処分申請などしてくるとは思ってもみなかった。しかも、コミネと小学館『週刊ポスト』が連係して、裏で恐ろしい企みを進行させているとはボクもわからなかったのである……。

『週刊ポスト』要約

『週刊ポスト』92年4月17日号

【リード】「小峯さんに対する嫌がらせは、宅さんの指示で私がやりました」——フリーライター・小峯隆生氏(33)が、一連の〝いやがらせ事件〟で、仮処分決定の出た〝おたく評論家〟宅八郎氏を警視庁管内の警察に告訴。何やら深刻な様相を呈してきたが、折も折、本誌に宅氏のアシスタントであった女性が、彼女だけが知る真相を証言した——。

【解　説】かなり大きい扱いの記事だった。表紙にもデカデカとタイトルが掲載され、また電車の中吊り広告、新聞広告などでも大きく掲載されていた。警視庁管内の警察とは、玉川警察署のことだ。

記事中の〝告白女性M〟というのは、アルバイトを頼んでいた女性で、その後に臆面もなく言いだした〝元恋人〟という存在ではなかった。その後確認すると、女性Mのしわざか、部屋が物色された形跡があったりして、結局ボクは、直前までハメられていることに気づかず、人を見る目がなかったことを反省し悔やんだがもう遅い。このポスト記事によって仕掛けられた、デタラメ報道がボクに与えた影響は深刻に大きかった。

おまけに、この女性Mに「言うことを聞かなければ玄関先の土に埋めてやる」とボクが言ったなどと、おどろおどろしくも、まるで連続幼女殺害事件の被告のように演出した内容。

また同時にポストと連動して、小牧と親しいレポーター梨元勝(代々木上原在住)によって、『モーニングシ

●『週刊ポスト』92年4月17日号表紙上部にデカデカと目立つ見出し

ヨー』（当時・テレビ朝日）でもこの問題を一方的にタレ流されている。

ポスト記事では〃ついに刑事告訴〃と書いているが、警察および検察庁は、告白女性Mの〃自首して告白〃した証言も「売名行為」のための虚言と判断した（後述39ページ）。当然、結果的にこの事件に関してボクに刑事責任は発生していない。

『週刊ポスト』92年4月24日号

【見出し】「究極おたく」宅八郎　本誌取材に〃一見〃鼠小僧で現われる！

〈なんともパスティーシュな事件〉

【リード】「嫌がらせを含め、小峯さんに対して罪悪感を持つようなことはしてません。彼女に命令指示した記憶もないんです」――〃おたく評論家〃宅八郎（29）は本誌先週号の元アシスタント・Mさんの証言に対して記者会見した。しかし、実際は劇画のヒーロー『8マン』のように颯爽とはいかないようで……。

「究極おたく」宅八郎 本誌取材に
一見
鼠小僧で現われる
〈なんともパスティーシュな事件〉
「いつも私に命令口調だった」

●『週刊ポスト』92年4月24日号

【解　説】「宅八郎（29）」という、まるで犯罪者のような表記。前号での中立をよそおった「氏」付け表記から一転して、呼び捨て表記に変わった。そこにポストのあわてぶりがうかがえる。ボクから反撃をくらっての怒りもあったのだろう。「宅八郎（29）」とはあまりにも悪意むきだしだ。しかし、そんな悪意とはうらはらに記事そのものに目立った内容はない。巨大出版社に反撃した怒りからか、強引に第2弾を掲載したようにもとれる。

このポスト2週分の、一方的でデタラメな捏造記事をそのまま受け売りで紹介し、加担発言をしたのが、自称作家・田中康夫と雑誌『創』の篠田博之編集長の二人だった。まだ真実がハッキリしない段階で、ポスト記事に何の疑問形もなく全肯定（つまり宅八郎全否定）をして、新聞や雑誌で発言したのだ。このことの被害は大きかった。よくまあ、天下国家を語る文化人作家だの、あるいは市民運動づら下げた雑誌編集長だのという「化けの皮」をかぶっていられるな。自らの言動に無責任・無自覚な報道加害者どもめ。

この二人とは違って、さすがに（？）思想家を自称する浅羽通明はミニコミ『流行神』で、独特の分析をしていた。ポスト記事に続く一連の報道の後に、「宅八郎、その不敗のパラドックス」という記事を発表。その中で〝宅八郎の無敵不敗のスタンス〟を論評している。ありがとう。確かにボクは無敵無敗です（笑い）。

一連のコミネ騒動の裏で動いていた人間が複数いることも、ボクにはわかっている。業界周辺をうろついているクズどもだ。コミネ代理人の弁護士に接触した人間、ポスト記者に接触した人間、『週刊新潮』などの取材に応えた人間……。いずれそいつらも処刑することになろう。

以下は『噂の真相』誌で連載された「業界恐怖新聞」（の一部）である。記事を初出発表した年月日と付記とともに掲載する。若干の訂正はやむをえなかったものの、おおむね原文のままである。

② 処刑宣告

週刊ポスト記事大反論 告発女Mの裏にコミネの存在が!!

——「業界恐怖新聞」92年6月号

業界恐怖新聞

週刊ポスト記事大反論

告発女Mの裏にコミネの存在が!!

不可解な事件続発!! 宅のGF宅にも記者

ポスト記者 中島と生田に復讐を!!

●『噂の真相』業界恐怖新聞92年6月号 ポスト現場記者だった中島みなみ・生田弘樹処刑編

「宅八郎の歴史」を考える上では、小峯闘争の裏に告白女性が登場したのは、面白い急展開だったように思う。

もちろんボクは怒りを忘れたわけではない。いや、むしろ怒りの炎は燃えている。

2週にわたって掲載された『週刊ポスト』の記事。これほどデタラメで一方的な記事をボクは見たことがない。いくら何でもここまで酷いとは思わなかった。50%の悪意と50%の興味本位ならいい。しかし、ポストの記事はボクを「悪人にしようとする」100%の悪意がなければ書けないだろう。

何しろ告白女性Mの342行にもおよぶ発言のウラは一切取ってない。しかもボク自身のコメントはたったの7行だったのだ。

ポストの誌面では一切隠されていたが、最も重要なのはこの記事の裏に小峯がいるとしか思えないことだ。元々、告白女性Mと『週刊ポスト』には接点はありえない。最初にMと小峯が打ち合わせを繰り返し、次にポストへ紹介されたのだろう。『週刊プレイボーイ』ではなく。

そう、あの記事作成には小峯が立ち会ったのだ。つまり「小峯―M―ポスト」が悪意のもとに連合してきたわけだ（その後、梨元勝の『モーニングショー』が加わった）。

このことを知った時は信じられない思いがした……。

あれは3月30日の午前3時くらいだった。小峯隣人マンションにいたボクをポストの記者が突然、約束もなく訪れたのは。

さてその前に、おかしなことがあった。

3月29日の朝早くに帰宅したボクはジュースを買うため、すぐに家を出ようとした。すると、ドアのノブに噛んだチューイングガムがべったり、くっついていたのである。帰宅してから、何分もたっていないのに、だ。

●中島みなみ（左）と生田弘樹を殺す！

まるでボクが帰宅するのを監視しながら待っていて、すぐにいたずらしたようだった。奇妙だった。

そして夕方に友人がたずねてきた。それで二人で外出しようとすると、またもガムがノブにグルグルとしつこく巻き付けられている。雨が降っていて、外から誰かが来た気配はない。同じ建物に住む小峯のしわざ？　でもまさかね。実をいうとボクはドアの前にビデオカメラを仕掛けていたのだ。犯人が映っていればいいが……。

そして友人は帰り、その日ボクが寝ていたらチャイムが鳴った。30日午前3時くらい。

キーを開けると、勝手にずかずかと部屋の中にまで入ってきて、ようやく名乗る。約束もない真夜中の来訪者はポストの中島みなみ、生田弘樹と名乗る記者であった（名刺の連絡先として編集部・小牧の名が書かれていた）。生田は名刺では記者となっているが、カメラマンだ。

不審がって「出ていってくれ」と応じた。しかし、1時間後に再度やってきた彼らは、「とにかく写真撮影しましょう」と言った。一応「取材」なのだが、ボクの話をまともに聞いている気がしなかった。写真が撮りたいだけ、という感じ。結局、写真撮影をされてしまった。

（※第1弾記事が掲載されたポストは4月4日に発売されたから（正式発売日は6日）、この日、3月30日は印刷の時間を考えても最終締め切りまでギリギリの日程だったことは明らかである。となれば、取材

とはいっても記事の大枠はすでに出来上がっていて、ボクの写真だけが欲しかったのだろうという直感はズバリ当たっていたのである。)

不可解な事件続発!! 宅のGF宅にも記者

ヘンだ。ボクの直感が奇妙な危険信号を鳴らし始めていた。

それまで、ポストからは一度も電話連絡を受けたことはない。しかし、この二人はボクの杉並の家にも行ってボクを待っていたのだという。ボクは、いったん拒絶しかけた態度を保留することにして、様子をうかがうことにした。

「小峯さんにも取材したの？」

そう聞くと、何だかあわてて「ええ、まあ。あの来週にでも」という(※来週では、当然締切りには間に合わない)。実は、彼らは小峯と打ち合わせていたのだろうが……。

ボクにいたずらされていると主張する小峯事件である。何の気なしに「ボクだって、いろいろいたずらはされてますけどね」とボクは言った。

すると「ああ、チューインガムのことですね」いきなり中島と生田が言った。どうして。ボクはまだガムの話はしていない。なぜあのガムの件を知っているんだろう。

張り込んでいたから？　じゃあ犯人も見ているはずだ。おかしい……。

ボクは二人のポスト記者が帰った後、あわてて遊びに来ていた友人に連絡を取ってみた。すると、実は

部屋から帰る時に不審な人物を見たという。それもボクのドアが見える場所にいたと。友人が見た不審な人物の特徴はポストのカメラマン生田弘樹に酷似していた。しかも自分をつけてくるような行動をとったという。

ボクの疑惑はほとんど確信に変わった。

もしかしたら、ボクがいたずらを小峯のしわざだと思って、彼の部屋のある6階へ下りて様子を見に行くところを撮りたかったのではないか。中島がガムを使い、下にいる生田がボクを撮影しようとしたのではないか。

それにしてもまるで現実感がなかった。まるで安っぽいスパイ映画かマンガだ。週刊誌記者がこんな下らないことをわざわざするだろうか。これを読む読者も現実のことと思えないかもしれない。

しかしその後、ドアの前に仕掛けたビデオカメラはガムをつけた人間を捕らえていた。残念なことにややピンボケだったが、そこに映っていた男は中島そっくり。

さて、件のチューインガム記者・中島みなみと生田弘樹はどう動いたか。

ボクのガールフレンドの一人を襲撃したのである。彼女は大学4年生で家族といっしょに住んでいる。その家庭を、中島と生田は夜中の12時すぎから深夜にわたって、再三再四朝まで訪問して責めたてたのだ。

そして朝になってからも1日中、いや何日間かにわたって家の前にポスト契約の黒塗りのハイヤーを停めて張り込んだという。彼女が断っても断っても、中島は何日も家のドアの前からドアスコープをのぞき

ながら、「出てこい」と携帯電話でしつこくかけてきたりもしたのだ。
相手は一般人だ。こんな酷い「取材」があるか。
しかも彼女自身がいない時を見計らってガム記者・中島は家に上がり込んでいる。母親を狙い撃ちして追い回し、
「大変なことになりますよ！　おたくの娘さんは宅八郎にひどい目にあってるはずだよ！」
などと、あることないことを言ってさえいるのだ。
彼女は大学4年生で就職を控えている身だ。この攻撃によって涙を流しながらボクに電話をかけてきた。彼女はポストの張り込み取材攻撃で外出することもできず、第一志望の会社訪問をあきらめた。ポストによって就職活動を棒に振らされているのだ。
これはもはや人権問題である。ボクもつらかった。そして彼らポストがボクに対して100％の悪意を持っていることもよくわかった。
中島らが、彼女の住所をなぜ知っていたか。例の告白女性Mはボクの部屋をあさっていた。そして住所録から女子学生の住所を盗み、酷い手紙を出したり、いやがらせの電話をかけたりもしている。このMがポストの記者に住所を伝えたのである。
不安におののき、泣きじゃくる女子学生だけは守ってあげなければならない。
そこでボクは中島と生田に逆襲することにした。3月31日夜おそく、彼女がポスト記者に呼び出されたレストランにボクと仲間たちは待ち伏せたのだ。このことは第2弾のポストに書かれていた（8マンのように颯爽とはいかない鼠小僧と）が、事実はちょっと違っている。

中島と生田のうろたえぶりは痛快なほどだった。人を罠にかけることを専門にしている人間は反撃には慣れていないのかもしれない。
二人が来てすぐに写真とビデオ撮影を開始した。
「パシャパシャ!」
何が起きているのかわからない中島と生田。「な、何ですか」と言ったのは、しばらくしてからだった。人間はあまりに意外な状況に立たされた時、ポカーンと笑ってしまうようだ。撮影を終了して帰ろうとすると、ようやく懇願をはじめた。
「や、やめてくださいよ。ど、どこの所属の人なんですか」と中島。「写、写真なんか撮っていいと思っているんですか」と自己矛盾にも気づかずカメラを振り回す生田。
ボクは生田に突き飛ばされた。暴行である。
「オレやだよ~。こんなのやだよ、中島さんやだよ~」
生田は泣きそうな顔で叫ぶ。
「ル、ルール違反じゃないかッ。ルール、ルールッ」とチューインガム記者の中島は叫ぶ。
ボクは彼らがいつもやっている手段をとっただけだ。
「何がルールだ。そっちが勝手に書くんなら、こっちにも反論を書かせろ」と、ボクは叫び返す。
二人はボクの要求に答えようともせず、しつこく食い下がっていたが、ボクらはさっさと帰ってしまった。しかし通行人に化けたボクの仲間が彼らを尾行していたのだ。
二人はお互いの恥を隠そうとひきつり笑いをしながら、中島が運転する白い乗用車に乗って帰っていっ

た……。

さて。中島みなみ、生田弘樹を知る人、二人の取材を受けたことのある人、受ける予定のある人はボクに連絡してほしい。

ボクは今回の騒動で小峯に加担したすべての人間たちを絶対に許さない。

ただボクは事を急がないことにした。何年かかっても必ずやる。いや何年かかけてやるつもりだ!

それは3年後、いや5年後かもしれない。中島、生田ほかの未来が楽しみである。

思わぬ方法、意外な手段で何年かけても必ず復讐すると、宣戦布告しておく。ボクは小峯の隣人になった男だ!

【付　記】その後いったん騒動がおさまった頃になって、告白女性Mからザマアミロとボクを嘲笑する手紙と写真が送られてきた。その手紙の文面は恐ろしいことに、ボクを陥れる準備は91年12月1日から始めていた、というものである。そして、そのため小学館から多分な謝礼を受け取ったことなども記されていた。また驚くべきことに何と、コピーしたカギを使ってボクの部屋(小峯マンション)に、見知らぬ複数の人間が入り込んでいる写真も同封されていたのである(それらの明白な不法侵入者たちが、ポスト関係者であるかどうかは不明だったが)。すべては計画的にはめられた罠だったのだ。

警察および検察庁はこの手紙を資料として重視。そして、ボクが東京地検の事情聴取に応えた際に、担当検事は「お気の毒でしたね」と言いながら、さらに驚くべきことを話した。それはポスト記事では〝ついに刑事告訴〟とボクを陥れるように書いているが、そもそも小峯の刑事告訴は、じつはこのポストの〝スクープ記事〟が

掲載された後になされたようなのだ。
あんまりな話だ。（刑事）告訴事実があって、その情報をスクープするというなら、まだわかる。しかし、それが逆ならば、言ってみればポストと小峯隆生が〝スクープ記事を書くため〟に強引に虚言にもとづくデタラメな告訴をやらせた、ということになるじゃないか。これはまさに犯罪報道ならぬ報道犯罪だ！

③史上初誌上ガン告知

——「業界恐怖新聞」92年11月号

「週刊ポスト」小牧入院　小牧さん、あなたはガンです！

春のコミネ大騒動の際に、ボクに対する悪意のみでまったくデタラメな一方的記事を掲載した『週刊ポスト』。その記事を書いたのが悪徳記者・中島みなみと生田弘樹である。ボクが本紙6月号で事実を暴露し反撃、この二人を処刑したことは本紙愛読者なら記憶にあるだろう。
特に許せなかったのは、ボクのＧＦ（の一人）を襲撃した事実である。そのあまりにも犯罪的な取材行為をボクは絶対に許さない。
悪徳記者二人の調査は続行中だ。そして二人に犯罪行為を命令指示した担当責任者が『週刊ポスト』編

集者・小牧三平なる人物である。

小牧は白髪まじりの初老の男。さるスポーツ新聞記者を経て、ポストの専属記者となり、あまり前例のない形で小学館の社員になった人物だ。いわば、社員編集者になれなかった男・コミネの憧れの人、と言えなくもない。

最近では桐生裕子ネタや若人あきらネタ、村西とおるスキャンダルを担当している。そのデタラメさからも、小牧の悪名は高くウラミを持つ者も多いようだ。

またテレビ朝日『モーニングショー』のレポーター梨元勝とも親しく、ポスト発売日の月曜日に、このインチキ・ワイドショーは同じネタを放送しているわけだ。テレビ朝日サイドから小牧に対して金銭が支払われていると疑われてもしかたがないだろう。小学館関係者の方には調査をオススメする。

さて、その小牧三平が胃の不調を理由に世田谷区桜丘×丁目の××胃腸科病院に通院し、検査を受け

業界恐怖新聞

「週刊ポスト」小牧入院

小牧さん、あなたはガンです！

●『噂の真相』業界恐怖新聞92年11月号　死ね、小牧三平！

ていた。知人の紹介で、ここの某医師をもともと知っていたために小牧は同医院を選択したようである。
ところでこのボクは長期にわたって小牧の監視尾行調査をしていたのだ。ボクを敵に回したことを、後悔させてやろう。復讐してやる。ボクにはその「権利」があるハズだ。
ある日、××病院に入っていく小牧を確認した。最初は誰かの見舞いだろうな、と思っていた。そして監視を強化したところ、彼はその病院に通いだしたのである。
おかしいな、何だろう？　ボクの背スジにゾクゾクするものが走った。そして、ついに先頃9月半ばに小牧三平は同病院の集中治療室に入った。精密検査を受けるために。
ところで、もちろんボクが追っているのは小牧だけではない。コミネに加担したすべての人間どもに告ぐ。
「次はおまえだ！」
宅八郎の「病院に行こう！」というわけで、小牧にウラミのある人は病院に行ってみるといい。しかし、さらに調査していくと『週刊ポスト』のガンとも言われている、この腹黒い男の腐った腹の中身が判明してきたのである。
病院の担当医師としてはどうしても本人には、病状の真実を告げられないでいるのだが、フッフッフッ。このボクが教えて、あ・げ・る！
「小牧さん、本当は、アナタはガンです！」
一応、担当医師は本人には胃カメラの映像を見せた上で、胃潰瘍だと説明したらしい。しかし事実は胃ガンであり、すでに手遅れの状態だという。また、未確認ながら、カルテにはガストリック・キャンサー

（英語名）を意味する「ＧＣＡ」という記述があったとも、マーゲン・クレプス（独語名）を意味する「ＭＫ」なる記述があったともされている。

小牧は入院時の精密検査にあたっては、胃カメラを飲むのと同時に肛門からカメラを入れて（グエッ）、腸の検査も受けているのだった……（医療関係者の証言）。腸にガン細胞が転移しているかどうかを見るらしいのだ。肛門からの検査を実施することは胃潰瘍ではほぼないらしい。やっぱりガンだ（笑い）。

ハハ、天罰が下るって本当にあるんだなあ。宅八郎は怖いんだぜ。ボクの呪いは小牧に通じたようだ。「腹黒い男が胃ガン」とはね。

小牧はタバコの吸いすぎは体によくないな、と気にかけていたようだが（現在はマイルドセブン）、腐った肛門野郎に言っておく。

「腹黒いアンタの腹の中はもうボロボロだよ！　腐っちゃったよ！」

ガン細胞の奇妙な特性からか、自覚症状は思ったよりも軽く、歩行や会話に支障はないようだ（あくまでも現在のところは！）。しかし、医療関係者は入院治療が無駄だとなれば退院させてしまう、という。仮に、小牧がポスト編集部に復帰したとしても、それは「手遅れ」を意味しているだけなのだ。ハッハッハ。

病院には、たびたび『週刊ポスト』編集部の彼の同僚部下たちが見舞いに訪れ、指示を仰いでもいるのだが、この本紙「業界恐怖新聞」を編集部の誰が小牧本人に見せるのか、興味深いなあ。クックックックー（♪青い鳥〜）。

肛門男・小牧よ、この「業界恐怖新聞」を読んで苦しむがいい。疑心暗鬼にかられる小牧が目に浮かぶ。

家族も医師も誰も本当のことなんか教えないぜ、あんたにはな。
　どんな治療をしたところで、
「無駄！」
　病院関係者の口は固い。主治医の証言は取れなかったために、ガンの可能性は80％としておく。小牧よ、よかったね。20％は生き延びる可能性があるみたいだよ〜ん。

【付　記】その後、小牧について記したのは「業界恐怖新聞」ではなく、なぜか『週刊文春』（94年1月13日号）特集「こいつだけは許せない！」だった。原稿のタイトルは「スポーツ選手食いのピカレスク女が許せない！」。その頃、あいついで起こったスポーツ選手をめぐるスキャンダル事件について書いたコラムだ。
　角界では貴ノ花の「不倫」騒動、曙の結婚騒動、そして球界では（元）阪神・岡田彰布の愛人恐喝騒動である。このうち最も悪質で凄かった事件、（元）阪神・岡田彰布の愛人恐喝騒動に関して、『週刊ポスト』の小牧三平が関与していたのだ。
『週刊文春』に書いた記事の岡田事件の部分を以下に要約しておこう。
　事件は『週刊ポスト』（93年11月26日号）の糾弾スクープ第1弾に始まる。そのタイトルは「愛人が告白、私は岡田選手と阪神に〝性の玩具〟にされた！」。

まるで同誌名物ヘア写真以上に醜悪な小牧班（スキャンダル担当）による〝スクープ記事〟だったが、これが大ポカ。小牧デスクの報道被害者として、まったく可哀相だったのは岡田さんだ。

ポストでは「妊娠→中絶→手切れ金200万円」という女の一方的な言い分を書き連ねた糾弾お決まり告白だったが、その女はウラがありすぎる悪魔のような女だったのだ。ポストに対抗する形で『夕刊フジ』が連日、女の「素顔」と「前科」、「恐るべき過去」を暴き出していった。

「女のバックに大物総会屋が登場」
「明石家さんまから過去に1000万円取っていた」
「恐喝で逮捕された前歴」
「虚言癖アリ」などである。

この事件に関しても女は恐喝容疑で当局に事情聴取を受けた。小学館『週刊ポスト』はまるで犯罪の片棒をかつぐようなマネをしたのである。そこで、『夕刊フジ』報道を受けてマズイとあせったか、次号でのポスト第2弾記事は一転して、知らんぷり。一方的に女に加担していたクセに「どっちもどっちだ」などと言いだして誤魔化して打ち切った。

毎週毎週ヘア写真さえ載せておけば売れると思って、『週刊ポスト』はまんまと女の口車に載せられて醜態をさらしたのだった。

小牧は長期にわたって『週刊ポスト』編集部で、報道犯罪とも言える記事を作り続けてきた。彼はエログロ記事やゴシップ、スキャンダル報道の担当者である。大手出版社㈱小学館の名前の裏側で、小牧がやってきた

ことはまさしく「報道犯罪」と言うべきものだ。この記事の岡田選手恐喝事件では、何と、小牧は記事担当者として、この女を熱海や山中湖のホテルに囲って岡田選手への恐喝行為を助けていたのである。

彼女は結局、恐喝罪で逮捕起訴された。恐喝という犯罪の特性と岡田選手の受けた報道被害を考えれば、『週刊ポスト』も共犯だといえるだろう。女は『週刊ポスト』スクープ記事によるダメージ効果をダシに岡田選手を恐喝したのだから。こんなことはマスコミにあっても許されることではない。無責任さを恥じろ！

④復讐取材・報復報道

――「業界恐怖新聞」94年3月号・9月号～10月号

㊪Ⓕⓒ12月24日クリスマスイブ、その日ボクは…

●ところで、12月24日クリスマス・イブを皆さんはどうお過ごしでしたでしょうか。ボクは夜遅くまでテレビの仕事（『ビートたけしのお笑いウルトラクイズ』スタジオ収録）のために、日本テレビの生田スタジオ（遠い）にいました。が、その後は大急ぎで東京へ戻って、都内の某高級ホテルで一夜を過ごしてしまいました。フフフ。今回は書きませんが、そのうちにそのホットな夜について白状してしまう予定です。うふ。

●生田スタジオをタクシーで出る時に「行き先は某高級ホテル」ということで、制作会社ワークスの美人デ

スク・安徳さんにからかわれちゃったゾ。（「業界恐怖新聞」94年3月号 (宅)ⒻⒸ）

【付記】処刑の予告だった。発表を待ったのは完全処刑のために、小牧が横領したデート代を精算し終える必要があったからだ。ところが、その後『噂の真相』誌に、4月号・5月号を休載処理されたために大幅に日程が狂ってしまい、報告が遅れた。しかし今ではスクープが遅れたことも逆に効果的だったような気もしている（「夏のクリスマス」というタイトルを含めて）。そして、攻撃は夏に始まった……。

夏のクリスマス！ 週刊ポスト小牧処刑①

宅八郎の危険なページ

業界恐怖新聞

編集・発行 宅八郎

夏のクリスマス！

週刊ポスト小牧処刑①

不倫と業務上横領！

●『噂の真相』業界恐怖新聞94年9月号　この記事が、悪魔の「宅」配便になった

メリー・クリスマ〜ス！

桑田佳祐ひきいるKUWATA・BANDには『メリークリスマス・イン・サマー』という曲がある。季節はずれの真夏のクリスマス・プレゼントを、ボクも贈りたい。本紙愛読者みなさまに。そして『週刊ポスト』編集部の小牧三平へ！

以前（2年前）ガン告知した小牧。しかし惜しくも、手術で肛門切り取って完治、のうのうと現場復帰した小牧に、だ。

さて、読者の皆さんは去年のクリスマス・イブをどう過ごしていただろうか？

この新聞、そしてボクの熱烈なファンは覚えているかもしれない。ボクがかつて、クリスマス・イブを都内の高級ホテルで過ごした、と記述したことを（94年3月号）。

ボクは一晩中あるカップルを監視していたのだ！　クックックッ　クー（♪青い鳥～）。笑いが止まらない。

今、ボクはこの小学館社員の業務上横領疑惑と不倫を告発せねばなりません。

小牧ィ！　ようやくほとぼりが覚めたと思って安心してんじゃねえぞッ！

かつて、きさまはコミネに甘い言葉で近づき、ボクを罠にかけ陥れようとした。またボクと親しかったというだけで一般女子大生、そしてその母親までも狙い撃ちにした。

ボクは絶対に許さない。元部下の中島みなみ、生田弘樹（※二人は『週刊ポスト』から離れていた）と共に犯罪的取材、歪曲記事の専門家のきさまが、ガンでも死なないのなら、このボクが殺してやる。

業界恐怖裁判でボクはきさまに死刑を宣告する！

この裁判の検察官はボク。裁判官もボク。そして死刑執行人もボクだ!!（弁護士はいません）

93年12月24日。その夜、ボクは仕事で日本テレビの生田スタジオ（川崎市）にいた。今日は特別な夜だ。決して逃がしはしない。ボクはスタッフ3名の協力で、小牧を完全包囲することにした。

1名は車、1名はバイク、そしてもう1名は歩行（あるいはタクシー）要員である。彼らはカモフラージュされた無線機（バイクはヘルメット内蔵型）、携帯電話、秘密撮影用に改造特製した8ミリビデオなどを装備していた。ビデオカメラは、撮影ミスをふせぐためだ。また、今回は最後まで本人には気づかれないで証拠を押さえたかった。写真のようにフラッシュをたくわけにはいかない。

年末の12月24日だというのに、小牧はポスト編集部で夕方まで仕事をしていた。

生田スタジオにいるボクに、随時ターゲットの動きが電話で報告される。

「宅さん、小牧が今、神保町の小学館を出ました」

事前の情報はあった。都内のレストランを当たった結果、銀座の三笠会館の中にあるフランス料理店に「12月24日、小学館の小牧で2名」という予約が入っていたのだ。そこで、主要スタッフは銀座で待ち伏せ、張り込むようにした。

そして当日19時。ところが、何と小牧はガイジン女を連れ添って、やって来た。思わずスタッフは目を疑う。まさかそんな。なぜ、外人なんだ？　あまりに意外な展開であった。外人だとは。

小牧と女は初めて来たせいか、2階フロアへの出入口を間違えて階段で中2階まで上がった。そして階段を再び1階に戻ってから、エレベーターで2階のレストランへ向かった（この具体的記述に本人は衝撃を受けるはず）。

ボクは、お笑い番組収録の合間をぬって、川崎市にある生田スタジオから指揮をとっていた。自分が完全監視下に置かれていることも知らずに、小牧と外人女はテーブルについて、食事をしはじめる。この日、二人が頼んだクリスマス・メニューは以下の組み立てであった。

1. ホタテ、あわびの温オードブル
2. わたりがにのスープ
3. 伊勢エビ
4. シャーベット(口直し)
5. 和牛ヒレステーキとフォアグラ・テリーヌ(この日のメイン・ディッシュ)
6. チーズ
7. デザート&コーヒー

このコースで一人1万5000円、二人で3万円という意外に安く思える値段設定であった。そのためか、予約は前日にはいっぱいになっている。

そう小牧は、イブのために、年齢もかえりみずに、しっかり予約を押さえていたのだ(笑い)。バブルの時や、若者ならば、いざ知らず。小牧のまるで『ホットドッグ』や『ポパイ』ばりのマニュアル君デートは苦笑モノだ。

そして21時30分、ついに小牧と女はテーブルから立ち上がった。その後の「楽しみ」を想像してか、イヤラシイ大人の笑みを浮かべている。

小牧は目の前にいる外人女を、今夜の「獲物」と捉えているのだろう。しかし、自分自身が、その聖なる

夜の「醜い獲物」だったとは気がついてはいなかった様子だ。

不倫と横領を暴く

監視の網は張りめぐらされた。
今夜、もうこの生贄は悪魔の網から逃れることは、決してできないのだ……。
そして小牧は会計をすます。ここが重要だが、小牧はしっかりと「小学館あて」の領収書を取っていた。後に「取材」と偽って、会社の経理部に回すつもりなのだろう。
編集者であれば、プライベートな出費の領収書で、領収書の取れない取材の帳尻を合わせることは、さほど責められることとも思わない。しかし、こうして公的に媒体上で書かれることは問題だ、と小学館経理部が判断することは想像に難くない。
そうです、小牧さん。アナタのしていることは明白な「業務上横領」です！
当然すでに経費精算処理されていると思われるので、小学館経理部の責任者は「三笠会館」という伝票を御確認してみるといいでしょう。
そして小牧は、外人女のために扉を開けてやる。そのキザな態度が板についていて、笑う。今宵は素敵な夜だ。
「カモーン！」
小牧は、はっきり言って爆笑ものの声を外人女にかけて、店を出た。

「商談成立」か。
そして、醜い初老の男と、いかがわしい外人女のカップルは、クリスマス・ソングが流れ、人であふれかえる銀座の街を歩きだした。時折、女の肩に手を回しながら、いとも楽しげに二人は喧騒の中を歩いていく。
いったいどこへ行くつもりだろうか。このマニュアル君がホテルへ行ってくれれば、こっちの狙いどおりさ……。
そしてこの頃、ボクは生田スタジオから都心に向かって疾走する車の中にいた！
待ってろ小牧、今すぐボクが行く……（以下次号）。
※本紙は、小学館経理部および、東京都小平市の小牧夫人にもお届けしております。

サタンが街にやってきた 週刊ポスト小牧処刑②

♪ジングルベール、ジングルベール鈴が鳴る～♪
去年のクリスマスイブに、ボクは『週刊ポスト』編集者・小牧三平の不倫デートを尾行監視することにした。その記録を先月からお届けしている。読者は「宅八郎は半年以上前にこんなことをやってたのか！」と驚いただろう。悪魔の底知れぬ執念に、めまいを起こしただろう。
しかしページを見て最も驚き、目を疑ったのは当の小牧本人だったに違いない。

小牧よ、戦慄し絶望の淵に自らが立つことを確認するがいい。かつて卑怯な手でボクを陥れようとしたキサマを、ボクは絶対に許さない。

かくして聖なる夜、悪魔（サタン）は降臨した！

93年12月24日。

「カモーン！」

小牧が〝商談〟の成立した外人女を呼び寄せて、歩いていく。若い恋人達でにぎわう銀座の街でも、二人は際立って、いかがわしく見えた。小牧の顔がだらしなく笑っている。

たっぷり2時間半のディナーを楽しんだ小牧と女がフランス料理店を出たのが21時半頃。そして二人は有楽町駅前でタクシーに乗り込んだ。わが監視スタッフの一人はバイクで後を追う。不倫を乗せたタクシ

業界恐怖新聞

サタンが街にやってきた

週刊ポスト小牧処刑②

不倫ホテル愛欲の21階

●『噂の真相』業界恐怖新聞94年10月号

ーに悪魔のバイクがピタリと尾いていった。
その頃。川崎市の生田スタジオを出た車は、調布インターから中央高速道に入った。それまで携帯電話で指揮をとっていたボクは、ようやくハイウェイを都心に向かう。
「銀座から小牧はどっちへ向かったんだ！」
「わかりません。まもなく、追尾したバイクから無線連絡が入ると思われます」
小牧がどこへ行こうと地獄の果てまで追い詰めてやる。死ね。今日がきさまの命取りになる日だ……。
小牧と外人女を乗せたタクシーは銀座の街を抜けて、内堀通りから青山通りへ。そして永田町を抜けてゆく。
22時。ついに、タクシーは紀尾井町のホテル・ニューオータニへ到着した！
ボクの乗った車は高井戸から首都高に入って、都心めがけて走る。その時だった。
「た、宅さん！　ホテル・ニューオータニです。今、小牧がホテルに入りました！」
「何、しかし都内主要ホテルは全部調べたが小牧の予約はなかったぞ。とにかく今すぐニューオータニに行く」
どちらにせよ、これでもうヤツは袋の中のネズミだ。ボクは思わず笑みをもらす。
小牧は女をエレベーターの前に待たせ、一人でチェックイン・カウンターへ行く。そこでフロントと小牧は軽くモメた。小牧が偽名で部屋を予約していたからだった。
しかし「支払いは小学館の週刊ポストだから」と大威張りで小牧が言うと、ホテル側も何とか納得して、無事にチェックインをすます。外人女を連れててスゴイ神経だ。支払いは予想どおり会社持ち。小学館は

太っ腹な会社である。でなければ、小牧のしてることは「業務上横領」だ。
バイクを降りた追跡者がすべてを確認していた。
「カモーン、レッツ・ゴーッ!」大声の上にスゴイ発音で外人女を呼ぶ小牧。
22時10分。こうして不倫カップルはタワー客室の21階の部屋にチェック・インした。しかし、愛欲の21階に向かって上昇するエレベーターにはカップル3組とヘルメットを持った小汚い男が乗っていた……。

不倫ホテル、愛欲の21階

25日午前3時、ニューオータニ。悪魔が監視するホテル。日付が変わっている。家族のいる小牧は女を残して帰る可能性もあった。いつ出るかわからない。油断はしない。
ホテル中がクリスマス用に装飾され祝福されている。ホテルマンの不審な視線を受けながら、ボクたちはクリスマスイブを過ごした。
午前9時30分。眠い朝だ。四谷側玄関と赤坂側玄関の二手に別れて待機していた。赤坂側の無線機が鳴った。
「宅さん、小牧が出ましたッ!　こっちです!」
「わかった!　今そっちへクルマを回す!」
車を急発進させ、約2分後には四谷側の表玄関にクルマをすべりこませた。すぐにスタッフの監視員が駆けつけてくる。

「ヤツはまもなくです」
「支払いは？」
「小学館」
先月に続き、小学館経理部はホテル・ニューオータニの経費伝票を確認するように。
来た！　小牧と女が姿を現した。情事の後味を思い出すような、軽い足取りだ。
小牧たちが乗り込んだタクシーに続いて、ボクはゆっくり車を発進させる。タクシーは四谷を越え、新宿方面に向かった。尾行はバイクとの両面作戦だけに余裕だった。
新宿駅南口に差しかかる。降りるかもしれない。監視員に緊張が走った。しかしタクシーはそのまま甲州街道を初台方面に向かっていく……。
――この後が大変だった。初台にある代々木警察の路地裏に女を降ろして、タクシーは新宿に戻っていった。外人女の氏名住所は突き止めたが、路地に入り込んだ尾行車は追尾不能に陥る。頼みの綱はバイクだった。
ところが何とバイクが交通事故に巻き込まれた。尾行中で避けきれなかったようだ。結局、廃車。その間に小牧を乗せたタクシーは首都高に乗って消えてしまう――。
しかしバイク1台と引換えに、手に入れた資料は重要だった。撮影したビデオテープには、小牧の不倫がそっくり記録されているからだ。
いずれ小牧は殺す。今後、何度でも尾行する。いつも後ろを振り向きながらビクビク生きていってもらおう。

⑤警察出動

――「業界恐怖新聞」94年10月号〜11月号

小牧騒動、東スポ一面に！ 週刊ポスト小牧処刑③

小牧騒動 東スポ一面に！

絶叫する夫人・小牧は通報！

●『噂の真相』業界恐怖新聞94年10月号

8月19日付『東スポ』一面を、本紙「業界恐怖新聞」が全面占拠した！　読売朝日を含む、全紙夕刊中1位の売上を誇ると言われる東スポの一面見出しは「宅八郎／週刊ポスト・デスク宅襲撃騒ぎ／警察出動」とある。さらに何と本紙のコピーも東スポに転載されていた。

記事は、８月17日に起きたボクの小牧三平襲撃について報じたものだ。これで数百万人に小学館社員の実名と不倫、横領が知られる結果になったことは言うまでもない。

また18日付デイリースポーツ、トーチュウでも事件は報じられた（まったく取材なく書いたのはトーチュウ）。さらに東スポでは翌日にも続報を掲載。事件はＴＶのワイドショーでも紹介されたので御存知の方も多いだろう。

さて本紙読者は、先月号の「本紙は小平市の小牧夫人にも配達しております」という記述を覚えているだろうか？

８月17日はその配達日だったのだ。その日何があったのか、すべてを御報告しよう。

８月17日午後１時30分。ついにボクはやって来た。

府中街道と青梅街道の交差点近くにその家はあった。東京都小平市小川町１―１１０９―×。２階建ての青い屋根。２階にはＢＳのパラボラが見え、家の前には古い灰色のトヨタ・スプリンターと自転車が３台置かれている。何ということのない家だった。

この辺りはまだ畑が残る、のどかな土地柄のようだ。この田園の風景の中を恐怖が走るとは、市民の誰もが思ってもみなかっただろう……。

●94年８月19日付の東京スポーツ一面を飾った小牧邸襲撃事件

同行したスタッフが一人いた（加藤将輝／追記および第3章参照）。彼にはボクの行動をビデオで撮影してもらうことにしていた。いずれ『ゆきゆきて、宅八郎』とか『全身宅八郎』といったビデオ作品が上映されることになろう。

午前11時頃と午後1時すぎに『週刊ポスト』編集部に電話を入れてあった。

「取材に出ておりまして、いったん昼12時に戻ります」

「取材からまもなく戻る予定です」（午後1時すぎ）と、編集部員は二度とも小牧の不在を告げた。

出社中を狙って夫人に本紙を配達するつもりでいた。電話で小牧には「小平に来ている」と告げる……。これが距離を隔てた恐怖の演出だ。

行くぞ。ゆらりと体を揺らして小牧家の前に立つ。ボクはインターホンを鳴らした。

「お届け物です」

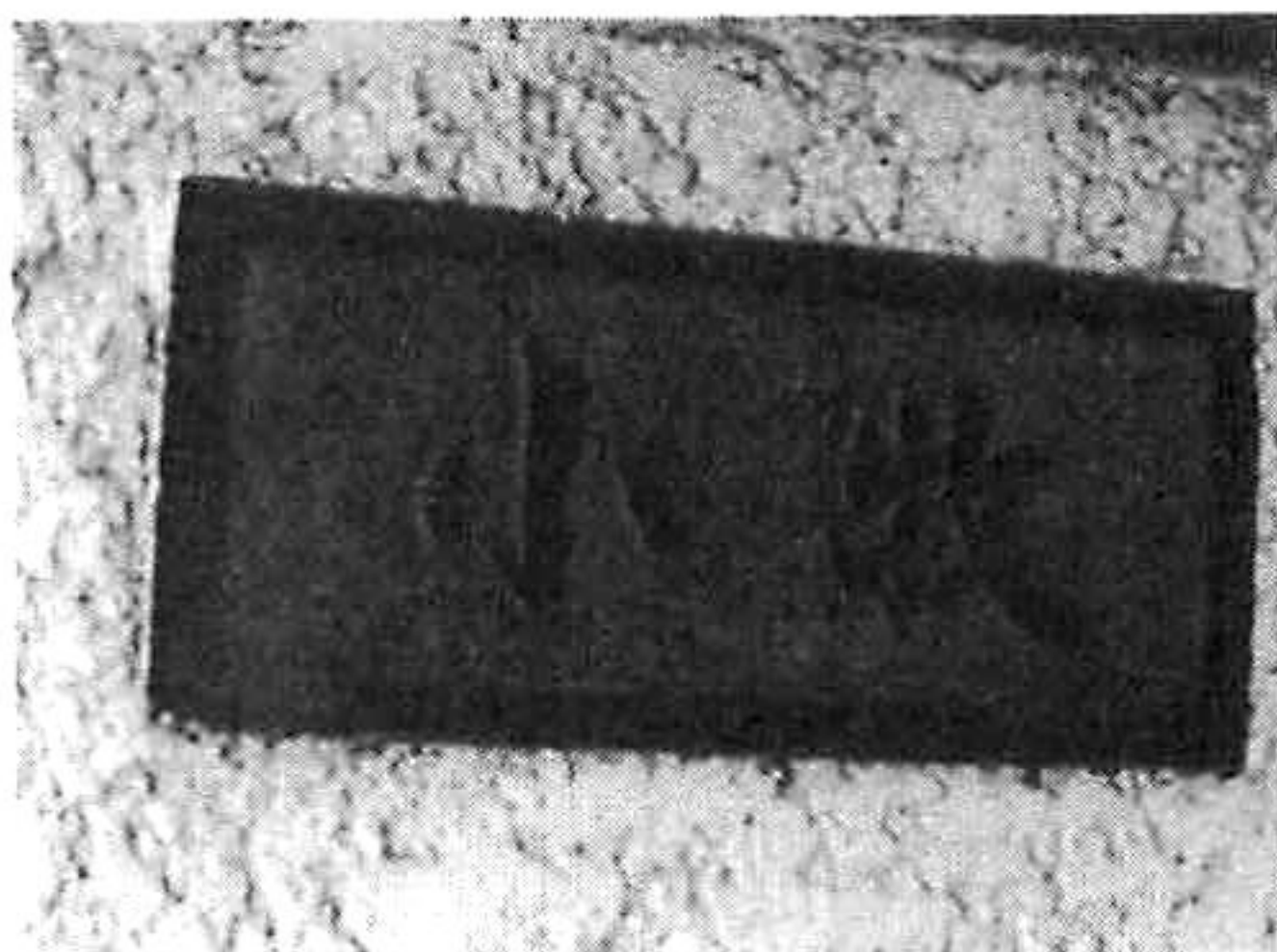
「ハイ、どうぞ」

夫人の声がした。ボクはドアの前に立つ。カギがはずされドアが開いた。今だ！

「新聞配達です。業界恐怖新聞の配達、と取材です」

本紙のコピーをひらめかせながら、すかさずフラッシュをたいて、夫人を撮影する。

アァァアッ！　悲鳴とともに小牧夫人が玄関先でひっくり返った。予想以上に激しい反応だ。本紙をすでに読んでいたのだろう。ククク ッ、何がそんなに怖いんだ。背後でビデオが回っている。

〝今、ボクはあんたの夫がしている事と、まったく同じ事をしているだけだよ。ダンナが稼いだ金で、あんたも飯を食っているんだ〟ボクは心の中で思った。

上●小牧邸表札（撮影・宅八郎）
中●小牧邸襲撃の瞬間（『ゆきゆきて、宅八郎』より／撮影・加藤将輝）
下●アアアアッ！　絶叫する小牧夫人

恐怖に引きつった夫人は、玄関左隣の部屋に転がり込んでドアを閉めてしまった。

「取材です。ご主人の不倫が発覚しました。奥様として、コメントをお願いします」

玄関からボクは夫人を呼ぶが、出てこない。意外なことがそこで起きた。隣の室内から男の声が聞こえてきたのだ。小牧本人の声だ。

いたのか！　会社にウソをついてサボってやがったな。

壁を隔てた隣室だけにハッキリ聞き取れなかったが、小牧はあわててどこかへ電話をかけている（それが１１０番通報だったわけだ）。

「お話があります！」再三、取材に応じるように呼ぶが反応なし。隣室からはパニックだけが伝わってくる。今日はこのくらいでいい。どうせまた何度でも来るんだ。

「とにかく、お届け物の新聞をここに置いていきます」

この間たった2分。ボクは小牧邸を後にした……。

午後7時頃。ボクが用事をすませ自宅に戻ってすぐに、デイリースポーツの記者から電話がかかってき

てビックリした。彼も「いたんですか」と驚いている。ボクが帰った後で小牧邸に警察が来て大騒ぎになっている、という。乱れ飛んだ第一報は何と「宅八郎逮捕」だったという（笑い）。

初期には朝日読売毎日さえ動いていたらしいのだ。いずれにせよ「宅八郎が逃走し警察が行方を追っているらしく」（笑い）まさか自宅に帰ってのんびりしているわけがない、と思ったようだ。

しかし警察関係からの出頭要請も、問い合わせさえも、今までにまったくない（※この原稿執筆時点）。誤報＆誤情報はかくも怖い。

電話取材に応えた後で、すぐに東スポから電話がかかってきた。直接会って取材したいと言う。ボクは受けることにして電話を置いた。

するとすぐにボクの相談役でもある、作家の安部譲二氏から電話がかかってきた。彼の家は小牧邸から近い。それで「宅をかくまっていないか」と問い合わせがあった、というのだ（爆笑）。

マスコミに対して小牧は「宅は部屋の中にまで上がり込んできた。家宅侵入だ」などとウソを言っているが、こちらは証拠のビデオテープも持っている。小牧発言は名誉毀損をも構成するだろう。元ヤクザ前科14犯の安部譲二氏にも相談するが、「そんなもん家宅侵入になるわけない」と力強く激励される。

それにしても、こんなことで１１０番通報した小牧に対して怒りは爆発した。

さらに小牧は驚き呆れることに、マスコミの取材に対して「ノーコメントだ」「オレの写真を載せるな」「家の写真もダメだ」などと命じた上、何と「小学館とモメてもいいのか」と脅したという。

小牧、おまえ自分がいつも何やってるか、わかってんのか！　その週の『ポスト』では何と「ＴＶ局女子アナウンサーの不倫」について、ハレンチな特集記事を掲載しているというのに。

小学館はこんな人間によく給料払ってるな！「ピッカピカの一年生」なんてコピーで、学年誌を母親が子供に買い与え、百科事典を父親がボーナスで買ってやり、年金生活者の年老いた祖父母が孫たちに『ドラえもん』を買ってあげたお金で、小牧は外国人女と不倫デートしてるんだ！

犯罪的な取材をして、抗議はすべて無視し、いざ自分に取材の刃がむけられたとなれば逃げ回って難クセをつけ、2分で警察を呼ぶのが『週刊ポスト』のやり方か。全国に住む小学生たちと、その親に『ポスト』は小学館は何て説明するつもりだ！

ボクはその日もう一度小牧邸を襲撃取材、その模様も東スポに紹介された。

さらに3日後の8月20日、再々襲撃したところ、スゴイ展開になった………（以下次号）。

警官隊と激突！ 週刊ポスト小牧処刑④

小牧三平を殺す！

ボクは、本紙92年6月号で復讐を誓い、処刑宣告を残している。

「（前略）何年かかっても必ずやる。いや何年かかけてやるつもりだ。（中略）思わぬ方法、意外な手段で何年かけても必ず復讐すると、宣戦布告しておく」と。

あれから2年――。あの誓いを決して忘れはしない……。ボクは報道犯罪者・小牧自身のスキャンダルを追うことにした。

その結果を先々月号、先月号で告発報道した。

ふだん有名人を、さも裁くかのように攻撃報道している小牧自身が、何と「横領疑惑」の金で「外人女性と不倫」をしていたのである！

『週刊ポスト』は、一民間企業の社員ＯＬであるＴＶ局女子アナウンサーの不倫問題をスキャンダルとして「裁いて」いる。ならばＴＶ局と同じくマスコミ報道機関である出版社社員の不倫も「裁かれる」義務があろう。

しかも、小学館は多くの学年誌やマンガを出版している大手学習出版社だ。子供は小学館の本を見て育っているのだ。そんな子供にも影響力ある出版社の裏で、小牧がしたコト、しているコト。これは立派なスキャンダルである。その意味で、報道に公共性もある、と判断できる。

そしてボクは、ゴシップ・スキャンダル報道の常套手段をそっくりそのままお返しすることにした。つまり小牧家に本紙を配達し、直撃取材すべく、８月17日、ボクは東京都小平市の小牧邸へ行ったのである。

業界恐怖新聞

宅八郎

警官隊と激突

週刊ポスト小牧処刑③

その時、息子は朝帰り

●『噂の真相』業界恐怖新聞94年11月号　何と、この記事が後に道交法違反の資料になった

家族を直撃するのもワイドショーなどを見れば、よくあるやり方だ。

ところが何と小牧はマスコミ人にあるべきことか、一切議論するでも、話すでもなく、まるでボクを犯罪者であるかのように、訪問後たった2分で110番。

「玄関あけたら2分で警察」ってわけで、面会を求めただけで警察が出動したのだ。その結果、事件はスポーツ紙などで大騒ぎとなった。

そして、小学館社員である小牧の実名と不倫横領の事実は業界をこえて数百万人に知れたのである。

そのクセ、他マスコミには一切取材拒否。他紙記者たちに「小学館とモメてもいいのか」と大出版社をカサに脅しをかける始末だ。

「踏み込めッ！」

それが、部下に対して突撃取材を命令する小牧のログセだという。そんな男が自宅に「踏み込まれ」て何の文句が言えるんだ。エエッ！

玄関に行っただけで「住居侵入だ」と警察を呼ぶのなら、宅配便も郵便局員も酒屋も全員逮捕されているはず。

それなら2年前に、小牧は元部下の中島みなみ、生田弘樹に命じて、ボクの自宅に住居侵入してるじゃ

●警官隊に囲まれる

ないか。ボクのＧＦや、その母親まで襲撃してるじゃないか。人権侵害してるじゃないか。コノヤロー！

朝が眠いよ。しかし夜討ち朝駆けが取材の基本だ（笑い）。

「小牧さーん。不倫と横領の発覚問題についてコメントをお願いします！」

「奥さーん。ご主人の不倫について奥様としてコメントをお願いします！」

すると、パトカーが３台こちらへやって来た。小牧邸前でこうして警察と直に激突するのは初めてだ。憤怒が襲ってきた。小牧め、何という神経だ。

警察を呼んだのは、以前の自称作家・田中康夫と同じだが（※「業界恐怖新聞」で報じていた）、ヤツと小牧が違うのは、田中は表向き、自分が警察を呼んでいないポーズを取ったことであり、小牧は公然と警察に頼っていることだろう。しかし一度騒ぎになっている上に、ビデオカメラも回っていたので警官たちは慎重だ。及び腰で質問をしてくる。

もちろんボクは警官たちに、報道の自由を宣言し、「この家の小牧さんに、マスコミ人にあるまじき事実が発覚したため取材に訪れた」ことを伝えた。

私服刑事数人が家に入っていった。その時、ドアのスキマに一瞬小牧本人の姿が見えた。とっさにボクは叫ぶ。

「小牧さーん、アナタが出てきて話せばいいことなんですよ。なぜ一言も話さないんですかあ。なぜ警察にご迷惑をかけるんですかあ」

私服刑事がにらむ。最終的に制服警官が７～８人、私服が４～５人来たようだ。税金のムダだよ。パ

トカーが家の周りを取り囲み、警官隊がウロウロしている。
異様な状況を、御近所の人や通行人が興味深く見ていた。数人が声をかけてくる。ボクがすべてを説明してあげると、御近所の皆様も「何だ、この家の主人は悪いヤツだね。徹底的に追及すべきだよッ。がんばってね、宅さん！」などと応援してくれる。

その時、息子は朝帰り

午前7時頃だった。トヨタ・スプリンターがのこのこ帰ってきた。
誰？　見れば、運転しているのは小牧の息子だ。今流行りのバカ者っぽい。何だこんな時間に、朝帰りかい。これは、もしかすると父親の不倫発覚が原因で、家庭崩壊を招いたのかもしれない。取材せねばなるまい（笑い）。
ビデオカメラを回し、質問を投げかけていく。
「お父さんのスキャンダル発覚を御存知ですか」「アナタのお父さんがやっている仕事を知っていますか」
最後にボクは興奮のあまり、哲学的でシュールな質問をしてしまった。
「アナタにとって父親って何ですか！」（笑い）。
息子は無言で家に入っていった。こうなったのも何が原因かといえば、小牧が１１０番したために、御近所の注目を集めた上、息子を直撃する好結果に

●朝帰りする小牧の息子

●反省を促すため、小平市小川町に配ったビラ

小平市小川町のみなさまへ

週刊ポスト被害者の会・執行委員　宅八郎

みなさま、ご町内に恐ろしい人物が住んでいることを御存知でしょうか。

その人物は小平市小川町1－1109－■に住む小牧三平という男のことです。

小牧は大手出版社の■小学館に勤務し、長期にわたって『週刊ポスト』編集部で、報道犯罪とも言える記事を作り続けてきました。

彼はエログロ記事やゴシップ、スキャンダル報道の担当責任者です。報道のいき過ぎが疑問視される中でも最も悪質なのが小牧三平だと、芸能界マスコミ業界では言われています。

芸能人や一般人の自宅の前に[illegible]高級車を停めて外出できないようにしたり、あげくの果ては空き巣まがいのことや、盗み撮りをしたりといった犯罪的取材を重ね、その上で事実をねじ曲げたデタラメな記事を小牧は書いてきました。

大手出版社である■小学館の名前の裏側で、小牧がやってきたことはまさしく「報道犯罪」と言うべきものです。

最近では、[illegible]選手が恐喝された「愛人事件」で、犯罪の片棒をかついだのが小牧でした。

この事件ではバックに総会屋[illegible]や暴力団[illegible]の人間も暗躍し、じつにその「愛人」は前科もある女でした。

ところが何と、小牧はこの女を熱海や山中湖のホテルに誘って[illegible]選手への恐喝行為を助けていたのでした（週刊ポスト93年11月26日号）。

彼女は現在、恐喝罪で逮捕され裁判も開かれ、判決を待っている身です。ギリギリの所で小牧は共同犯による起訴を免れましたが、こんなことはマスコミにあっても許されることではありません。

また、小牧は90年頃にはアダルトビデオ女優だった黒木香さんを、力ずくで強姦したという噂も根強く業界には流れています。

小牧三平の被害にあったタレント・有名人は多く（また無名の人であっても）、彼のせいで人生を狂わされた人間の証言が集まっています。このボクも被害者の一人です。

さて、ビートたけしさんがバイク事故で入院する前に、女優の細川ふみえさんとのスキャンダル報道に対する記者会見で何を言ったか、みなさんは御存知でしょうか。

彼は怒りをこめて「おまえらマスコミの人間のゴシップを調査してやるぞ」と言い放ったのです。

このボクも同じ考えで、かねてから小牧三平について調べていました。小牧はデタラメ記事についての抗議は一切受け付けず、タレント側からの反論は封じられてしまっているのが現状です。こうなれば、彼を調査して報いる以外にはないでしょう。

それで御近所のみなさまからも「反省を促していただく」しかないと思い、こうして失礼を承知でお手紙を差し上げているのです。

ふだん芸能人や有名人の「不倫」などを、悪意と作為で報道している小牧三平自身が何と、「[illegible]」した金で「外人女性と「不倫」をしている事実をお伝えします。

彼が勤務する■小学館といえば、『小学一年生』など多くの学年誌やマンガを出版している大出版社です。

そんな、子供にも影響力のある出版社の収益が、何に使われているのかを知ってください。これは立派なスキャンダルでしょう。

今、この小牧三平を告発します。

マスコミ・暴力に関わる小牧の悪行は絶対に許してはいけません。多くのタレント被害者を代表して、このことを世に問いたいと思います。

この文書は、ご町内に住む市会議員、民生委員、人権擁護委員の方々にもお届けしております。

ご町内の恐ろしい人物・小牧三平は小平市小川町■に住んでいます。ぜひ、御近所に住むみなさまからも、悪行に対する反省を促していただくよう、お願いします。

また、この小牧三平に関する何らかの情報がありましたら、「週刊ポスト被害者連絡会・宅八郎あて」と明記した上で■までファックスして頂ければ幸いです。

8月に、ボクが小牧家を直撃取材に訪れたところ騒ぎになった件がありましたが、それに関しては続報でお知らせします。お待ちください。

お騒がせして、失礼いたしました。

報道犯罪者・小牧三平の自宅地図

なったのだ（笑い）。

その後しばらくして、私服刑事たちが出てきた。

「小牧さんは会いたくないと言っています」

私服の一人がかなり渋い顔で言った。イライラしている様子だ（以下次号）。

【付　記】この日もしばらくは、小牧邸前で警備する警察とにらみ合いが続いた。その後も小牧邸取材のたびに、警官隊と激突することになった。

そのため、やむなく報道被害に抗議する団体「週刊ポスト被害者の会」を結成、小牧に話し合いに応じるよう呼びかけたビラを近隣に配った。また、小牧の次男が乗るクルマとカーチェイスになったりも、した。

自宅直撃取材も、家族にコメントを取るのも、マスコミ報道のパターンじゃないか。何が悪い。ポストの発行部数は80万部以上。それに満たないビラを配って、何が悪い。

しかし、それらのことを記述する間もなく、事態は急転したのである……。

⑥逮捕予知

――「業界恐怖新聞」94年12月号 宅八郎、ついに逮捕か？　どうなる恐怖新聞！

●『噂の真相』業界恐怖新聞94年12月号

なぜだ、どうしてなんだ！
何と、このボクが逮捕されるらしい……。恐ろしい情報がボクにもたらされたのだ。
「宅さん、アナタを逮捕することが警視庁本庁で決定したというよ！　小牧が告訴をしたらしい。威力業

務妨害と脅迫の罪にも問われているようだ。確かなスジからの情報だから間違いない」
このボクが逮捕だって！
ボクの取材・執筆活動が、今、週刊ポスト編集部・小牧三平らの卑劣な手段によって危機にさらされている。
ボクの取材要求を無視し、小牧は一言もなく警察に通報するという暴挙を繰り返した。要求に対して拒否の弁さえ、ただの一度も述べてはいないのだ。小牧にはちっとも反省の色がない。自分のやってきたことを棚に上げて、都合が悪くなると警察に頼むなんて。アンタはそれでも言論人か！
学習出版社㈱小学館はこんな人間を雇ってんのか。
ボクは小牧に談話を取りに行っただけじゃないか。それが住居不法侵入か。
逮捕の情報が入る数日前、小平警察署より出頭要請を受けていたボクは、弁護士同行の上で応じている。犯罪になるようなヘマはしていないからだ。任意出頭までしてるのに逮捕なんてまったく無茶苦茶、不当逮捕じゃないか！
ところが週刊ポスト関係者からも「元警察番記者だった小牧が宅を逮捕させてやるといきまいている」という間接情報が伝わってきた。弁護士にも相談、別の情報も探ったが、逮捕の可能性は否定し切れないことがわかった。
ボクは直ちに手を打つことにした。逮捕そのものよりイヤなのはボクがマスコミによって一方的に断罪されてしまう危険があることだ。それで小牧は〈免罪〉か！

ボクは小学館の小牧によって報道被害を受け、それに抗議するために小牧の逆取材を始めただけだ。それだけはキチンとつたえなくちゃならない。

ボクが犯罪者というのなら小牧だって犯罪者。小学館は犯罪出版社であり、『週刊ポスト』は犯罪週刊誌じゃないか！　ボクが〈悪〉なら、ヤツらは〈最悪〉だ!!　真に裁かれるべきなのは一体どっちなんだ！

こうなったら前代未聞の逮捕劇をボク自身が演出してやる！　しかし時間がない……。

弁護団を緊急に結成、ボクが逮捕をむかえた時に、支援団体によるボク不在の記者会見を開くことにした。

記者会見配布用の資料も用意した。「逮捕を想定したボク自身による声明文」「事実経過報告書」。弁護団も刑事訴訟法第１９９条２項や刑事訴訟規則第１４３条の３に照らしても逮捕は不当だという見解声明を出してくれた。

ボクを支援してくれる安部譲二さんが出席を約束してくれた。本多勝一さん、大泉実成さん、中森明夫さんなどからの「抗議支援声明」もすでに寄せられている。逮捕直後には、さらに支援者を募る手はずを整えた。

記者会見は逮捕後、数時間後に開かなければならないだろう。手はずは完璧でなければならない。Xデー前にやるべき事は山ほどある。

今ボクは、本多勝一さんのところへ行ってきた。放送局配信用に、本多さんの抗議声明をビデオで撮影してきたのだ。ボク自身が不当逮捕に抗議している映像もビデオ撮影した。これからその編集作業をしなくちゃいけない。

●小平警察署からの呼出状の一枚

平成６年９月１９日
（平刑発1621号）

呼　出　状

宅　八郎

殿

警視庁小平警察署長

警視庁小平警察署長

平成６年８月１７日に発生した
東京都小平市小川町[illegible]小牧三平方
住居侵入被疑事件
に関し、お尋ねしたいことがありますので、次により出頭されたい。

記

１　日　時　平成６年９月２１日午前８時３０分

２　場　所　警視庁小平警察署　刑事課

３　所在地　東京都小平市小川町２丁目１２６５番地１
　　　　　　電話0423-43-0110内線（276）

４　その他
　　①必ず本人がおいでください。
　　②都合が悪く、呼出しに応じられない場合は必ず小平警察署にその理由を連絡してください。

……………もう何日もろくに睡眠も取っていない。数日間で5分と休んでいない。今回、この大切な新聞も1ページしか入稿できなかった。

この原稿は10月23日に書いている。この『噂の真相』の発売日11月10日にボクは逮捕されているのだろうか？　あるいは逮捕はそれ以降なのか……。

岡留編集長からは連載継続が難しい、とも言われた。でもボクはたとえ獄中にあっても、読者のみなさんへメッセージを発信してゆきたい。そうだ、いいことを思いついた……（以下次号、のつもり）。

※しかしこの後、了解もなく、出版社から一方的に連載は打ち切られた……。

【追　記】連載「業界恐怖新聞」の打ち切り決定、を知ったのは留置場の中だった。せっかくここまで、がんばってきたのに。悔しくて涙が出た。しかし、ボクはフリーライターだ。出版社側の事情で打ち切りになることもあるだろう。永久に連載を継続させる権利はボクにはない。いつか、編集長とも互いの行き違いや誤解もとけて、復帰することもあろう。今は涙を飲もう、「獄中」で、そう思った。

さて、小牧邸を最初に直撃したのが、8月17日。その後、8月20日に引き続いて何度か直撃取材を試みた。

ほとんど毎回、警官隊が出動した。警官「隊」というのは大ゲサではない。だってパトカー4～5台、警察官の数も10人以上になっていたからだ。
そして、9月19日、ついに小平警察署から最初の呼出状が来た。後に代々木署では一枚も発行されなかった正式な呼出状が、いとも簡単に何枚も発行されたのだ。さすがに小学館の力は強い。しかし、それでもボクは懲りなかった。こんな紙切れで鉄よりも固いボクの意志が、ダイヤよりも硬いボクの意志が砕けてなるものか。絶対にくじけない。ボクは決してひるまなかったのである。
何度か警官隊とやりあっていた。次第に硬直した表情を見せる警察と警官隊の中に、明らかに若いキャリアと呼ばれる人間が含まれてきたのにイヤな気分を感じてはいたが。今思えば、あれが警視庁本庁の人間だったのか……?
たまたま、9月の終わり頃に、ジャーナリスト・本多勝一氏と二度目の対談をした。東スポを読んだ彼は(笑い)、警察出動を知って、ボクを応援する原稿も発表してくれていた。本多勝一氏に警察の呼出状を見せた。
「宅さんは権力の本当の恐ろしさを知らない。ヤツらは、権力は何をするか、わかりませんよ」
そう彼は言った。
それでも不思議と恐怖感のようなものはなかった。ボクの覚悟ゆえに、だろうか。報道犯罪者に告ぐ。おまえらとボクは「意志の力」「覚悟の総量」がちがうのだ! ボクはその意味で並の人間ではない!!
きっと、それが本多勝一氏に通じたのだろう。彼は言った。
「弁護士を紹介しましょう」

そして、本多氏の紹介で斎藤健児弁護士に会い、また後に斎藤氏から梓澤和幸弁護士も紹介され、宅八郎弁護団となった。
その後、もともと、ボクの復讐のよき理解者でもあり、協力者でもあった友人・加藤将輝と藤井良樹たちに事情を話し、相談した。
「今日から、ボク宅八郎を支援する会が発足した。それはキミたちのことだ！」
「エッ!?」
ボクのムチャに最後までつきあってくれた二人。加藤将輝（取材者）と藤井良樹（ルポライター）に感謝したい。彼ら二人を中心とした支援者たちと弁護団の支援を受け、メディア史上、前代未聞の逮捕劇を演出したのである。
「第3章」では、藤井良樹が、逮捕されるまでのボクと支援者の動きを記してくれた。また加藤将輝は、逮捕の瞬間から釈放までのドキュメントを整理してくれた。

付録 宅八郎が別件不当逮捕されるまでの経緯

❶1992年の春、小牧三平デスクが指揮する『週刊ポスト』取材班は、宅八郎と小峯隆生（『週刊プレイボーイ』編集者／当時）との論争問題に対し、極めて悪質な取材活動を行った（この際、記者は宅の部屋に"住居侵入"している）。

❷同年4月、2週にわたり宅に関する記事が『週刊ポスト』に掲載されたが、その内容はあまりにひどく、事実無根の箇所が数多くあった。また宅八郎本人の反論コメントは全く記されない、客観性を欠く一方的なものだった。

❸その際の取材で、小牧デスク指揮下の『週刊ポスト』記者は宅八郎の知人の家を再三にわたって訪れ、また家の前に張り込んでまで、極めて悪質かつ強引な取材を行った。その結果、この知人とその母親の人権およびプライバシーを著しく侵害し、多大なる精神的苦痛を与えた。

❹記事内容および取材方法に対して、宅八郎は『週刊ポスト』に抗議し、反論を掲載させるよう申し入れたが、相手にされなかった。

❺この記事の取材責任者である小牧デスクへの抗議の意味を込め、宅八郎が彼について逆取材したところ、小牧デスクの強引な取材活動により「報道被害」にあった「小牧デスク・報道被害者」が何人もいることが浮かび上がって来た。それは取材対象者だけでなく、家族までも傷つけるほどの「報道犯罪」による被害事実であった。

❻小牧デスクへの逆取材を続ける中、宅八郎は1993年12月24日の夜、小牧デスクが勤務する会社、㈱小学館の経費横領疑惑のもと、で外国人女性と食事をし、さらにホテルに宿泊したこと（いわゆる不倫である）をつきとめた。

❼94年7月22日午後7時頃、宅八郎は外出のため自宅マンションの駐車場より車を出すべく、バックで徐行運転をしたところ、向かい側のマンション前に駐車中だった、大田某所有の乗用車に接触した。接触部である宅八郎の車の右後部は、左ハンドルであるために見えにくく、またさしたる衝撃もなかったため、接触事故があったことに気づかず、そのまま車を発進させ、外出をした。午後9時頃車のところに行った大田某は損傷を発見、「当て逃げ」だとして警察に被害届をだした。

❽翌7月23日早朝、宅八郎が自宅前に戻って来たところ、大田某より車の衝突によりドアがへこんだとの申し入れをされたため、その箇所を見たところ確かに損傷があったので、自らの非を認め、全額弁済するむね申し出た。それに対し大田某は、いい人でよかったわ、と発言した。

❾宅八郎は、加害者は自分で、修理費用は全額負担すると書かれた、大田某作成の「覚書」に署名した。しかしその日付が間違っていたので、改めて作り直した。

❿示談で済んでよかったと思っていた宅八郎だったが、大田某より深夜や早朝に頻繁に電話が入り、早急に補償をしてくれと繰り返されたので、若干の不安を感じだした。

⓫7月24日、修理工場はどこで直すのかという宅八郎の問いに対し、大田某は自分の知っているところでと答えたので、無用なトラブルを避けるために宅八郎は一緒に行くことを提案、翌25日午前11時の約束がなされた。

⓬7月25日午前9時45分、大田某が宅八郎の部屋を訪ね、修理工場に行こうと申し入れた。約束の時間より早いためまだ就寝中であった宅八郎は、身支度をするために階下で待っていてほしいと答えた。しばらく後、大田某と謎の男が、施錠していなかった宅の部屋に無断で侵入した。男は意味

不明の言葉を叫びながら、右拳で宅八郎の左頬を殴打し、暴行を加えた。

⑬同日午前11時頃、大田某より宅八郎に電話が入り、いま代々木署に再度被害届をだしたとの発言があった。さらに大田某は、これから修理工場に行くと宣言したが、宅八郎は、これを承認しないと通告した。

⑭7月27日、大田某の車は修理を終えた。

⑮この頃より、宅八郎が車で外出しようとすると、大田某が車にしがみつき、「お金を払ってください」と叫びながら、発進を妨害するという行為が何度も繰り返されるようになった。その行為にすっかり嫌気のさした宅八郎は、車での出入りに慎重になった。

⑯また、宅八郎が外出のために部屋を出ると、大田某が待ち構えているということもあった。あまりにしつこく繰り返されるその行為は、冷静さを欠いていると判断した宅八郎は、「仕事に行くので今は話し合えない。改めて時間を決めて会いましょう」と申し入れたが、興奮状態の大田某には聞き入れてもらえなかった。

⑰昨年のクリスマス・イブの小牧デスクに関する取材結果を、宅八郎は月刊雑誌『噂の真相』に連載中の「業界恐怖新聞」で告発報道し、その雑誌は8月10日に発売された。

⑱宅八郎は小牧デスクに直接コメントを求めるため、94年8月17日、小平市の小牧デスク邸を取材訪問したが、小牧デスクは取材に応じず、姿も見せないままで警察へ通報した。

⑲その後も宅八郎は数回にわたり小牧デスク邸を取材に訪れ面会を求めたが、その度に一言もなく警察へ通報された(この際には、警察側は小牧デスクから事情を聴いただけであった)。

⑳そのためやむなく、宅八郎は報道被害に抗議する団体「週刊ポスト被害者の会」を結成、小牧デスクに話し合いに応じるよう呼びかけたビラを、小牧邸の近隣の家庭に配布した。

㉑小牧デスクは8月17日の件が住居不法侵入であるとし、小平署に被害届を提出した。そのため小平署より宅八郎に、事情聴取をしたいという呼出状が届いた。

㉒大田某の被害届を受けた代々木署より、3回前後の出頭要請を受けた(最後は10月5日)が、あいにく多忙が続いていたため、時間ができたら出頭します、と電話で回答した。ちなみに代々木署からは、小平署から来たような正式の呼出状はもらっていない。

㉓警察からの出頭要請に対し宅八郎はすすんで応じ、約束の10月15日、弁護士・斎藤健児同行のうえで小平署を訪れるが、何と「担当の刑事課長は本庁に行っており、今日は帰ってくれ」と言われる。「本庁」という説明および、任意出頭を拒否する態度に驚きながらも、小平署員を相手に「不法侵入はしていない」との説明をし、調書を作成させた。

㉔小牧デスクが、住居侵入・脅迫・威力業務妨害で、宅八郎を告訴。

㉕10月17日、宅八郎は自分に逮捕状が出そうだ、という情報を得た。それは、10月24日の午前中に逮捕される可能性が高い、というものであった。

㉖10月22日、弁護士・斎藤健児が小平署刑事課長に電話をしたところ、かなり強硬な方針をもっているらしいことが感じられた。

㉗10月23日、事実経過の記載とともに今後も呼び出しには応じると述べた、宅八郎名による「上申書」を、弁護士・斎藤健児が小平署に提出した。

㉘10月24日、弁護士・斎藤健児が小平署刑事課長に電話をしたところ、かなり軟化した姿勢がうかがえた。

㉙10月31日、宅八郎は弁護士・斎藤健児と再び小平署に任意出頭、事情聴取に応じた。この際、「11月第1週は自宅にいるかどうか」という宅八郎の所在確認がなされている。そして11月の5日前後に改めて事情聴取を行うむねの確認を双方で行った。

㉚11月2日午前10時22分、宅八郎はマンションの自室で、小平署でなく代々木署により、道交法違反の疑いで逮捕された。

第3章
別件不当逮捕

❶ 逮捕前夜 ――［文］藤井良樹

10月17日

「おい、落ち着いて聞いてくれよ……なんかさぁ、ボクが逮捕されるらしいんだ」

真夜中に鳴った電話から、こんなぶっそうな言葉が聞こえてきた。電話の主は、もちろん宅八郎だ。こんな時間にこんなことを言ってくる人間は、この人しかいない。

すでに、この時点で小学館の小牧三平が警視庁小平署に、宅を訴えていることは知っていた。しかし、宅八郎サイドも斎藤健児弁護士とともに、法的に対処する準備をしている。10月15日には、宅、そして宅の友人・加藤将輝、斎藤弁護士の3人で、わざわざ小平署に任意出頭して、事情聴取にも応じているのだ。

ちょうど2カ月程前にも、宅の小牧邸への「襲撃」が、夕刊紙の一面にデカデカと「宅八郎に警察出動！」なんて出たこともあった。

しかし、あの騒動の時の、宅のどこか騒ぎを楽しむかのような声の響きは受話器の向こう側からは感じられない。なぜなら、今回の〝逮捕〟は、「騒動」ではなく「事件」と形容されるべきものだったからだ。

「《宅八郎逮捕が決定的らしい》って情報が入ってきたんだよ。ボクも最初はデタラメだって思ったんだけど、ボク自身か、もしくは小牧本人しか知らないような、この間ボクがやって来た復讐行動の詳細まで、その情報には含まれてるんだ。しかも情報元も一つじゃないし、かなりの信憑性があると思う……」

小牧が訴えたことで、警察は本気で動きだし、宅をブ

ッつぶそうとしているのか？　宅がつかんだ情報はその動きの中で漏れてきたものなのか？
「それでさ、ボクの逮捕のXデーが、来週の月曜日、10月24日らしいんだ……！」
この瞬間から僕らは「宅八郎逮捕」という事態へ向かって走り始めることになる。

10月19日

夜。宅、加藤、僕の3人で落ちあった。この3人は、8月にも宅の小牧邸「襲撃」を見届けているメンバーだ。宅が慎重に話を切り出す。
「今日、午後に斎藤弁護士と会って話したんだけどさ。やっぱり、ボクの逮捕は相当な確率であるみたいだよ。斎藤弁護士もいろいろ手を回して調査してくれたようなんだけど、逮捕は避けられない感じだな……」
普段なら冗談ばかり言いあっている3人だが、この日ばかりは笑い飛ばそうにも言葉が見つからなかった。とにかく、僕らは決めた。「宅八郎を支援する会」でも「言論の自由を守る会」でも、もうなんでもいいから、そんなヤツを今すぐデッチあげてしまおう。
たとえ「支援する会」が、宅八郎と加藤将輝と藤井良樹の3人だけでも、やろうぜ。マスコミ、警察、裁判所、善良なる一般市民の方々、親・兄弟・親戚……そんなこんなを全部敵にしてでも、やってやろうぜ、と。

10月20日

すでに、僕らは、弁護団とともに「宅八郎を支援する会」として動きだしていた。
前に、宅が僕にこう言ったことがある。
「ボクは小峯事件の時にもホント、むちゃくちゃやっただろ。それに、芸能レポーターの井上公造の結婚パーティにも逆レポート取材で乱入したしさ。だから、マスコミはもう怖がってて、ボクに関わりたくないって考えてると思うよ。だからさぁ、逆にもし、マスコミがボクをたたくとしたら、ボクが逮捕されるとか、そういう明らかに宅を攻撃してもいいって思った時だろうね。そうなった時はもう、マスコミはボクをここぞとばかりにつぶしにかかるよ、絶対」

そして、まさしく、いまがそうだった。僕らは逮捕を想定し、とりあえずシミュレーションしてみた。

●宅逮捕の当日、「不当逮捕」を訴える記者会見を開く。逮捕報道の翌日では意味がない。当日の夜のニュース、そして翌日の朝刊には絶対に間に合わせなくてはダメだ。

●そして、その記者会見は「面白いもの」でなければならない。「不当逮捕」を愚直に訴えてても、「宅逮捕」というニュースの前では、もみ消されてしまうだろう。

●記者会見には、宅を支援する著名人にできるだけ参加してもらおう。

●「週刊ポスト－小牧事件」に関する克明な資料を作ろう。

……ここで、いきなり宅が声をあげた。

「あ～っ！　よく考えたら、この記者会見にボクは出席できないんだよな！」

「あたり前だろ。これは、宅八郎逮捕の記者会見なんだから」と、加藤。

「え～、それは問題だな。ボクがいないのは、困ったな。ボクも記者会見出たいよ。留置場で記者会見開くのはダメ、に決まってるな？」

無茶な意見だが、宅八郎が記者会見にいた方が面白いには決まっている。だが、どう考えても、その時点ではまだ釈放されていないだろう。そこで僕らは、「宅八郎本人が、自らの無実を訴えるビデオ」を逮捕Xデーの前に収録することを思いついた。記者会見に集まった報道陣の前で、そのビデオを流してやればいい。

夜、宅と僕は、宅の知り合いのカメラマン仲間らが経営する店「ガリレイ」の工房に出向いた。ここをスタジオ代わりにして、そのビデオ撮影をするのである。Xデーがくる前に、逮捕される可能性だってある。とにかく、宅がシャバにいる間に急いでビデオだけは撮っておかなくちゃならない。

中野にある、その店は、ウルトラマンシリーズの怪獣人形やアニメのセル画が所狭しと陳列されている「おたくショップ」だった。あまりにも、宅八郎のアジトとしては似合いすぎるロケーション。しかし、ここで宅はお

たく評論を展開するわけではなく、ビデオカメラの前で、無実を叫ばなければならないのだ。

この「本人出演ビデオ」をどう撮るかで、宅と僕の間でちょっとした意見の対立があった。ビデオをどういう雰囲気で撮影するのか、というのが対立の争点である。

僕は、宅がスーツでも着て、真面目で深刻な面持ちで「不当逮捕・言論の弾圧への抗議」を訴えるのがいい、と主張した。その方が世間のウケはいいんじゃないかと思ったからだ。しかし、宅八郎は普段の姿で、しかもトレードマークのおたくアイテムであるマジックハンドを手にビデオに映るという。

「ふざけすぎじゃないか」「反感を買うんじゃないの」という僕の意見に、宅は敢然とこう言うのだった。

「テレビにね、正しさとか誠実さとか求めちゃダメ！ブラウン管の正義はね、インパクトだよ。面白いこと、珍しいってことにつきるんだ。オリバー君、エリマキトカゲ、ウーパールーパー、きんさん・ぎんさん、人面魚だってそうだ！　珍しけりゃあねぇ、ワイドショーだってニュースだって、このビデオを流さざるをえなくなるに決まってんだ！　逮捕された宅八郎なんてねぇ、テレビにとっちゃ矢ガモみたいなもんだ。究極の珍味だよ。たっぷり、味わわせてやればいいんだ！」

そして、宅はビデオカメラの前で、マジックハンドをカチャカチャしながら叫ぶ。

「ボクははっきり言って、『ドラえもん』も読んでますよ！（カチャカチャ）。子供の時には、『小学一年生』を読んで、ピッカピカの一年生って入学して、ずっと学年誌を読んでやってきましたよ。（カチャッ）百科事典だって持ってるんだ！（カチャカチャッ）」

数時間ほどかけてようやくビデオ撮影を終え、それから宅と僕は、宅の自宅マンションへと向かわねばならなかった。記者会見の資料を作るためには、宅がストックしている様々な文書が必要だからだ。

しかし、いま、宅の自宅へ近づくことは、リスクを伴う行動でもあった。もし、宅の自宅が警察に張られていて、そこで逮捕なんかされてしまったら大変だ。とにかく、想定したXデー以前に宅が逮捕されるという事態だけは絶対に避けねばならない。場合によっては、逃げ

●Xデーを前に無罪を訴えるビデオ「カチャカチャッ」

まくってでも（実際、宅は、「宅逮捕で警察が動いている」という情報を聞いた時、逃亡も考えたそうだ。その上、「逃げれるだけ逃げてさ、マスコミにがんがん連絡入れて、小牧のことも全部電波に乗せてさ、最終的には報道陣をみんな引き連れて、小牧の自宅前で逮捕されるってのはどう？ どうせ逮捕されるんなら、ボクは小牧の目の前で捕まりたいよ」なんて、半分冗談半分真剣に、話したりもしていた）。

結局、宅の自宅へは、おたくカメラマンの車で向かうことにした。宅の車はもう警察にバレバレだからだ（宅は代々木署のある初台近くで、不審な車に尾行されている）。

ところが、その警察が、いきなり僕らの目の前に現れた。そろそろ、宅の自宅マンションに到着しようかという頃である。なんと、行く手に数台のパトカーが停まり、検問が張られているじゃないか！ ヘルメットを被ったおまわりが照明灯を手に、道行く車をストップさせて、車内を点検している。

やばい。相当に、やばい。もう、Uターンするのも無理だし、検問を突破するのも不可能だ。おまわりが僕らの車に近づいてくる。運転をしてるカメラマンが、しかたなく窓を開けて免許証を提示する。おまわりが、ジロッと車内をのぞき込む……。

「あ〜、むちゃくちゃ緊張したぁ。てっきり宅さんを逮捕するために検問張ってると思ったぁ〜」「なんかさぁ、指名手配中の逃亡犯って、あんな気分なのかなぁ」

なんて会話が交わせるようになるまで、それから10分以上もの時間がかかった。

そして僕らは、それから宅の家で資料をまとめ、僕のひとり暮らしの部屋へと向かった。その夜から、宅は家を出て僕の部屋に泊まりこむことになり、僕の1DKの

マンションは〈宅八郎支援会・事務局本部〉となった。

10月21日

ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！

僕は目覚ましのベルで起きる前に、ものすごい悲鳴によって叩き起こされた。何事がおこったのかと部屋の中を見渡すと宅だった。相当に恐ろしい夢でも見てるのか、うんうんうなり続けている。数時間前の検問の恐怖が、まだ頭の中に残っているんだろうか。

しかし、後で本人に聞いてみると、なかなか寝つけないのも、悪夢にうなされるのもほとんど毎日のことで、しかもそれが何年間も続いているという。

「あんなに毎晩うなるほどの悪夢を見続けて、よく平気でいられるねー」と僕が妙に感心していると、彼はフッと笑った後で真顔になって、こう言った。

「だって、それが宅八郎なんだよ」

午前11時。ＪＲ中野駅前の喫茶店サンジェルマンで、宅と僕はモーニングセットを食っている。同席している一人の紳士は、静かにブレンドコーヒーを飲んでいる。

その紳士こそ、今回の事件を引き受けてくれた、斎藤健兒弁護士である。僕は初対面だった。少し遅れて加藤も駆けつけてきて、ここに初めて、これからとんでもない騒動に巻き込まれていく面々が顔を合わせたことになる。

僕らが、斎藤弁護士に何より聞きかったのは、何はともあれ、「宅八郎逮捕は、本当にあるのか？」ということだった。

「可能性としては極めて高い、ね」斎藤弁護士は静かに、こう言い放った。

以前から、小平署の動きは不審な点が多かった。10月15日に約束して、宅と斎藤弁護士が任意で出頭したのに、何と「担当の刑事課長は本庁に行っている。今日は帰ってくれ」と言ったり、冗談じゃない、わざわざ出頭してるんだと言って事情聴取させても、ろくに調書の作成もしなかったりしている。

任意を拒否して、強制（逮捕）で行く、つもりなのか。

「逮捕の可能性、大いにあり」

結局、この一点は揺るがない。僕らは、斎藤弁護士

に、「逮捕後、できるだけ早く記者会見をやること」「そのためにビデオや資料作成、支援者集めなどをすでに進めていること」を伝えた。斎藤弁護士は、新たに報道被害の専門家である弁護士を加え、「弁護団」を結成する方向で動くことにしよう、と答えてくれた。

喫茶店を出て、斎藤弁護士と別れた僕らは、その足で歩いて5分ほどの「中野サンプラザ」へ向かった。逮捕された場合に緊急で開く記者会見の会場を押さえるためだ。

しかし、Xデー・10月24日の会議室は空きがなかった。縁起が良いのか悪いのか、よくわからない。僕らは仕方なく、駅前のカレー屋さんに行き、少し早い昼飯を食った。1杯280円のカレー。なんか情けなかった。そして、僕らは「宅八郎支援会事務局本部」……つまり僕の1DKに戻り、記者会見資料のワープロを打ち、安部譲二さん、中森明夫さん、大泉実成さんなどの支援を約束している人たちへ電話を掛けたりした。とにかく、やることだけはしこたまあるかわりに、Xデーまではもう3日しかないのだ。

10月22日

朝方まで「記者会見資料」作りに時間を費やし、昼過ぎに目を覚ます。宅は案の定、その朝もうなされながら寝ていて、電話の受話器を足でけっとばしていた。ツーツーツーという音だけが部屋に響いている。寝覚めの悪すぎる午後だ。

夜7時。西荻窪の喫茶店で斎藤弁護士、そして新たに弁護団に加わってくれた梓澤弁護士の二人と会議。加藤は資料作りに忙しいため、宅と僕の二人が行く。

梓澤弁護士は、報道による人権侵害問題のスペシャリストで、人権擁護委員会副委員長も務めている、マスコミでも有名な弁護士だ。喫茶店で顔合わせをした後、梓澤弁護士の事務所に移動する。

「小牧事件」の説明を梓澤弁護士にしていく中で、問題になったのは、宅の復讐行動が、小牧の家族まで影響を及ぼしていることだった。

二人とも、「報道被害にたいして、目には目をでやり返す」という方法論自体には理解を示すのだが、その復

讐行動が小牧の家族にまで及ぶことに関しては、やはり大いに承服しかねるようだった。

少し重苦しい雰囲気になった時、宅が口を開いた。

「だって、小牧が『週刊ポスト』でやってることにくらべりゃ屁みたいなもんですよ。小牧にデタラメな記事を書かれた人間が、そして家族が、どれほどの被害を受けてるか、ああでもしなければ、アイツは自覚しないでしょう？　フンッ、あれでも甘い、大甘です」

弁護士二人も、僕も、何も言えない。

「ボクはね、自分の復讐が社会的正義だなんて、これっぽっちも思ってませんよ。それで、先生方が承服しかねるのなら、ボクがこんなこと言うのは不遜でしょうけど、この弁護を降りてもらっても結構です」

斎藤・梓澤、両弁護士とも複雑な心境を隠しきれない表情。しばらく間があった後、「わかった。ケースバイケースだけど、いま弁護を降りるなんて気持ちはないですよ」（後に、宅が逮捕され留置場に入っている時、斎藤弁護士はこう打ち明けてくれた。「あの時にね、宅さんが〝ボクは自分が正しいと思ってない。でも、やるんだ〟って言った時ね、なんか、こう、心に感じるものが僕の中に生まれたね」と）。

次に討議は、「宅逮捕」を想定しての記者会見問題に移った。両弁護士とも、逮捕後すぐに抗議の記者会見を開くことには賛成。会場も、弁護士会館か法曹会館を使えばいいとアドバイスしてくれる。次は出席者だ。

記者会見の時、もちろん宅は逮捕されていないわけで、そのためにすでにビデオ撮影は済ましている。しかし、そのビデオだけでなく、支援する言論人・著名人の出席があるにこしたことはない。安部譲二さんや本多勝一さんに出席してもらえれば……という意見を僕らは出した。

「そうだな。ワイドショーが安部さん、ニュース関係なら本多さんが影響力あるだろうね」と、梓澤弁護士。さすがに報道被害の専門家だけあって、鋭いメディア分析だ。

連絡は早い方がいい。斎藤弁護士が、早速本多さんに電話を掛け、交渉することにした。しかし、本多勝一は「ジャーナリストはむやみに人前に顔をさらすべきで

はない」という持論を貫き通し、やむをえない場合はカツラをつけるなどして変装までするという人だ。記者会見に出席などしてくれるんだろうか？
斎藤弁護士が、電話で本多氏と話している。表情が苦笑いしている。宅がたまらず、「ちょっとボクに代わってお話しさせてください」と受話器を引き継ぐ。
斎藤弁護士は「本多さんとしては支援声明は出すし、支援者名簿に名を連ねるのも構わないけど、記者会見だけは無理だと言ってます。まぁ、本多さんの信念からすれば無理もないねぇ」と言う。一方、宅は受話器を握りしめ、本多さんを説得にかかる。
「ボクが逮捕されたら、もう全マスコミはボクを攻撃するはずです。その時、本多さんが記者会見で一言しゃべってくれれば、ものすごく心強いんですが……」
本多さんが少し妥協してくれて、そこまで言うなら、声明のテープなら吹き込んでもいいと言ってきた。しかし、それでも、宅はねばる。
「じゃあ、本多さん、ビデオで出演ってのはどうですか？ みんなね、全国の人は声だけじゃなくて、〝動く本多勝一〟が見たいと思ってるんです！ 珍しいし。〝動く本多勝一〟が宅八郎を支援するからこそ、いいんですよ！ お願いしますよ！」
もう、むちゃくちゃな論理だ。ヘアヌード・カメラマンが女性モデルを口説いているんじゃねえんだから。しかし、両弁護士も呆れている中、奇跡が起こった。結局、本多さんはビデオ出演を了承してくれたのだ。斎藤弁護士は、信じられないという顔をしている。
僕は、宅八郎もすごいが、本多勝一もすごいなと驚嘆するしかなかった（さらに、後に逮捕され釈放された後で、宅はまたも奇跡を起こして、なんと会見生出演を本多氏に了解させてしまった）。
ただ、逮捕後の記者会見の用意も大切だが、できるだけ逮捕を阻止する手立ても打たねばならなかった。みすみす逮捕されるのを待つわけにはいかない。討議を重ね、すでに宅八郎が書いていた「上申書」を警視庁小平署に提出する作戦を選択する。
《ボクは逃げも隠れもしない。呼び出しがあれば、いつでも取り調べに応じる用意がある。そして事件に関する

証拠資料は全部渡してもいい》

刑事訴訟法の上では「逃亡のおそれ」「証拠隠滅のおそれ」がなければ逮捕はできないことになっている。こんな上申書を出せば、理屈の上では、小平署が宅を逮捕し身柄を拘束する理由はないことになる！

そして、Xデーの10月24日当日、こちらから警視庁に逮捕されに出向いて行くことも決めた。後ろめたいなどと宅は一切考えていない。逮捕するのならしてくれと、堂々と正面から桜田門を訪問する。そうしないと、たとえば、宅本人や僕のマンションを張られていて、その場で逮捕、しかもその逮捕場面・連行場面をマスコミに撮られる……という可能性だってある。《自宅で逮捕、手錠・腰縄姿で連行》なんて、最低だ。

時刻は深夜0時すぎ。斎藤弁護士と宅と僕は、いまから小平署に向かい、上申書を提出することにした。いまいる国分寺から地理的に近いということもあるが、一刻も早く上申書を届けるのが得策だと考えたからだ。数分の遅れが命取りにならないとも限らない。

真夜中の道を、小平署へと向かう。小牧の家があるのと同じ道だ。あまり気分のいいドライブじゃない。宅が「このまま小牧の家を襲撃してやろうか」と冗談を飛ばすが、斎藤弁護士は笑わなかった。

小平署前に着く。斎藤弁護士が車を降りて、上申書を提出に向かう。エンジンを切り、宅と僕は車内でじっとしていた。果たして警察側は受理するだろうか……。

10分ほど過ぎてから、小平署からパトカーが1台、すーっと僕らの車の方に向かって出てくる。宅のマンションへ向かった際に検問にあった恐怖と同じ感覚が僕らを襲う。まさか、ここで逮捕されることはないだろうと思ってはいても、それでも不気味だ。パトカーはゆっくりと、息を潜めて僕らが乗る車の前を通り過ぎていった。

斎藤弁護士が戻ってくる。上申書は一応受理された。担当の刑事はいなかったので、警察側の反応はよくわからなかったという。果たして、あの上申書にどれほどの効力があるのだろうか……。再び、僕らは暗い道の中へ車を走らせた。

10月23日

宅・加藤・僕の3人で本多勝一さんとの待ち合わせ場所に向かう。声明をビデオ撮りするためである。途中、本屋へ寄って『ぴあホールＭＡＰ』を買う。明日、開くことになるかもしれない記者会見の会場探しのためだ。弁護士が紹介してくれた弁護士会館と法曹会館は、この日が日曜日のせいか電話がつながらなかった。待ち合わせ場所に、本多さんがやって来てくれた。近くの喫茶店に向かう道すがら、宅が本多さんにたずねる。

「本多さんは、法を犯して逮捕されかかったなんて経験はあるんですか？」と、宅。

「いや、ないねえ。まぁ、あるとしたら交通違反くらいだねえ」と、本多さん。

この時は何げない会話だったのだけれど、結局この10日後に、宅は交通違反で逮捕されてしまうのだから、皮肉なものだ。

喫茶店に入り、注文をすまして、店の人に承諾を得て、いよいよ撮影に入る。本多さんは自宅から持ってきた「変装セット」を取り出し、準備を始めた。

「それでは、本多勝一さんで〜す」とても、あさって逮捕されるかもしれない身とは思えない宅の能天気な前フリ紹介で、本多さんが抗議文を淡々と読みあげていく。

撮影は無事終了した。本多さんは宅に紹介され、宅の逮捕に抗議する、そして最後に横から逮捕されているはずの宅本人が本多氏にお礼を言うという、超シュールなビデオになった。別れ際、本多さんが、「こうなったら、もう、宅さんには逮捕されてもらうしかないな」と笑う。

「いやぁ、でも、もしも本多さんがボクの立場だったらどうされます？」

本多さんは少し考えて、「おれなら、逃げる、かもな」と言った。

それから、宅と加藤はまっすぐ「支援会事務所本部」に戻り、僕はその近くの公衆電話から『ぴあホールＭＡＰ』を片手に、記者会見の会場予約をすることにする。午後5時をすぎると予約ができなくなってしまうため、事務所に帰ってからでは遅いからだ。

商店街の端にある電話ボックスを40分近く占拠して、

ようやく会場を押さえられた。しかし、一応は〝有名タレント〟でもある宅八郎の重大な記者会見なのに、こんなことをして会場探しをしてるなんて。なんとも言えない気分におちいる。

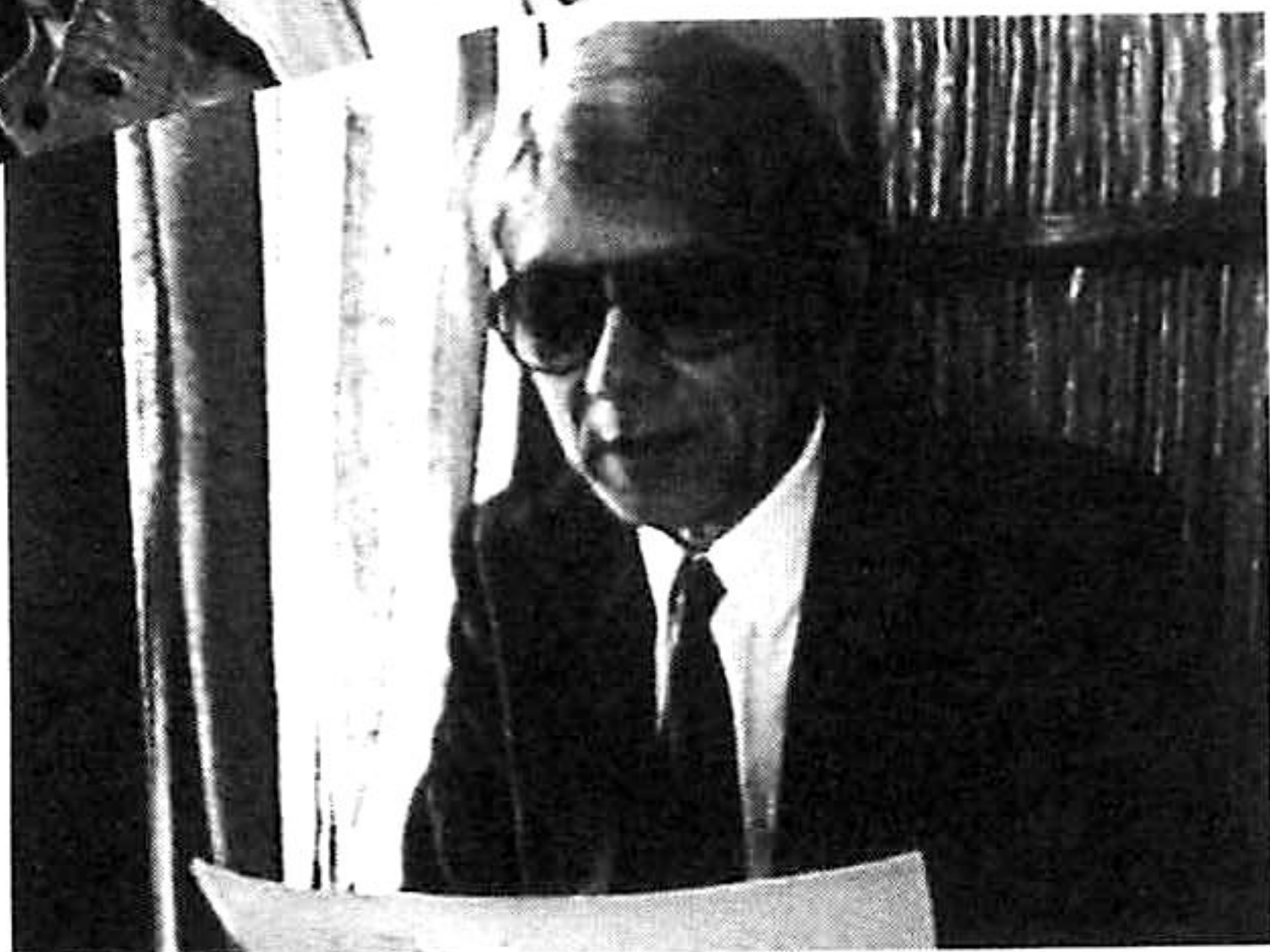
支援会事務局本部では、宅と加藤が「記者会見資料」と「ビデオ」の作成・編集をやっきになって作業している。僕は、弁当やジュースを買いこんで部屋に戻った。3人でガツガツと食事をとる。宅も加藤も僕も、ここ数日、ほとんど顔をつき合わせている。みんなあまり寝てないから、顔色は極端に悪い。

「これは文化祭だな……。なんかさぁ、まるで文化祭の前日に泊まり込みで作業してるみたいだよなぁ」と、宅がポツリと言う。「それも、できれば開きたくない、絶対に始まってほしくないイヤな文化祭の初日に向けて、それでも作業してるっていうさぁ……」

様々な人たちからの支援声明も集まり、記者会見資料はどんどんブ厚くなっていく。明日、逮捕の時が来たら、この資料を全てのマスコミにばら撒いてやる。俺たちがやっているのは、バカ騒ぎの文化祭なんかじゃねえ。文化大革命祭だ！

そんなカラ回り寸前の昂揚した感情で、僕はキーボードを打ち続けた。宅は宅で、狂ったようにワープロ画面をにらみつけている。加藤は、逮捕されたらすぐにFAXで、記者クラブを始めとするマスコミに向けて記者会見の告知をしなければならない。それで、自宅へ帰って作業を続けることにした。

日付けは、とっくに逮捕Xデーの10月24日に変わって

上●宅八郎支援ビデオの司会をする宅八郎「本多勝一さんどうぞ〜」
下●変装し、声明を読み上げる本多勝一「宅八郎氏の逮捕に抗議します……」
（いずれも撮影・加藤将輝）

いる。

10月24日（Xデー）

2時間ほど寝て、朝8時40分に眼が覚めた。宅は、今朝も重病人がもがき苦しむような格好で、うなされながら寝ている。いったいこの人は毎夜毎夜、どんな悪夢を見続けているんだろう……。この人のおかげで「悪夢」を見ている人もいるというのに……。

記者会見予定会場の「日本教育会館」に電話をし、正式に場所を取り、加藤に会場が決定したことを電話で知らせる。彼もほとんど寝てないようだったが、どうにか会見資料の方は完成したようだ。

斎藤弁護士とは、朝9時半にJR中野駅前の喫茶店「サンジェルマン」で待ち合わせている。そこで落ち合って、警視庁に乗り込むのだ。9時を過ぎた時点で、寝ている宅を起こす。「いよいよだな。あ～、ついに来たかぁ……」と、宅がつぶやく。

ぐずぐずして、待ち合わせの時間に少しおくれながら、僕と宅はタクシーに乗って、中野駅前の喫茶店に向かった。店の前には、斎藤弁護士が立っていた。喫茶店の開店が朝10時からだったのだ。仕方なく、僕らは別の喫茶店を探しに、その通りから裏手の方に歩いて行ったのだが、なぜか、こんな時に限って喫茶店が見つからない。

いま頃、すでに警視庁では宅八郎の逮捕状が出ているのかと思うと、喫茶店を探してうろうろしている自分たちが、あまりに間抜けに思えてきた。

ようやく探したあてた喫茶店に腰を落ち着ける。「まぁ、あせらず、ゆっくりしよう」と斎藤弁護士。その時、宅が口を開いた。

「斎藤さん、あのね、これからボクが逮捕されに行くのは警視庁本庁だけど、その前に一応、小平署の方に連絡とってみたら、どうかって思うんですけど……」

2日前の討議で、この逮捕Xデーの24日に警視庁にこちらから出向くという作戦はすでに決めていた。本庁が動いていたのも事実のようだった。しかし、小牧が訴えを出したのは小平署である。一応、小平署に連絡してみるのも、道理と言えば道理であろう。

「そうだね、とりあえず、小平署に電話してみるか」

斎藤弁護士が立ち上がった。

時計は、朝10時24分。3台ならんでいるボックスの真ん中に、斎藤弁護士が入っている。宅と僕は、ボックスの外から、斎藤弁護士を見守る。すぐ近くの立ち食いそば屋では、サラリーマンや学生連中がそばをすすっている。目の前のターミナルでは、タクシーがなかなか来ない客を待っている。そして、宅と僕は、公衆電話ボックスの前で、話が終わるのを、じりじりと待っている。斎藤弁護士の電話がやけに長い。

「こういう、話が長い時って、たいていがイヤな話の時なんだよなぁ」と宅がつぶやく。その瞬間、斎藤弁護士が緑色の受話器を置き、僕らの方を向いた。表情は苦笑いをしていて、良い知らせなのか悪い知らせなのか、判断できない。

「逮捕は、なくなったようだ……」

斎藤弁護士が、ゆっくりとした口調で、そう僕らに告げる。えっ……。ない、ない、ない。逮捕はない。逮捕は、ないんだ。とにかく、Xデーは回避されたってわけだ……!。

僕は、斎藤弁護士が入っていた電話ボックスに入れ替わりに入って、プッシュボタンを押した。受話器の向こうに、加藤の、まだ眠そうな声が聞こえる。

「逮捕、ないみたい」とだけ、まず言った。4秒ほど、加藤はなにもしゃべらなかった。

斎藤弁護士と宅と僕は、もう一度、喫茶店に入り直した。15分前には味がしなかったコーヒーが、胃の中まで染みわたる。

そして、斎藤弁護士は先程の電話の内容をくわしく話しだした。最初、署長への取り次ぎを頼んだら、本庁へ出向いていて不在だと言われたそうだ。その時は「やはり、逮捕か」と斎藤弁護士も覚悟を決めた。しかし、この件の担当刑事に変わり、斎藤弁護士が「これから、宅八郎とともに本庁へ行く」と告げたら、刑事は「そんなこと、勝手にしてもらっちゃ困る」と言う。本庁に行かれても何も対応できないぞ、と。それなら、いまから小平署に行こうか？　と斎藤弁護士が申し出たところ、「急に来られても、こっちも困る。来るなら来週にして

くれ」と刑事は言ったそうだ。結局、ちょうど1週間後、10月31日に小平署に行くということになった。
「あの刑事の対応からみて、逮捕はないね。来週来てくれっていうのも任意だし、そこで逮捕されるなんてのもあり得ない。やっぱり、上申書を提出したのが効いたのかもなぁ。署長が、朝一番に本庁に向かったっていうのも、あの上申書の件について協議しに行った可能性が高いね」と斎藤弁護士。もし、それが事実なら、やはり逮捕の可能性はぎりぎりまであったのだろう。それを考えると、僕らはやはり、相当に危ない綱渡りをしていたのだということを、改めて思い知らされた。
Xデーは、来なかった。
それは、もちろん喜ばしいこと以外のなにものでもないはずだ。逮捕記者会見に用意した資料もビデオも会場も、全部、いらなくなったのだ。でも、なぜか底抜けにうれしい気分にもなれなかった。ある意味で僕らは、絶対に始まって欲しくない文化祭の前日に、そのまま取り残されてしまったのかもしれない。ただ、そんな気分を僕は、宅に言うつもりもなかった。暑くも寒くもない午前中の空気が、寝不足の目に少し染みた。

10月25日

この日僕と宅は、夜まで眠りこけていたせいでぺこぺこに空かせた腹を抱えて、新宿を車で走っていた。宅が、僕にこれまでのいろいろなお礼として何か奢ってくれるというので、二人で焼き肉を食った。小さな店で、客は僕らだけだった。肉を焼き、ビールを飲みながら、たわいもない話をしたはずだ。
食事を終え、帰り道の車の中で、宅は僕に一つの質問をしてきた。
「なぁ藤井、いまだから言えるのかもしれないけど、ボクは逮捕されていた方が良かったのかなぁ」
宅の言いたいことの意味は、よくわかった。悪魔を名乗り、自覚ある反面教師として報道被害とやりあってきた宅八郎の戦略からすれば、あえて逮捕されるという方法論もあったには違いない。事実、僕らがこの間にとった行動自体、「宅八郎逮捕を回避する」ということよりも「逮捕後の反撃」に重点を置いていたに違いないのだ

から。
でも、逮捕された方がいいなんて、そんなことはない、絶対ない、と僕は答えた。
たとえ客観的にみればそうだとしても、そんな視点に立つことを、あなたは拒否してきたはずだ。宅八郎は、非難を浴びようが矛盾を抱え込もうが、客観的立場なんて場所には絶対に立たず、すべてをてめえの問題として、矢面に立ってやってきたんじゃないか。だからこそ、小牧の家族にだって容赦せずに復讐してきたんじゃないか。
「そうだな。逮捕されないことに、こしたことはないんだよな。だってさぁ、そりゃやだよ、逮捕を考える気分って。逮捕まであと何日……なんてことを考えるのは、本当にゾッとするよ。ただ、いくら逮捕されてたとしても、ボクが復讐をあきらめるなんてことは絶対にあり得ないけどね」
宅は、そう言い放ってから、最後にもう一言つぶやいた。
「でも、ボクはこれで逮捕の件が決着ついたとはどうしても思えないんだ。ボクの直感だけどな。絶対にまだ、なにかがあるような気がして仕方ないんだよ……」
僕は、この最後の一言だけは聞き流していた。宅の不気味な言葉を聞き流しながら、僕らの〝開催されたくない文化祭〟は、開かれないまま終わりを告げたんだと思いこんでいた。
しかし、僕らのこの7日間は終わりでもなんでもなくて、これから起こる事件の大いなる始まりだったのだ。この日からちょうど1週間後の11月2日、宅八郎と僕たちの、もっと激しい1週間が始まることになる。
僕らは、そうとは気づかないままに、「逮捕前夜」の日々を走っていたのだった。

●幻に終わった
Xデー記者会見資料の山

❷ドキュメント「逮捕」――［構成］加藤将輝

11月2日朝9時頃。あの日からすでに1週間以上が過ぎたこの日の朝。宅八郎は、2日前の10月31日に小平署への任意出頭もすませ、再び小牧への復讐を考えつつ、寝酒を飲んでいた。

朝は彼にとって、そろそろ眠りにつく時間である。招かざる来客たちは、不意に訪れた。

ドカドカドカ……！　最初は何が何だかわからなかった。やって来た警察官の数、およそ20人。先頭に立つ刑事が「家宅捜索令状」を突きつけ、宅に立ち会いを求めた。しかし令状には、小平署でなく代々木警察署の名前が記されている……。なぜだ、宅は思った。

道路交通法違反だって？　しかし、こんなことで捜査を受けるのか。警察官も増え、30人ほどになった。部屋の中をくまなく捜索してゆく。ワープロのフロッピーに入った文書までも見せろという。その中には、もちろん「ポスト―小牧事件」の資料も入っている。

「犯行を計画した文書があるかもしれないからな」「『業

捜索証明書

被疑者　宅八郎　に対する　道路交通法違反事件につき平成六年十一月二日　東京都渋谷区[illegible]　において行った本職の捜索については、証拠物又は没収すべきものがなかったことを証明する。

平成六年十一月二日

警視庁代々木警察署
司法警察員警部　谷川和信

宅八郎　殿

●家宅捜索の際の、捜索証明書。発行者のT警部はもともと捜査畑で、小平署のある多摩地区の警察に人脈のある人物であった……。

界恐怖新聞』は読んでるぜ」
そんな刑事たちのセリフを宅は聞かされる。とても道交法違反容疑の捜索とは思えない。そこまでして警察は、「ポスト―小牧事件」の資料を欲したのである。
スキを見て宅は、コードレスホンを手にトイレに駆け込み、斎藤弁護士事務所に電話をかけた。
「今、警察のガサ入れが入りました……！」
最初に、警察官は家宅捜索令状だけを提示した。この時点では、宅もまさか逮捕までされるとは思ってはいない。

様式第36号（刑訴第222条、第120条／規則第96条）

押収品目録交付書

平成6年11月2日

宅八郎 殿

警視庁代々木警察署
司法警察員 山田雅武

本職は、次の被疑事件につき、平成6年11月2日渋谷区■■■■ ■■■■駐車場内において、下記目録の物を押収したので、この目録を交付する。

被疑者	宅八郎
罪名	道路交通法違反

押収品目録

品名	数量	品名	数量
自家用普通乗用自動車（習志野77を・368号）	1台		
エンジン鍵（上記自動車のもの）	1個		
自動車検査証（上記自動車のもの）	1通		

●押収品目録交付書

「何だ、コレは」。ある捜査官は、宅が『ナイタイマガジン』からもらった新型バイブレーターのスイッチを入れて動かし、いやらしく笑っている。
また、昔、宅がCM出演した女性器洗浄器具（ビデ）の『プチシャワー・セペ』が、大量に段ボール箱1杯分あったのを発見した女性捜査員Kは叫んだ。
「こんなもの、自分で使ってるの!? この変態野郎！」
「自分で使ってるよ！ 1日2本だッ!!」
怒鳴り返す、宅八郎。

＊

まだ寝ていた加藤将輝の枕元で電話が鳴る。相手は斎藤健児弁護士だった。
「大変だ！ 宅さんから僕の事務所に連絡があった。事務員によれば、家宅捜索が入ったらしい。とにかく僕は宅さんのマンションへ行ってみるよ」
ガサ入れだって？ 加藤の目も覚める。10月のXデー、逮捕は免れたと思っていたのに。警察、そして小学館側はあきらめてなかったんだな……。すぐに加藤は藤

井良樹に連絡をとる。藤井も宅のマンションに急行することになった。

＊

10時過ぎ。宅は「車の中も調べるから」と階下の駐車場に降ろされた。

そして10時22分。宅は、駐車場で唐突に逮捕令状を見せられた。警察は路上に面した公衆の面前で逮捕したかったのだ。宅は一瞬、逃亡も考えたが、もうしょうがない。

「わかったから、身支度くらい、着替えくらいさせてくれないか」

「手錠はカンベンしてもらえませんか」

しかし問答無用。警察は一切の頼みを聞き入れない。T警部の態度は強硬だった。スエット姿の宅は、靴下さえ履かせてもらえない裸足のまま、手錠に腰縄をはめられ、護送車に収容されてしまう。

この逮捕を、作家・安部譲二（前科14犯）は後に「それはかなりひどすぎるな」と語った。

そして、車に乗せられてからわずか1～2分後、警察官が衝撃の発言をする。

「2日前は小平で御苦労さん！」

錯乱しそうな頭の中で、宅はかろうじて別件逮捕されたことだけは理解できた。

＊

「宅さん、どこにもいないよ」「車は見ましたか、斉藤さん？」

宅のマンションにやって来た斉藤弁護士は、自宅待機していた加藤に電話をかけた。宅は本当に家の中にいないのか。部屋で寝込んでいるかもしれない。そう思った加藤は、斉藤弁護士に、車があるかどうかを確認してもらったのだ。

やや遅れて到着した藤井

斉藤さんから TELを
もらい、かけつけました。
どうなっているのでしょうか。
（斉藤さんとは、マンション
の前で会い、
しばらく待っていました）
連絡を下さい。
みんな心配しています
11/2
2:00PM
藤井良樹

●藤井がドアにはさんでおいた宅への置き手紙

が見たのは、マンションの駐車場にしゃがみこんで、呆然とタバコを吸っている斎藤弁護士だった。
「藤井さん、宅さんがいないんだよ。車も消えてるし、どこへ行ったんだろう?」

●本物の供述調書用紙（警視庁の親切な捜査員が記念にくれたもの）

様式第八号（刑訴第一九八条）　（甲）

供述調書

本籍
住居　職業　（電話　局　番）
氏名　年　月　日生（　歳）
右の者に対する　被疑事件につき、平成　年
月　日　において、本職は、
あらかじめ被疑者に対し自己の意思に反して供述をする必要がない旨を告げて取り調べたところ、任意次のとおり供述した。
一出生地は
二位記、勲章、年金は
三前科は

「宅さん、気晴らしにドライブにでも行ったのかなあ……」藤井がつぶやいた。

＊

……宅八郎はどこへ消えたわけでもなかった。代々木署に逮捕され、手錠に腰縄姿で署へ連行されていたのだ。10時半頃、宅は、代々木署に到着して、護送車から降ろされる。甲州街道に面した表玄関だった。人がいっぱい見ている。イヤだな、宅は思った。
まず、最初に写真撮影と指紋押捺の手続きをする。これがファイルになって、前歴者の台帳に記録されるのだろう。そういえば2日前に小平署に出頭した時には、任意だからと、指紋押捺を拒否したことを思い出していた。そうか、指紋も欲しかったったんだな……。宅は、捜査員たちの様子を見ながら、対策を考えていた。

＊

ガサ入れ、とは何のことだ。本当に、宅さんの身に何かあったのか。事務所に戻った斎藤弁護士はイヤな予感を抱いて、小平署の刑事課に電話をかけてみることにした。ところが……。
「いやあ、うちじゃないんです。代々木署なんですよ」
意地悪く、刑事課長が言った。関係ないはずの小平署がもう逮捕を知っているとは。別件で仕組まれた壮大なたくらみに、斎藤弁護士もおそるべきものを感じていた……。

＊

「こうなりゃ、取り調べを早くして、帰してくれ。今日は夕方から『投稿写真』という雑誌の仕事があるから」

宅は代々木署捜査員に言った。

「へえ、お気の毒に」捜査員のとぼけた返事だった。たかだか物損事故の調書を取るのに、ずいぶん時間をかけている。この時宅は、逮捕そのものが目的だったのだと理解した。別の捜査員が小平署の事件についても尋ね、メモを取っている。

3階にある交通課の取調室でも手錠、腰縄姿のまま、椅子につながれ、まるで人間椅子状態。

トイレに行く時も手錠が付けられたまま。トイレのドアも開けっ放しにさせられる。こうして屈辱感を与えるのが警察のやり方なのだ。

捜査員に金を渡して（サイフから抜いてもらうのだ）、コンビニの幕の内弁当とジュースを買ってきてもらう。この日の昼食だった。もう12時を過ぎている。

「そろそろ留置手続きを取るからな」

2階の留置場に行く。Kという鬼軍曹みたいな看守係長に睨まれる。そこで身長体重測定のために、裸にさせられた。これ以降、釈放まで、宅は警察の中で「六号」と呼ばれることになる。留置される檻（おり）は一番奥の独房だったので、まるでさらしもの。それぞれの檻から犯罪者たちが、宅を珍しそうに見ていた。

＊

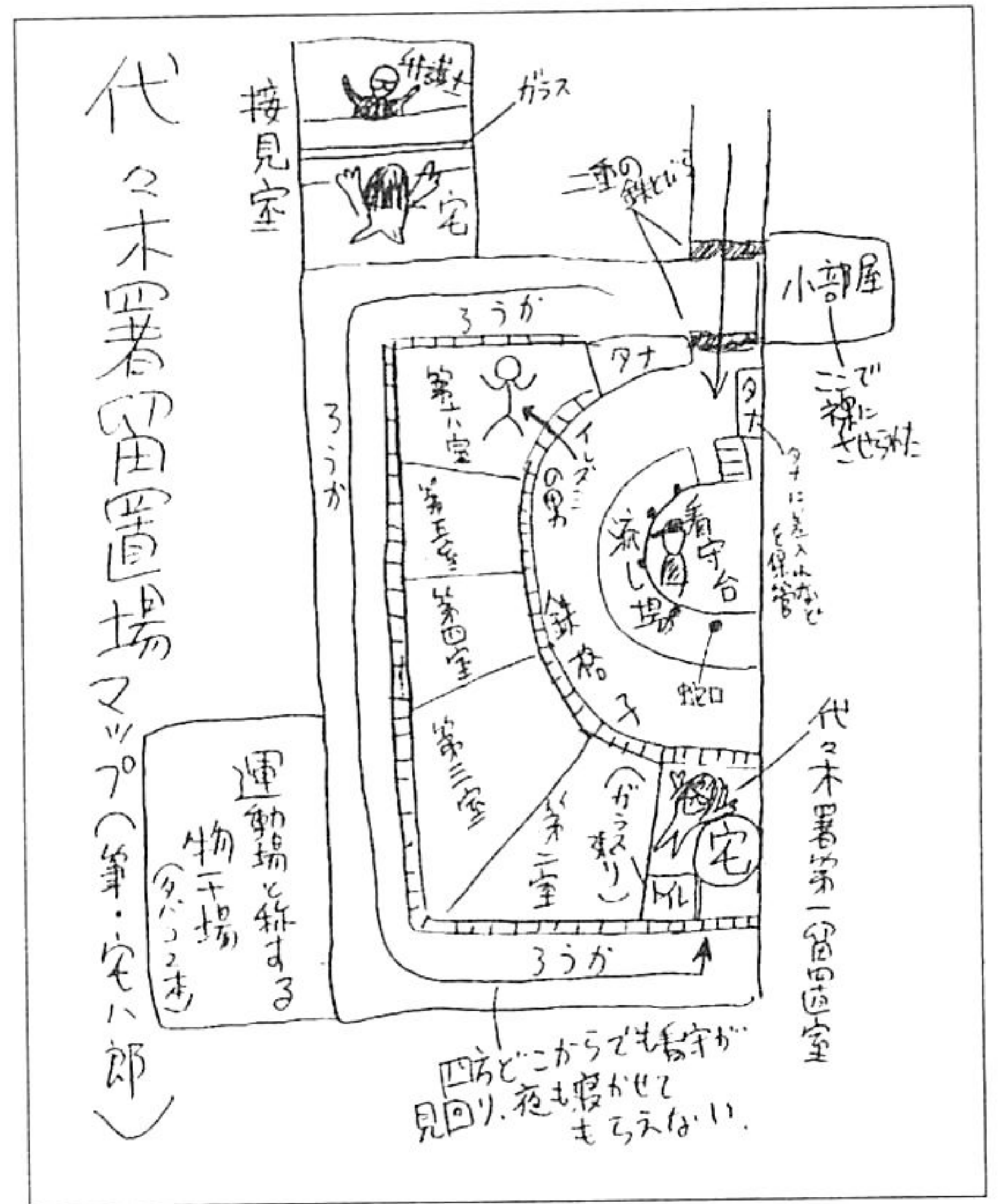
小平署から宅の逮捕を知らされた斎藤弁護士は、代々木署に連絡を入れて、午後4時30分に接見する約束をとりつけた。そして加藤にも報告の電話をかける。加藤は藤井に連絡した。

「これは、前に宅さんが言ってた、あの○○○○おばさんの事故のことじゃないか？」

「ふざけんなよ、交通違反で逮捕だって？　みえみえの別件逮捕しやがって！」

＊

午後2時頃。宅は実況検分のために自宅マンションに向かう。手錠・腰縄のままで再び、人通りの多い道路を歩かされ、護送車へ。これでは人権もなにもあったものじゃない。同行したのはFという捜査員とK看守係長、ほか数名だった。

代々木署留置場マップ（第・宅八郎）

まず自宅駐車場で、接触事故の実況検分。ずっと手錠・腰縄のままだった。近所の人が見ている。この時まだ宅は、わずか数時間前に斎藤弁護士と藤井がここにやって来たことを知りようもなかった。
その後、部屋に入って、交通事故に関する資料（相手方に殴られた件の）文書をワープロで、プリントアウトする。宅は何とか、容疑に関する資料だから、と提出を認めさせたのだ。しかし、部屋では留守電も聞けない、

自室なのに小便もさせてもらえない。
「お前のような奴には、基本的な人権はないんだ！」
K看守係長が言い放つ。
信じられないスゴイ言葉だった。代々木署に一度戻ってトイレを使え、と言う。宅は何度も何度も、署の前を手錠・腰縄姿でうろうろしたくはなかったので我慢する。
「いつ帰れるか、もうわからんぞ」「あさって、4日は身柄送検だ！」
帰りの護送車の中で、警察官Fは宅に意地悪く、絶望的なことを言い放った。
代々木署に戻ると、いったん留置場に入れられ、数分後に取調室へ行く。
すると「斎藤弁護士という人が午後4時半に来るそうだ」と、捜査員が苦々しく言う。おかしいな、宅は思った。こちらから連絡を入れていないのに、斎藤さんはなぜ逮捕を知っているんだろう……。支援者たちの動きがまったく読めない。ただ、弁護士が来るという情報に、さすがに即時釈放されるだろうと思った。
そして午後4時すぎ、逮捕容疑に関する取り調べはす

べて終了した。
「これで終わりだ、こっちはね……」と捜査員が言う。
「こっちは」とはいったいどういうことだろう。やはり本件は別にあるんじゃないか。

＊

午後４時13分、藤井が代々木署に着いた時、すでに斎藤弁護士と加藤がいた。
しばらく待つ間に、弁護士と捜査員が話をする。微罪で別件なんだから早く釈放するようにと言うと、「それを決めるのは検察だから」「東京区検のＣ副検事が担当です」と、とぼけだす。何とすごいことに、送検もされていないのにもう検事が決まっている。
やはりこれは別件逮捕、警視庁と小学館側が絵を描いているのだ。
しばらくして、斎藤弁護士だけに接見が許される。接見室の強化ガラスの向こうに、悔しさをかみ殺した宅八郎がいた。

＊

午後４時30分、「代々木署留置場接見室」。
最初の接見だった。ようやく「中」と「外」の情報が交差する。逮捕された時の様子を斎藤弁護士は聞き、また、なぜ弁護士が来たのか、を宅は知った。交通事故の相手方に殴られ、事後処理に手間取っていたことは、以前、加藤と藤井に話していたので、お互いに話が早い。
しかし、宅は斎藤弁護士から、即時釈放がないことを知り愕然(がくぜん)とする。
「後で午後８時くらいに梓澤弁護士が来ます」と言うと、斎藤弁護士は帰ってゆく。

＊

１時間ほどの接見を終え、代々木署のロビーに斎藤弁護士が降りてきた。
「宅さん、どうでした？」加藤と藤井が待ちきれずにたずねる。
「こんな別件で逮捕されて、君たちにも申し訳ないって、宅さん……。Ｘデーまで、あんなにがんばったのに、すまないって言ってたよ……」
代々木署を出て、３人は近くの喫茶店へ。こんな別件逮捕があっていいのか。とにかく対策を練り直さなけ

ればいけない。Xデーに向けて立てていた作戦が、「代々木署による道交法違反容疑による逮捕」という現実に、ブッ飛んでしまったからだ。

何よりも最大の焦点は、記者会見開催のタイミングにある。果たして、マスコミが「宅八郎逮捕」の情報をキャッチしているのか、いないのか？　それが問題なのだ。

マスコミが気づいていないのに、わざわざこちらから漏らす必要はない。しかし、マスコミが動いているのなら、早急に記者会見を開き、この事件が明らかな不当逮捕であることをアピールしなければならないだろう。記者クラブにも知り合いがいる梓澤弁護士と合流し、状況を探ってもらうことにした。そのため3人は新宿に移動する。

＊

宅は接見を終えて、留置場に引き戻された。

午後6時すぎ。宅、生まれて初めてのクサい飯。ホカホカ弁当のような白いスチロール製容器に入った、シャケに惣菜が1品と麦飯の夕食。粗食だけど食えなくもない、体によさそうでいい、宅は思った。しかし、ごはんはまずい。

食事後、梓澤弁護士の接見を待ちながら、ブタ箱の中を観察。宅は少しずつ留置場の構造を把握してゆく。もしシャバにいたら、今ごろは雑誌『投稿写真』の仕事で、パンチラ写真でも見てる頃なのにな……。

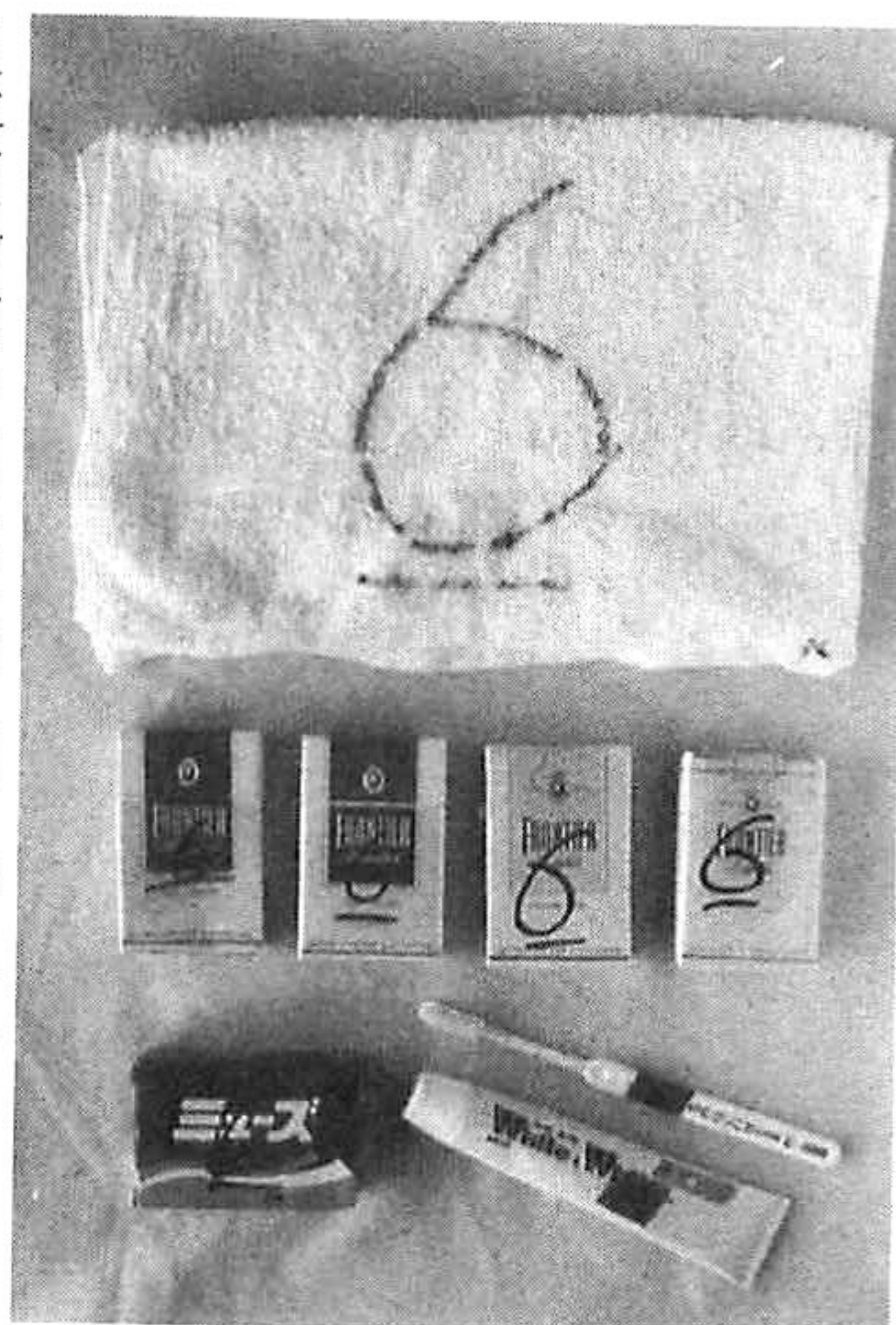
＊

午後7時すぎ。斎藤、加藤、藤井の3人は新宿の喫茶店「滝沢別館」で、梓澤弁護士と合流する。早速、電話でマスコミ関係者に探りを入れるが、確証がつかめない。

「だけど会見をやるかどうか困ったな」

「宅さんの直感にまかせるか」

とりあえず、梓澤弁護士には代々木署に接見に行ってもらうことにする。弁護士なら差し入れ可能なため、藤井が買い出しに行く。Xデーを目前にした10月に、宅が作っておいた「差し入れリスト」が現実に役に立つとは……。

「そういえば宅さん、フロンティア・ライトとメンソー

●六号グッズ（差し入れにはすべて六号と記される）

ル、両方って言ってたな」

藤井は思い出して、２種類のタバコ、それにセーター、トレーナーなどを買い込む。梓澤弁護士が、それらを持って代々木署へ向かった。

＊

午後8時15分頃、「代々木署留置場接見室」。

梓澤弁護士が到着。そしてガラス越しの「中」と「外」で、マスコミ対策を協議。本件の小学館事件による逮捕でなかったことが問題だった。

「こんな交通違反で来るとは思いませんでした。間抜けでした。すみません」

「いや、その間抜けなところに突け込んでくるのが、ヤツらのやり方だから……」

宅は、自分が自由の身ならと、もどかしく感じた。マスコミ戦略はお手の物なのに……。記者会見は慎重に対応してほしい、しかし、やらなくてはいけない状況ならタイミング良くやってほしい、と宅は梓澤弁護士に頼むしかなかった……。この時すでに、宅の自宅マンション前に報道陣が殺到していたことは、知る由もない。

梓澤弁護士は差し入れを置いて帰っていった。

留置場の夜は早い。就寝は9時だった。その直前になって、急に看守に呼ばれる。もう一度どうしても接見の必要がある、と弁護士が来ていると言う。そして接見室に行くと、さっき帰ったはずの梓澤弁護士が、なぜか舞い戻って来ていた。

「宅さん、大変だッ！　代々木署の前に芸能レポーターが集結しているよッ!!」

＊

夜10時半頃、帰宅した加藤は、作家の安部譲二に電話をかける。安部には10月24日（Xデー）に「逮捕は一応消えました」と連絡を入れて以来の電話だ。皮肉なことに今日は、「やはり、宅が逮捕されました」と伝えなければならない。

「彼は初めてだろう、僕は40回以上逮捕されたけど。寒いんだよ、留置場は。セーターとか暖かいもの、差し入れてあげてよ」

安部は悲痛な声をあげる。

加藤が電話を切ろうとすると、安部は続けて言った。

「いや待ってくれ。ちょっとおかしいことがある。ぼくもさっき帰ったばかりなんだが、留守電にスポーツ紙の記者から、宅さんのことで話が聞きたいと入っていた。そこに連絡してみよう」

しばらくして、加藤に電話がかかってくる。

「やっぱり情報が漏れてる。今、デイリースポーツの記者に聞かされたよ」

安部の電話に続いて、デイリーの記者からも電話がかかってくる。

「午後6時に共同通信がスクープのような形で配信しました。うちもそれを受けて動いたし、各紙、テレビなども取材に出ているみたいですよ」と記者は教えてくれた。

その頃、すでに梓澤弁護士は記者会見に向けて、動き出していた……。

＊

夜11時35分。人気のない秋葉原の街を、テレビ局のマークが入った何台ものワゴンカーが走り抜け、あるビルの前で停車する。そのビルの5階では、まさに「宅八郎氏の不当逮捕に抗議する緊急記者会見」が開かれようとしていた。

報道陣は、一般紙では読売・毎日・産経を始めとして、ほとんどのスポーツ紙、週刊誌、TBSを除く各民放、NHKも来ている。午後6時の時点で共同通信が配信し、「宅八郎逮捕」はすでにテレビ・ラジオのニュースで流されていたのだった。

10月24日のXデーを想定して作った「記者会見資料」が報道陣に配布される。レポーターや記者たちは、なぜ

そんな資料がすでにあるのかと驚きを隠せない。

＊

ようやく準備を終えた加藤は、タクシーに飛び乗った。

あまりにも慌てた様子に、運転手が「これからお仕事ですか」と尋ねてくる。

「運転手さん、宅八郎って知ってます？　今日逮捕されたんですけどね、これから弁護士が記者会見するんですよ。それにわたしも出るんです」

「ああ、NHKラジオのニュースで聞きましたよ。7時くらいかなあ。何か、車を当て逃げして、お金もまだ払ってないんでしょ」と、運転手は実に詳しい。しかし、それは警視庁発表そのもの、の内容だった。

●代々木署前で事件を報告する芸能レポーター（11月4日放送「スーパーモーニング」）

そして加藤が、梓澤事務所に到着した時には、すでに両弁護士と藤井は前に並び、既に記者も着席し、テレビカメラも並んでいる。何とか開始には間に合った。

「まず初めに、今回の宅八郎さんの道交法違反による逮捕が、明らかな不当別件逮捕であることを、認識していただきたい」

梓澤弁護士の発言で、前代未聞の「容疑者側からの緊急反撃記者会見」は始まった！

＊

その頃、宅八郎は自分の記者会見が行われているのも知らず、留置場で震えていた。あまりの寒さに眠る気力さえない。徹夜で一睡もしないうちに逮捕され、身体は疲れきっているはずなのに目がさえる。就寝時刻に、照明は半分の光量にされたが、まだ明るい。代々木署留置場は一時の安息さえ与えないのか。ようやくうとうとしても、神経性の下痢に襲われ、看守から丸見えのトイレに何度も何度も駆け込む。体まなくては……。

11月3日、文化の日、朝6時。

「起床！」看取が怒鳴る。

結局、一睡もできぬまま、起床時刻を迎えた。モップやほうきが檻に放り込まれ、強制的に掃除させられる。その後、檻の外に出て共同流し場で、他の受刑者といっしょに洗顔と歯磨きを済ます。そのとき流し場で左隣になった男は全身刺青。風呂の回数が少ないためか、裸になって頭まで石鹸で洗っている。

朝7時。宅は朝食のあまりのひどさにショックを受ける。昨夜の粗食は、いま思うと〝豪華ディナー〟だったのだ。ただの麦飯に、しなびた昆布が数本のっているだけ。あとは、薄い味噌汁にタダの水。目茶苦茶なマズさに、とても全部は食えない。

＊

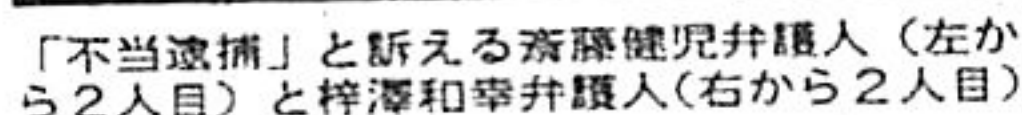
加藤もほとんど眠っていない。マスコミは宅八郎逮捕をどう報道するのか？　そして、午前1時にまで及んだ記者会見の効果は？

朝5時過ぎには、駅、コンビニへと全朝刊・スポーツ新聞を買い集めに回った。

ひどい。記事には、記者会見がほとんど反映されていなかった。あまりの日本のマスコミのレベルの低さに、あきれてものも言えない。特に一般紙はひどい、警察発表そのままのタレ流しじゃないか、加藤は憤慨する。

読売・毎日・産経は会見に来ていながら「不当逮捕」には一切触れず。スポーツ紙も「当て逃げ」についてはひどいが、一応は小さく「反撃記者会見」を報じていた。

逮捕当日に資料まで用意して会見を開いたのに、この程度か。もし何もやらなかったら、どのような扱いになっていたのだろう……。

また、報知で『噂の真相』の岡留編集長がコメントしているのを見て、仰天する。11月10日に発売予定の同

●前代未聞の「容疑者側からの緊急反撃記者会見」（11月4日東京スポーツ）

「不当逮捕」と訴える斎藤健児弁護人（左から2人目）と梓澤和幸弁護人（右から2人目）

弁護団は不当逮捕を主張

宅容疑者逮捕から日付が変わった3日午前0時すぎ、同容疑者の弁護人の斎藤健児氏、梓澤和幸氏ら4人が東京・千代田区の千代田法律事務所で会見を行い「不当逮捕だ」と訴えた。

代々木署に留置されている宅容疑者と面会した梓澤弁護人は、同容疑者の主張を次のとおり発表した。

「本件は小森隆生（元週刊プレイボーイ編集者）の事件や『週刊ポスト』との激突のなかで（宅容疑者が連載する）『噂の真相』11月号で警察を挑発したから狙い撃とうとして逮捕になったものと思われる。この一件に関して言えば、こんなことで拘束されるのか!?　といった思いだ。交通事故の申告義務違反については、相手方と覚書を交わし、車の修理代金10万何千円を払う約束をしていた。ところが、相手との示談がこじれ、交渉を続けている最中だった。警察ざたにする必要はあるまい。忙しさにまぎれ、警察へ行くのが遅れていたが、突然このようになりびっくりしています。拘束中、警察は、小平署（週刊ポスト編集者小牧氏宅放火騒ぎで出動した警察署）のことを『噂の真相』で読んだとも言った。やはりこれは小平の件に関連して強制捜査が行われたのだと思う」

そして弁護人たちは、あて逃げに関する背景を説明した。

「宅は、車の事故があって、それを申告しなかったことは

月刊誌で警察を挑

誌12月号で、宅が書いている内容をしゃべっていたからだ。宅はものも言えない拘留中だというのに。

宅の気持ちを考えると、加藤の心は沈んだ。

＊

文化の日。代々木署第一留置場。そういえば、新聞が今朝は入れられなかった。記事が出ているのか……。それとも、気の回しすぎなのか……。宅は、自分の逮捕を本当にマスコミが報道しているのかどうか、気になって仕方がなかった。

そんなことを考えながら、午前中は檻の中でぶらぶら過ごす。

タバコを吸わせてやる、と言われて「運動場」に行った。しかし、そこはタダのバルコニーで、物干場のような8畳ほどのスペース。備品の電気カミソリで髭を剃る。タバコは1日2本だった。ヘビースモーカーの宅にとって2本はキツイ。しかし、宅は差し入れのタバコを見て、すぐに藤井のことを思い出した。ライトとメンソール、2種類の『フロンティア』だったからだ。少しだけ気が休まる。

しかし、まだ、宅は考えていた。もしも、新聞やテレビで逮捕が報道されているとしても、案外、まともなものかもしれない……。自分にとって有利な報道だってあるかも……。

＊

ひどい。加藤は自宅で、怒りと失望でぶるぶる震えていた。民放各局のワイドショーをチェックしていたからだ。テレビ関係の仕事の経験もあり、あの業界の悪質さは身を持って知っていたつもりだが、やはり、ひどい。茶番劇以下。こんな世の中、最低だ。

「宅八郎逮捕」の報道をダビング編集する加藤のもとに、斎藤弁護士から電話がかかってきた。こんな軽微な事犯で拘留延長なんかするな、という上申書を検察・裁判所両方に出し、逮捕そのものが不当だ、という準抗告を地裁に起こす。そのための証明資料を作成してくれ、と斎藤弁護士は言う。

軽い交通違反にここまで手を打った例は、たぶんない。しかし、そのために、さらに加藤は忙しくなった。

＊

12時。留置場の昼食は、ただのコッペパンだけだった。ジャムこそあったが、牛乳もなく、水だけ。

そして午後、宅は取調室で事情聴取を受けることになった。すべて、報告義務違反の取り調べは、前日に終わっているのに。担当捜査員のKは、昨日の家宅捜索で、宅を変態呼ばわりした女だ。

この時、捜査員が机の上に広げて見せた証拠資料の中に「業界恐怖新聞11月号」があって、宅は驚く。自分が逮捕された容疑は道交法違反だったはずなのに……。正式な調書は作らず、この時も、小平の話が出た。こうなればと、宅は小学館の話をいくらでも話してやる。この時、女性捜査員Kから、「交通事故相手の女性が46歳なのに独身なのは、異常だ」などと、意味深な話を聞かされた。結局、文化の日は無為に、文化的でなく過ぎてゆく。

今日も出られないのだろうか。宅は、弁護士の接見を待ち遠しく思う……。

*

弁護士二人は、午後から東京区検に行った。担当のC副検事は祝日のためか不在。事務官は「送検は明日だからまだ担当の検察官は決まってませんよ」と、とぼけている。結局、上申書は受け取らない。次は東京地裁の刑事14部に。ここで逮捕は不当だという準抗告の申し立て。そして二人は、接見のために代々木署へ向かった。

*

午後5時、「代々木署留置場接見室」。「内」と「外」が交差する部屋で、1日ぶりに宅は弁護士二人の顔を見る。いったい外は……、もしかして報道がすごいことになっているのか、

●検察、裁判所の両方に提出した上申書

上申書

被疑者 宅八郎
弁護士 齋藤健児
弁護士 梓澤和幸

一、右被疑者は、平成六年一一月二日、警視庁代々木警察署によって道路交通法違反（同法72条・報告義務違反）の容疑で逮捕され、現在同署において留置されている。
しかし右逮捕は、以下に述べるとおり逮捕の理由・必要性等の要件を欠いた極めて不当な逮捕であり、被疑者は速やかに釈放されるべきである。勾留の必要性は全くなく、貴裁判所におかれては万一勾留の請求ありたるときは、これを却下されたく上申する。

二、（被疑事実の要旨と逮捕の必要性）
逮捕の被疑事実の要旨は次のとおりである。
被疑者は、平成六年七月二二日、その住所である渋谷区[illegible]の一階にある駐車場から、同人所有の普通乗用自動車を運転し、バックしてマンション前の道路に出ようとした際、折から道路上に駐車していた太田某所有の普通乗用自動車に接触する事故を起こしたのに、これを警察に報告しなかったというものである。
逮捕の必要性としては、右事故後、被害届を受けた代々木警察署が、被疑者に対し何度も警察に出頭するよう連絡をしたが、被疑者は出頭しなかったというものである。

三、（事実の経過）
(1) 七月二二日、被疑者が車をバックさせた際、道路上に駐車していた太田某所有の車と接触事故を起こしたのは事実である。その際被疑者は「コツン」と軽い小さなショックを感じたが、駐車中の車のタイアにでも接触した程度と思い、その日はそのまま運転して外出した。
翌朝、車で戻ってきたところ被害者の太田某から「あなたがぶつけたんですね」と言われ、その時「ぶつかったんだな」と改めて思い、同女に対して事実を認めて謝罪し、求めに応じて「修理費を弁済する旨」の覚え書きを同女に手渡した。

そのことが知りたかった。
梓澤弁護士が、実は記者会見をやった、と切り出す。長い接見になり、2時間に及ぶ。
『噂の真相』の話も出て、宅も驚く。命よりも大切な連載の打ち切りが確定したことを、拘留中に初めて知ったのだ。
そして、宅は斎藤弁護士に、朝日新聞朝刊をガラス越しに見せられる。あまりにも一方的な記事だった。許せない……。
「斎藤さん、梓澤さん! いっそボクが何日か拘留されることで、逆にヤツらの不当性が暴かれるのなら、ボクは何日でもここにいますよ! こうなったら、一生ここに住んでやる!!」
しかし、両弁護士は、出来るだけ早い釈放を勝ち取る方がいい、という意見だった。
「とにかく勝負はボクが出た時。それまでよろしくお願いします」

＊

深夜の記者会見で、支援者の名乗りを上げた加藤と藤井に電話が殺到。留守電に連動した二人のポケベルがひっきりなしに鳴り、公衆電話で対応に追われる。藤井には東京スポーツ、東京中日スポーツ、アサヒ芸能、FOCUSなど。加藤にはデイリースポーツ、報知新聞などから連絡があった。

＊

宅の夕食。ハムカツ。やはり夕食は粗食として食べられなくもない。ただ、これはディナーなのだ。この日も一睡もできず。寒い。神経性の下痢がとまらない……。

＊

11月4日朝7時。代々木署前。
宅八郎が身柄送検される瞬間を狙う約30人の報道陣とともに、加藤と藤井もいる。
藤井は報道陣に「不当逮捕資料」を配布しまくる。加藤は8ミリビデオで、報道陣を撮りまくる。同時進行復讐ドキュメンタリー『ゆきゆきて、宅八郎』の撮影だ。
そして午前8時28分。護送車が門に向かってくる。警察署横手の裏門から、あっという間もなく走り去り、甲州街道を東に消えて行く。結局、宅の姿を確認出来な

い。

これには、梓澤の強硬な代々木署への働きかけがあった。「身柄送検時にマスコミに連行写真を撮らせるな！」という要望書を提出したのだ。これがなければ、またも手錠・腰縄のまま署の前を歩かされ、マスコミの餌食になる可能性も高かった。

宅サイドとして、雑誌の取材を受けに行った藤井と別れ、加藤は霞が関の東京区検に向かう。二人の弁護士とおちあうためだった……。

＊

午前9時頃、検察庁へ身柄送検された宅は、午前中ずっと待たされていた。もうすぐ昼だ。護送してきた4人の警察官もイライラしている。

すると、斎藤弁護士がやってくる。区検の待合室での接見だった。

「斎藤さん、タバコください」宅は、何本もむさぼるように吸った。加藤は下で待っている、という。そこで、報告義務違反だけは認めて早く出る、という方針を決めて、弁護士は去っていった。釈放は夕方になるらしい。

そろそろ昼食の時間だ。前日と同じマズいコッペパン1個を警察官に渡される。赤茶けたマズいイチゴジャムが付いていた。

＊

その頃、加藤と斎藤弁護士は、東京第一弁護士会地下のレストランで、昼食を取る。藤井も合流し、やがて、梓澤弁護士もやって来た。

「ひどい報道が流され続けている。早く記者会見をやったほうがいい。釈放を伝えるニュースも出るし、そこでも何を言われるか、わからない。今日、記者会見をやろう」

●身柄送検も撮影されるところだった……（11月7日放送「モーニングEYE」）

全員で協議の末、午後9時、梓澤事務所で緊急に釈放記者会見をやることが決定した。ここでいったん解散し、午後4時40分、東京弁護士会でおちあうことにする。

＊

宅の取り調べはまだ始まらない。午後も延々と待たされ、警察官も疲れてくる。

「交通違反で二人も弁護士が出てくるのは異常だ」

「弁護士のおかげで、いろいろと署でも面倒なことになってる」

「宅さん、あんた代用監獄って知ってる？」

警察官たちも、疲れてきたのか、本音が出るようになる。

「釈放されたら、家でぐっすり眠れるね」

人の良さそうな警官は、宅に言った。

「家に帰れるわけないでしょう。釈放されたとしても、ここからどう脱出するかがまず第一の問題なんだから」

外の様子を予想して、宅は答えた。しかし、警官にはピンとこない。

そして、ついにC副検事の取り調べが始まった。このC副検事は、宅が逮捕される前から担当になっていたという不思議な男だ。こいつがひどかった。

「言うことをきかないと、釈放はない！」「延々拘留されたいのか！」「言い訳はいい！」「理屈は言うな！」「供述調書はこっちで書くから、おまえはサインだけすればいいんだ！」

あげくの果てに「おまえに会いたがっている検事は他にもいるんだぞ！　そっちに回してやろうか!!」とまで言った。そして、どこかに内線電話をかけたが、相手に叱責されたらしく、あわてて受話器を置いた。

やっぱり別件なんだな。宅も頭にきたが、弁護士の手前もあるし方針も決めたことだから、我慢し続けた。

結局、C副検事の取り調べはわずか1時間で終了。この後、資料が裁判所に送られる。すでに絵は描かれていた感じだった。とっとと帰れ、という顔をしている。呼んでおいて何だ、来たくて来てんじゃないよ、宅は思った。

「大変だ！　外には報道陣が100人近く来ている。ス

ゴイことになってるよ」

警官たちが困っている。そこで護送車でなく検察庁の車に乗せられ、簡裁に行った。簡裁で手続き待ち。その間も手錠・腰縄は解かれない。結果が出た時点で、釈放だ。

そして、東京簡裁のH裁判官名で、略式命令が出た。罰金1万5000円。

そう、たった1万5000円だ。警察官4人は「俺たちの日当より安い罰金だ」などとほざき、「安いもんだ」などと抜かして、憤慨している。

〝それっぽっちの罰金で、2泊3日も拘留されたボクの立場は何なんだ！〟宅は思った。しかし、とにかく国家の拘束は、ようやく解

平成6年検第316456号

起訴状

左記被告事件につき公訴を提起し、略式命令を請求する。

平成六年一月四日

東京区検察庁

検察官副検事　千葉忠之

東京簡易裁判所　殿

本籍

住居

職業　タレント

（在庁）

宅八郎

昭和三七年八月一九

公訴事実

被告人は、平成六年七月二二日午後七時ころ、東京都渋谷区　番　号付近道路において、普通乗用自動車を運転中、左前方に駐車中の大田■所有の普通乗用自動車に衝突させ、同車の左ドア等を損壊（損害額約九万三二〇円相当）する交通事故を起こしたのに、その事故発生の日時及び場所等法律の定める事項を、直ちに最寄りの警察署の警察官に報告しなかったものである。

罪名及び罰条

道路交通法違反　同法第七二条第一項後段　第一一九条第一項第一〇号

平成6年東地庁外領第6339号

13370

平成6年（い）第A671号

略式

被告人　宅八郎

本籍、住居、職業、生年月日及び事件名は起訴状の記載を引用する。

右被告事件について　次のとおり略式命令をする。

主文

被告人を罰金　壱万五千円に処する。

右罰金を完納できないときは金五〇〇〇円を一日に換算した期間被告人を労役場に留置する。

ただし、端数を生じたときはこれを一日とする。

右罰金に相当する金額を仮りに納付することを命ずる。

罪となるべき事実　起訴状記載の公訴事実

適用した法令　起訴状記載の罰条を引用するほか

刑法第一八条　刑事訴訟法第三四八条

平成六年一月四日

東京簡易裁判所

裁判官　廣川和夫

訴訟関係人は、この命令送達の日から一四日以内に正式裁判の請求をすることができ、いつでも弁護人を選任することができる。貧困その他の事由で弁護人を選任することができないときは、弁護人の選任を裁判所に請求することができる。

右は謄本である。　前同日同庁　裁判所書記官　馬場富夫

上●起訴状（東京区検発行）
下左●略式命令謄本（東京簡裁発行）
下右●これが留置場六号サンダルだ。
写真提供／『週刊金曜日』

かれようとしている。警察官によって、ついに腰縄がゆるめられ、そしてついに手錠がはずされた！
釈放の瞬間だった。しかし、宅はまだ完全なる自由を得たとは言いがたい。足元は、逮捕された時のままの裸足で、靴も履いていなかった。留置場六号ナンバーのサンダルのままだし、服も差し入れられた安物トレーナーにジャージ。ポケットには一銭も持っていない。まだ、荷物はすべて代々木署に取られたままなのだ。
「釈放はいいけど、いったいどうすりゃいいわけ」
と宅は警察官に尋ねる。
「釈放するんだから、後は知らない」
……でも、どうやって帰ればいいの。
「裁判所で電車代は借りられると思うが」
……でも報道陣が。タクシー代貸してよ。

「そりゃ無理だ」
……弁護士はどこへ行ったのかなあ。
「どっか行っちゃったよ」
警官たちは既に終わった事件、といった態度だ。早く押収した車も持って帰れ、と言う。いったい誰が持っていったんだ！
そこへ、ようやく斎藤弁護士がやって来てくれた。宅はタバコを箱ごともらって、一気に吸い続けた。何本も何本も……。
こうして、今、日本で最も危険な男が、解き放たれた。自由の身になったのだ。
さあ、ここから、いよいよ宅八郎が、その本領を発揮してくれるだろう。お楽しみはこれからだ！

第4章
怪物誕生
——ゆきゆきて、宅八郎

暗い音のない世界で、一つの憎悪が増殖し成長していた。その暗い凶悪な意志は等身大にまで大きくなり、しだいに巨大な生き物になった……。人、われを怪物と呼ぶ。

1

国家に拘束され、ボクは「獄中」に堕ちて、いった。
あの「中」でボクが何を考えていたかわかるか！　ボクをこんな目にあわせたのは一体、誰なんだ。いきなり自宅に踏み込まれ、わけもわからないうちに駐車場の一角で身柄を拘束され、檻の中にブチ込まれ、まずい飯を食わされ、夜も寝かせてもらえず、検事からはイジメにあった2泊3日間。
Fという警察官には、自宅のドアに変な貼り紙を貼られ、手錠に腰縄で引き回され、怒鳴られ罵倒された。Kという看守係長にはトイレにも行かせてもらえず、「ここは代用監獄と呼ばれてるんだ。おまえには基本的な人権はない」とまで言われていた。外気温と同じ寒い留置場の床でメシを食わされ、タバコは1日2本、だった。
ボクは警視庁代々木警察署第一留置場では六号と呼ばれていた。ボクは名前さえも剥奪されたのだ！
そんなボクが何を考えていたか、わかるか！

人間以下の扱いを受けながら、ボクは「宅六号」としての「使命」を忘れないでいた。「使命」、それは「復讐」。釈放されるまでの間を歯を食いしばってきた。「処刑」の日を夢見て、ボクは家畜同然の扱いにも、じっと耐えていた。すでに「処刑宣告」は3年前にしているはずだ。
「見てろ。ここを出たら、きさまらに一泡ふかせてやる!」
留置場の中でもボクは、一睡もせずに復讐のことだけを考えていた。復讐だけが、ボクの生なる唯一の希望だった。殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる。ここに留置場の中で書いた未完成の原稿がある……。

寒いよ。暗いよ。せまいよ。メシがマズイよ。眠れないよ。しくしく!
こんなことになったのは一体誰のせいだ。今ごろ、小牧はボクが逮捕されたことを知って、大喜びしているに違いない。
ヤツは、ぬくぬくと暖房の効いた部屋で、のうのうと酒でも飲みながら、くつろぎ、そして談笑しているだろう……。小学館のヤツらは、週刊ポスト編集部はみんなで祝杯か!?
でも喜ぶのは早いぞ、小牧ィ。笑うのはまだ早いぞ、おまえらァ! ボクはまだ生きている。この地獄にあっても、こうしてボクは生きている。
この命あるかぎり、おまえらに災いをもたらしてやろう。死なないかぎり、どこまでも追っていく。いや、たとえこの肉体が死に絶えても、この世に化け出て呪い殺してやる……!

今も警視庁代々木署第一留置場には、「殺す！」という呪いの血文字が残されているだろう……。
そして、ボクが未完成の原稿の続きを書く時が、今こそ、やってきたのだ。
ボクは釈放された。
たった今、檻の中から解き放たれてきた。地獄の底から這い上がってきた。罪を犯し、十字架を背負ったすべての者に、処罰を与えるために。ボクを檻から出したことを後悔させてやる。ボクを止める者は誰もいないことを教えてやる。国家権力さえボクの復讐をさまたげることは出来なかった。ボクは決して屈伏しない。
あの地獄の屈辱は一生忘れない。ボクの流した血の涙は、その何千何百倍もの血で償わさせてやる。
キサマら！　にッ！　だッ!!
夜もろくろく眠れない恐怖をたっぷりと、なめさせてやる。地獄を見てきたボクには、もう何も怖いものなどない。悪霊となって、これからはムチャをしよう。処刑のためなら、喜んで俗情とでも欲情とでも結託しよう。
小牧だけじゃないぞ！
ボクは、事件を報道したメディアを念入りに一つ一つチェックしている。この間、ボクの逮捕を喜んでフザケた発言をしたヤツら、ナメきった態度をとったヤツらに告ぐ。よーく胸に手を当てて思い出してみるといい。必ず、おまえら全員を一人ずつ処刑する！
人間狩りは、これからだ!!

2

94年11月4日午後8時前。

警視庁代々木警察署前には100人以上の報道陣が集まり、大騒ぎになっていた。全民放テレビ局、共同通信のカメラなどテレビカメラ8台、そしてスチールカメラをぶら下げた新聞記者、雑誌記者などが喧騒の中心にいる。

「本当に宅八郎は現れるんだろうな……」「いったいどういうつもりなんだ……」

口々に、彼らは話している。2日前に代々木署に逮捕されたボクが、釈放されて姿を現すのを、今か今かと彼らは待っているのだ。

〈こちら、警視庁代々木署前です。11月2日、道交法違反で逮捕された宅八郎が、本日釈放され、まもなくこちらから出てくるものと思われます……〉

すでに、気の早いレポーターはマイクを片手にレポートを始め、ワイドショーのテレビカメラは回りだしている。

殺人事件の犯人でも出てくるのかな？　いや、それとも麻薬事件じゃないか？

あまりの騒ぎに、何人もの通行人が足を止めて、様子をうかがっている。不審そうに、どこか期待感を

●11月4日午後8時、代々木署前に集まる報道陣（11月7日放送「モーニングＥＹＥ」）

こめて見入っている。このマスコミの騒ぎぶりに、これが、たかだか交通違反による事件なのだとは、通行人にはとても思えなかったにちがいない。

「押すな、押すなー！」「ハイ、一般人はジャマだからどいて、どいてー」

何だ、この騒ぎは。代々木署員も驚き、苦虫をかみつぶしたような表情で、マスコミ報道陣の様子を固唾を呑んで見守っていた。

その頃、ボクは代々木署のある甲州街道の反対側にいた。タクシーに乗って、斎藤・梓澤両弁護士、加藤、藤井とともに、向かい側の様子をうかがっていたのだ。

一瞬にして状況を見ると、ボクはニヤリと笑った。フッフッフッ。

そして梓澤弁護士が「今から宅が荷物を取りに行く」と代々木署に電話を入れた。

「マスコミがスゴい、大変だ」と署員があわてながら言っている。当たり前だ、こちらから情報を流したのだから。ザマアミロ。

「警察に御迷惑をおかけしたくないので、裏から入れてください」

梓澤さんが強気で言った。かなりの役者だ。代々木署は相当渋っていたが、何とか要求を通す。

群衆の中に、ボクの友人であるビデオ監督・バクシーシ山下がいた。彼は、ＡＤ（アシスタント・ディレクター）の望月とともにビデオカメラで、群がる報道陣を逆撮影していた……。

代々木署正面玄関は甲州街道に面している。甲州街道には、テレビ局のマークが入った大きなワゴン車（ロケ車）、新聞社の社旗が立てられた黒塗りのハイヤーなど、報道関係者らの車が違法駐車し、一般車両

の交通を妨げるほどの混雑になっている。

「これだけの群れになると取り締まらないのか、マスコミには目をつぶるのか。警察なんて不公平なもんだな。目の前で違法駐車してるってのにな」バクシーシ山下はつぶやいた。

そして、ボクらを乗せたタクシーは報道陣に気づかれないように、信号機でUターンすると、素早く裏口から代々木署内に入っていく。

さあ、これからが本番だ。フッフッフッ。見てろ。

*

約3時間半前。簡易裁判所でボクが釈放されたのは、午後4時半頃だった。

「宅さん……」目の前に、斎藤弁護士がいた。微笑んでいる。

しかし、その表情の奥には、どこか困惑をともなった疲労感が感じられた。ボクが身柄拘束を解かれたのは、2泊3日ぶりのことだ。この間の弁護団、支援者の忙しさ、精神的肉体的な疲労を考えればムリもなかった。

だが、斎藤弁護士の困惑には別の理由があった。外には、ボクを待つ報道陣が殺到していたからだ。どうやって、宅八郎と自分がここから脱出したらいいのか、考えていたのだ。

「梓澤さんを探してくるから」

ボクがタバコを吸って待っている間に、斎藤さんが梓澤さんを連れて戻ってきた。

「宅さん！　とりあえず、よかったな!!」

「梓澤さん……、ありがとうございました。……それで、外はかなりスゴイんですか。……マスコミが集

まってるって、護送に当たった警察官も言ってましたけど」
「たかってるな。群がってる、かなり」
この間のお礼を言っていると、そこへ、なぜかスーツを着た藤井が現れた。しかし、彼らに「外」の状況を聞いている余裕もなかった。とにかく時間がない。聞きたいことは山ほどある。彼らが3日間のあいだ、どう動いていたか、この時点ではよく知らなかった。
とにかく、3人は言った。
「今日、夜9時から、宅さんの緊急釈放会見をやることになってるから」
「そのつもりで、全員動いている。〝釈放される宅八郎の絵〟なんて撮らせるわけにはいかない。質問があれば、記者会見で聞けばいいんだ」
「そのためにも、何とか早くココを脱出することにしよう」
3人は主張した。都合のいいことに、マスコミの大半は簡易裁判所前でなく東京区検の前に集まっている、という。今なら脱出できそうだ、と彼らは言った。藤井がスーツを着ていたのも記者会見をやる予定だったからだ。
ボクは一瞬、考えた。困惑、といってもいい。そしてもう一度、3人に聞いた。
「外には、報道陣が待ってるんですね」
「100人はいかないと思うけど。かなりの数だ」
「かなりの数？　ダメだ。そんな程度じゃ」ボクは言った。
「エッ、宅さん。どういうこと？」

「もっと集めてくれ！　それに、場所もココじゃダメだ。宅八郎の逆襲が始まるのには、もっとふさわしい場所があるはずだ！」
ボクは3人に言った。
「それから、今日は記者会見はやらない。いや、できないと言ってもいい。ボクも体力的に限界だし、外で事件がどう報道されたのか、ボクはまだ把握しきってはいない。準備が必要だ」
「でも宅さん。詳しい記者会見はまた数日後にやればいいじゃない……」
「マスコミの本質は弱いものイジメだ。ヤツらは、ボクを叩きたいだけだよ。そんな詳しくボクの言い分を聞いて、きちんと書いてくれるなんて思ったら、甘い」
「わかった。宅さんの言うようにしよう」
最年長である梓澤弁護士が言った。
逮捕された時も、徹夜明けで眠りにつくところだった。そして拘留されていた間もほとんど眠っていない。精神的にも体力的にも限界がきていた。ボクは立っているのがやっとだった。
そんなボクに対して、マスコミは襲いかかろうとしていたのだ。
聞けば、朝、身柄送検されるボクを撮影してやろうと約30人ほどの報道陣が集まっていたという。手錠腰縄の、情ない犯罪者姿を撮影するために。人権擁護の立場から、梓澤弁護士が各報道機関に「写真撮影はするな」といくら申し入れをしても、ハイエナのように集まってくるヤツはいる。
さらに報道陣は増えているのだ。釈放されたボクに対しても、やつぎばやにテレビのワイドショー・レポーターや新聞記者たちは質問を浴びせかけてくるのだろう。

「宅さん、今のお気持ちは?」と。勝手に騒いでおいて、今のお気持ちは、も何もないだろう。よし。もっと目茶苦茶な騒ぎにしてやるッ(笑い)。

勝負はボク自身が出てからだ、ということはわかりきっていた。拘留されている間のマスコミ報道も、急いで検証しなければならない。その上で、こちら側の主張はすべて説明しなければならない。記者会見がすべてを決める。

4日、今日は金曜日だ。土日はワイドショーもない。とすれば勝負は来週。今日は布石だけを打てばいい。いかに報道陣の前にボクの姿をさらさないか、を考える支援者たちの声をよそに、ボクはあえて戦略的に「釈放」の図を撮影させることを主張したのである。

「マスコミもさ、宅八郎釈放の絵は欲しがるだろうからな」ボクは笑って言った。

しかし、簡易裁判所では絵になりにくい。それで藤井らから、各マスコミに「宅八郎が夜8時、代々木署から出てきます」と連絡してもらった。そのほうが絵になる。しかも、代々木署には手荷物や差し入れられた物を取られたままになっていた。

一騒動起こしてやるッ。これが記者会見の序曲なのだ。

梓澤弁護士と藤井が、東京区検前に集まったマスコミを牽制している間に、報道陣に気づかれないよう、弁護士会館の間をすり抜け、斎藤弁護士の誘導で、ボクは脱出した。

そして午後6時すぎ。代々木署に様子を見にいっていた加藤を含めて、全員が斎藤弁護士事務所に集合した。こうして時間は稼いだ。もっとも、弁護士、支援者ともに極度の疲れが見て取れた。ボクはボクで、起きているのが精一杯だ。しかし、やるしかない。

1時間ほどの間に「祝釈放！」と筆で書いたプレートも用意した。これを持って出てやる。マスコミはどんな作為的な編集をするかわからない。こうなったら、切るに切れないメッセージを絵の中に作ってやろう(笑い)。

＊

午後8時、警視庁代々木警察署前。
テレビカメラ8台、100人以上の報道陣が集まり、まだかまだか、と大騒ぎになっている。その間にボクを乗せたタクシーは、気づかれないように裏口から署内に入った。
「運転手さん、誰かに何か聞かれても、絶対に応えないでくださいよ」
お金を渡して、タクシーは表側の甲州街道に回すことにした。逃走経路の確保だ。運転手も心得ている。そして、ボクらはタクシーを降りて、憮然とした表情で迎え入れる代々木署員を睨み付け、建物の中に歩いていく。
「代々木署始まって以来の騒ぎですよ」
初老の警官が責めるように言った。フンッ知るか、そんなもん。
「取り締まらないんですか、違法駐車だらけですけど。何ならマスコミの連中も交通違反で全員、逮捕したら？　点数あがるよ」
そう言うと、警官どもは黙ってしまう。
2階にある留置場の看守係で、押収された荷物の返還手続きを終える。自分の車は一時置いていくことにした。荷物はすべて紙袋にしまって、加藤と藤井が持った。

ボクはマジックハンドだけを持った。これさえあれば、奇跡は起きる。

そしてボクは正面玄関に向かって歩いていく。外の騒ぎの様子がドア越しに伝わってきた。出る寸前に紙袋からプレートを出す。プレートには「祝釈放！」という文字。こんなもの持って出るのを、警察が許すはずがない。

先頭に両弁護士、ボクの両脇を加藤と藤井が固めた。もうすぐだ。

「斎藤さん、梓澤さんいいですね。加藤、藤井、いいな」

よし、行くぞッ！

「祝釈放！」と書いたプレートを持って、ボクは代々木署から躍り出たッ。

一瞬、時間が停止した。目の前に、100人以上の報道陣、野次馬がいた。次に時が動きだす。

ワァッとあたりがどよめいた。ボクの姿を見た報道陣は、決して逃がすまいと、ボクを凝視し、総毛立ってパニックを起こしている。

行けーッ！　一気にボクは代々木署の階段を駆け降りていく。ものすごい数の報道陣が殺到してくる。

●代々木署正面玄関から飛び出したッ！（11月7日放送「モーニングEYE」）

●「さあ、カメラ回った!!」殺到する報道陣に叫ぶ！（11月7日放送「ルックルックこんにちは」）

記者、レポーター、テレビカメラ、マイク。人の壁が視界をふさぐ。
ボクの血が沸騰した。マジックハンドをふるって叫ぶ。
「ボクは逃げ隠れはしない！」

そう言って制すると、ボクの言葉を聞き逃すまいとするマスコミは一瞬、凍結する。しかしあまりにもスゴい数の人間が周りを囲んでいく。強烈な光のライトに、フラッシュ、ストロボが追い打ちをかけ、目をあけていられない。

閃光の嵐。目の前が真っ白くなる。今だ！　マジックハンドが宙をきった。

「さあ、カメラ回った!!」

白い光の空に向かってボクは咆哮（ほうこう）した。続けて絶叫ッ！

「ボクは当て逃げはしていませんッ。これは明らかな不当逮捕であり、別件逮捕ですッ。それについては後日、記者会見ですべて証明してみせますッ。会見の日程はお知らせします。今日はここまでッ！」

一気に叫ぶと、ボクは甲州街道に向かって歩きだした。それでも、しつこく報道陣が取り囲む。

「今日は本人が疲れてます。今日はここまで」「通れな

いよ、通れないよ、道をあけて」
加藤が叫んだ、藤井が叫んだ。引っ張る力と押す力が激しく対抗する。
「斎藤さん、車どっちッ!?」
彼らもあまりの人波にタクシーの場所さえ、わからず叫んでいる。ようやく車を見つけて、加藤が、報道陣の渦からボクを助け出してくれる。その時、現場に来ていたバクシーシ山下も手助けしてくれた。目と目で合図。後でな。
マジックハンドを振り回しながら、ボクは待たせてあったタクシーに乗り込んだ。続いて、加藤と藤井が乗り込む。報道陣はしつこくタクシーを取り囲んでいる。
「じゃあね。さよならー」
車内からオチャメに叫ぶと、ブブーッとタクシーは発進した。ブブ〜ッ。
記者会見ですべてを証明してみせます、か。フッ。どう証明すればいいのか、はテキトーに後で考えればいいんだ。修羅場ってのは、こういうもんだよ(笑い)。

＊

タクシーの中から、後ろをしばらく見ていたが、尾行車はないようだ

●マジックハンドが宙をきる！（11月7日放送「スーパーワイド」）

った。やれやれ、だ。

このまま、のこのこ家に帰れるわけがない。どうせマスコミが待っているに決まってる。まずは、藤井が手配してくれていたホテルにチェック・インする。部屋に入って荷物を降ろすと、すぐに3人で加藤のアパートに向かった。

考えなければならないことは山ほどある。記者会見をいつ、どんな形で、どうやるか。この記者会見が目下のところ最重要な問題なのだ。会見は早いほうがいい。

「7日の月曜日か、8日火曜日にしよう。それから本多さんにも生で出てもらう」

ボクの提案に、いくら何でもそれは無理じゃないか、と二人。すぐにボクは本多勝一さんに電話をかけて、何とか説得しきってみせた。ホンカツ、ワイドショー出演なんて前代未聞の出来事だ。二人の士気も上がる。あちこちに電話をかけまくり、加藤は資料文書を作成することになった。

その間に、ボクと藤井はタクシーで新宿に向かう。さっきの代々木署前の騒動をビデオ撮影していたバクシーシ山下と、新宿でおちあうことになっていた。

細心の注意を払った。ボクは今日釈放されたばかりの身だ。通行人に見つかっても面倒なことになる。まるで逃亡者、お尋ね者だ。そんなボクの目には、新宿の街の色が変わってみえた。ボクらが東口タカノ・フルーツパーラー前に着くと、山下のフランス車シトロエンＢＸ19はすでに来ていた。

「山ちゃんサァ、来週あいてる？　どうしても、支援者として記者会見に来てほしいんだ。それも、ベーカム（プロ用ビデオカメラ）が必要だ。いいか？」

「宅さん、アナタ何を考えてるんだ……」

「記者会見でボクの背後から、報道陣を逆撮影してほしい。これが本当のシュート(撮影=狙撃)だ。ヤツらに思い知らせてやるッ！　頼むぜ!!」

ＯＫしてくれた山下から、さっきの騒ぎを逆撮影したビデオを受け取って別れる。

最後に、藤井がボクをホテルまで送ってくれた。すでに深夜2時。疲労感が心身を襲う。何といっても、ボクはこの数日間、ほとんど眠っていないのだ。しかも、今日は一勝負カタをつけている。マスコミ相手に立ち回るのは、恐ろしく精神力を消耗する。

ああ、そして、さらに大きな大立ち回りが今後に待っているのだ……。

「おやすみ」

藤井が帰ると、3日ぶりのシャバのベッドに倒れこむ。そして、そのままボクは睡魔に襲われ、吸い込まれるように深い眠りにおちていった……。

3

釈放翌日、5日土曜日。午後2時頃、藤井がホテルに迎えにきてくれた。

「眠れましたか、宅さん？」食事をしながら藤井と話す……。

その日は斎藤弁護士の事務所で、また翌6日は梓澤弁護士の事務所で、全員が集合して打合せた。その結果、記者会見は7日午後7時、日本教育会館に決定した。

記者会見を細かくシミュレーションして討議を重ねる。それまで留置場にいて、外界から遮断されていたボクは、どんな報道がされていたか、わかっていない。そこから、考えていかなければならなかった。釈放されたとはいえ、ボクには休む間もない。5日も6日も、準備のために加藤の家や藤井の家を行ったりきたりしていた。

JR 水道橋
←至 飯田橋
至 お茶ノ水→
きむらや
富士銀行
三田線
神保町駅
東西線
靖国通り
半蔵門線・新宿線
九段下駅
出口6
出口A1
出口A6
岩波ホール
小学館ビル
出口A8
日本教育会館
共立講堂
学士会館
白山通り
気象庁

宅八郎記者会見のお知らせ

「当て逃げ」という容疑をかけられ、さる11月2日に逮捕された、宅八郎（おたく評論家）の釈放後初の記者会見を、本人も出席し、下記の日時・場所にて行います。　今回の事件に関する報道の多くは、警察発表や被害者とされる女性の言い分に重きが置かれており、宅八郎側の主張は充分に伝えられておりません。宅にかけられている疑惑はみな根拠のないものであることを、この場で御説明致します。また事件を生んだ背景として、宅の人間性に問題があるかのような報道も多く流されています。これは明らかな人権侵害です。このような無法ぶりをこれ以上見過ごすことはできず、弁護団よりの抗議声明も、あわせて行う予定でおります。

会見で御説明したい主な内容は、下記のとおりです。

■当て逃げではない
■明白な不当逮捕である
■逮捕された理由は、今回の件のことだけではない。

この逮捕は言論に対する弾圧であるとの認識のもと、多くの方々から支持がよせられております。この会見には宅八郎の支援者として、下記の方々に同席していただけることになっています。

御多忙のなか突然のお知らせで恐縮です。どうか万障お繰り合わせのうえ、御参席いただけますよう、お願い申し上げます。

日　◆　11月7日（月曜日）
時間　◆　午後7時より
場所　◆　日本教育会館
（地下鉄神保町駅より徒歩3分、地下鉄九段下駅より徒歩5分）
住所／千代田区一ツ橋2－6－2

《出席される支援者（順不同、敬称略）》
本多勝一（ジャーナリスト、『週刊金曜日』編集長）
大泉実成（ノンフィクション作家）
バクシーシ山下（ビデオ監督）
（テープ出演）安部譲二（作家）
（予定）小山田圭吾（ミュージシャン、『コーネリアス』）
（予定）宮台真司（都立大助教授、社会学博士）
（予定）報道被害にあった経験をもつ某有名タレント

宅八郎さんを支援し不当逮捕に抗議する会
事務局スタッフ
藤井良樹　（ルポライター）
加藤将輝　（取材者）

そして、あれは会見の前日、6日の真夜中、藤井の家でのことだった。

「なあ、藤井。記者会見会場の日本教育会館は、小学館のすぐ近くだなあ。歩いて5分あるかないかだぜ……」

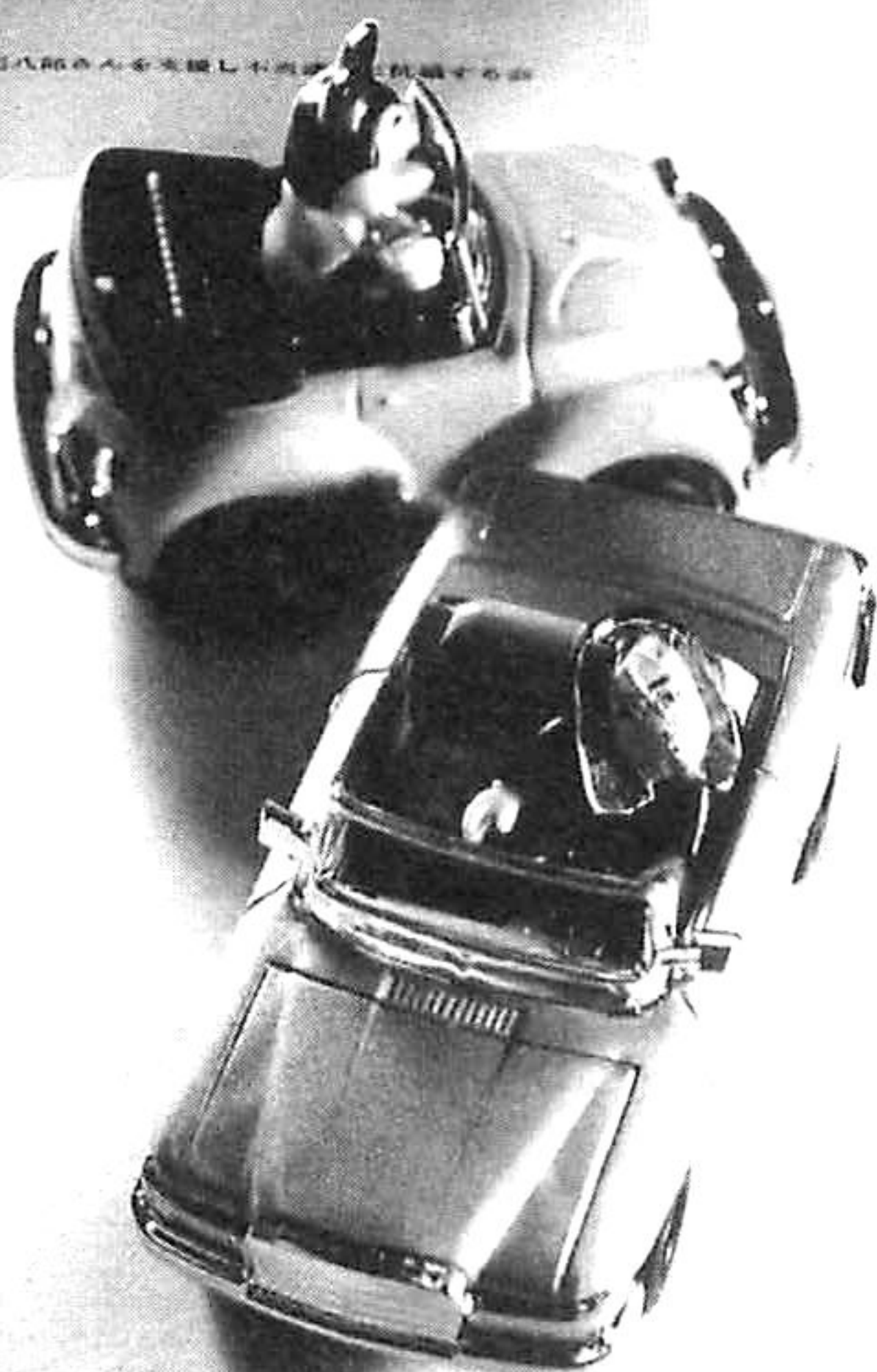
地図を見たボクは、

下●当日の朝、各マスコミに届いた、会見のお知らせ
右●記者会見会場に決定した日本教育会館は小学館のすぐ近くだった……

ニヤリと笑いながらつぶやいた。
「宅さん、あなた……」
「なあ、藤井。記者会見が終わったら、週刊ポストに押しかけてみるのも手だな……」
もっとも、深く考えていたわけではない。藤井もあいまいにうなずいていたように思う……。

＊

そして11月7日月曜日、いよいよ記者会見の日。
朝のワイドショー各局で、ボクの釈放場面が放送された。代々木署前の大騒動は、かなり強烈な映像になっている。作戦成功、しっかり「祝釈放！」のプレートも映っている。また、「今晩、宅さんの記者会見が開かれるようです」とブラウン管から予告された……。
この日は最終準備のために、ボクも支援者もほとんど眠ってはいない。
接触事故に関して説明するためのミニカー、イラストボード、プレートなどを用意して、会場は一日がかりで設営された。また、全24ページにもなった記者会見配

宅八郎
記者会見
報道配布用
資料

●事故を説明するミニカーと24ページからなる報道配布用資料

付用資料が必要部数、製本されている。会見に出席する支援者への手配連絡も抜かりはなかった。

加藤は当日出かける前に、地図で会場・日本教育会館と小学館の位置関係を確認していたという。前夜の、ボクと藤井の会話を知っていたわけでもないのに、何かを彼も予感していたのだろうか……。

ボクと斎藤さんがタクシーで会場に着いた時、すでに道路は報道関係のロケ車で埋まっていた。会館内にある中華料理屋の個室が控室だった。入っていくと、本多勝一さんがラーメンを食べている。ちょっとヘンな感じがした。そして、支援者一同が顔合わせをする。全員の士気はあがっている。いよいよ、だ。

4

11月7日、午後7時20分。ついに前代未聞の記者会見が始まった!

中央壇上には、横長のテーブルが置かれ、中央に「宅八郎」のたれ幕、右側に弁護士2名のたれ幕、左側に支援者として「本多勝一」「大泉実成」「宮台真司」のたれ幕が下がっている。テーブルの横にはビデオモニターが置かれていた。

これは、交通違反で逮捕された者の釈明会見にしては、あまりにも異様だった。

それだけではない。11台のテレビカメラが向けられた中央壇上からは、何と逆に1台のビデオカメラが

記者席に対して向けられていたのだ。カメラを突きつけているのはバクシーシ山下だった。まるで、要塞の中からバズーカ砲を肩づけした傭兵のように。

撃て、山下。撃て！　11対1の構図は、異常かつ異様な迫力を漂わせていた。

司会の加藤、弁護団、続いて支援者たちが着席し、今回の事件の概要と「宅八郎サイドの主張」を説明していく。ボクは最後に入る手順だった。最初にボクが席についたら、すぐに進行がグチャグチャになるのは目に見えていたからだ。群がる報道陣は、宮本武蔵よろしくジラせばいい。

11対1の対決はこうして始まった。しかし、すぐに記者席のレポーターが質問をしている。山下が狙撃するベータカムが、あまりにも恐ろしかったからだろう。

「そのカメラは何ですか。いったい何に使うんですか……？」と。

こちら側はこう応えている。「ビデオ素材は、宅八郎が好きなように使います」と。マスコミは取材した素材の編集権は自分にある、と主張する。ならば同じことをして

右●道交法違反の釈明会見とは思えない、ものものしさ（11月8日放送「ルックルックこんにちは」）下●壇上から、記者席にカメラを突き付けるバクシーシ山下（ビデオ作品「ゆきゆきて、宅八郎」スタッフ撮影）

何が悪い。イヤなら、記者会見から帰ればいいんだ。

ボクの絵が欲しいマスコミは肩透かしを食らって、予想外の流れに困っている。そろそろ行こうか。いや、もう少しジラしてやるか。控室にいたボクは急遽、藤井に伝令した。「10月に撮影してあったボクの声明ビデオを流してやれよ」

この、お蔵入りになるはずだった異様な映像が翌日、全国ネットの電波に乗って、日本中を駆けめぐる。「週刊ポストは犯罪週刊誌だ（カチャカチャッ）」とボクが叫んでいるシーンはものすごいインパクトだった。

さあ、もうすぐだ。本番、行くぞッ。

*

ゆっくり、ゆっくりと廊下を歩いていく。会場805号室に入る直前に、用意してあった忍者・赤影の仮面をかぶって。ゆっくりとボクは歩いていく。

赤影参上！

一瞬、報道陣のタイミングが狂った。仮面のせいだ。そして一拍遅れて、目の前に、白いストロボが無数に炸裂した。仮面を見て、みんな「あんまりだ」「いいかげんにしてくれ」と頭を抱えている（笑い）。

上●仮面の忍者・赤影参上！（本当は宅八郎）（11月8日放送「ザ・フレッシュ」）
下●おとなしく話を聞く報道陣（バクシーシ山下撮影）

ざまあみろ。着席し、仮面を脱ぐ。
「宅、八郎さんでーす!」司会者・加藤が言った。
ボクの主張は3つだった。①「当て逃げ」はしていないこと②手続き的にも不当逮捕であること、そして③これは小学館側の陰謀による別件逮捕であること、の3点である。
そして、ボクは会見で「当て逃げ犯罪者」という汚名がぬれぎぬであることを証明し、同時に、逮捕の背景には小学館側の陰謀があることを暴いていったのだ。
ボクの背後から、スナイパーのように狙い撃つ山下のカメラ・アイに報道陣はビビッていた。不用意な発言、激しい発言はしてこない。ふだんの会見なら、相手を挑発し、時には怒らせ、ハメているだろうに。今回ばかりは勝手がちがった、という感じだった。
報道陣の、ある者はもっともだという風にうなずき、ある者は難しい表情で考え込んでいる。おおむね、納得しているように見てとれた。小学館はひどすぎる、とボクが言えば、なるほどとうなずく。そんな報道陣の態度に、弁護団も支援者もうれしそうだ……。
しかし、会見の途中からボクは奇妙ないらだちに襲われていた。不安感といってもいい。最初の緊張感に比べて、この違和感は何だろう。すでに司会者や支援者、報道陣の発言、いや、自分がしゃべっていることさえ、うわの空だった。すべては、ぼんやりとした、やりとりにしか感じなかった。意味の不在?
お行儀のいい報道陣は、お説ごもっとも、とうなずいている。記者会見は終わろうとしていた。なのに、何だろう。このイヤな感じは何なのだろう。直感としか言いようがない。ボクの、そう、極限を生きる者のみが感じる直感と直観が、危険信号を発している。

……まるで市民運動のシンポジウムだ……。この「意義ある」記者会見の内容は、たぶん明日、ほとんど報道されないだろうな。このままじゃ。きっと、そうだ。

「この記者会見が終わった後で、5分しかかからないから、ボクは小学館へ〈殴り込み〉取材をします！報道のみなさんもよかったら、来ればァ」

会見の最後で、ボクはとんでもない爆弾発言をしていた。言葉が先だった。そして、自分の言葉の意味に、気づく。ボクは、この記者会見が、彼らにとってほとんど報道価値がないことに気づいたのだ。今日は貴重なお話ありがとうございました、ってわけか。そんな記者会見が、彼らにとって何の意味があろう。まるで「善対偽善」という図式だ。ボクはこれまで「悪対最悪」といった図式で、最悪の相手に対峙するためにも、自分を悪ととらえてきた。そんなボクにとって、これは危険なことのように思えた。非礼な質問、無責任な攻撃、まるで裁くかのような激しい追及、いっそ会見が紛糾すればしたで、いいんだ。

「そんなにボクは裁かれたいのか」……一瞬、自問自答するが、答えは見つからない。とにかく、ボクが小学館討ち入りを宣言した瞬間、報道陣の目の色が変わった。これでいい。すべては直感と直観だった。

そして、記者会見は終了した。

メディアの暴力性を逆用するボクの方法論は、すでに数日前に代々木署の前でも活用していたはずだ。迷うことはない。

行くぞ、小学館へ。突っ込め、週刊ポストへ。

5

「消火器と雨ガサはないけど、このマジックハンドで、ボクは行くッ！」

報道陣に宣言して、ボクは夜の道路を歩いていく。犯罪出版社・小学館へと。その距離、数百メートル。報道陣の半数、約50人は「待ってました」と勢ぞろいで、ついてくる。

これでいい。あとは行くだけだ。奇跡のマジックハンドだけがたよりだった。そうさ、いつでも、このマジックハンドでボクは奇跡を起こしてきたじゃないか。

その暗い道路は、ボクを明日に導く架け橋だった。わずか数百メートルの道路の先に、ボクは、我が闘争の確かなる行く末を見たのだ。約50人の報道陣とともにボクは行進を続けた。バクシーシ山下はカメラを肩付けして横についた。もちろん、加藤と藤井もいっしょ

●ついに、小学館に到着（11月8日放送「ルックルックこんにちは」）
●マジックハンドの行く手には、悪の小学館があった！（11月8日放送「モーニングEYE」）

だ。

確実に、死臭は色濃くなっている。

「ここです」記者の誰かが叫んだ。見上げると巨大なビルが建っていた。報道のテレビカメラは横にパンして、ビルの「ＳＨＯＧＡＫＵＫＡＮ」というプレート文字を撮影している。

ついにやって来た。小学館へ。学習出版社の仮面をかぶった、この悪の牙城へと。

行けーッ！

疾風のように、ボクは小学館ビルの正面玄関に乗り込んでいく。躍動ッ！

巨大なガラスのドアが開く。跳躍するように、ボクは歩を進めた。

いったい何事だ。ガードマンが飛び出してくる。男の動きがまるでスローモーションのように見えていた。

「宅、八郎だ！　犯罪週刊誌ポストの小牧三平はいるか、編集部員は誰かいるのかッ！」

「だ、誰も、ポ、ポスト編集部員は誰も、誰もいません」うろたえた男は応える。

ウソであることぐらい、すぐにわかる。小牧はいないとしてもだ。

これは抗議である、これは要求である、討ち入りである、報道である、取材である、破戒である、そしてボクは宅八郎である！

「誰かいるだろう。じゃあ編集部まで行かせてもらおう！」

●小学館1階で、初老のガードマンと激突！（11月8日放送「モーニングＥＹＥ」）

「そ、それは……」押し問答が続く。
当初の漠とした予定では、まさか自分が本当に強行突破するとは考えていなかった。たぶん、1階でガードマンに制止されたら、小学館正面玄関前で、シュプレヒコールでも上げて散る、つもりだった。それで解散、のはず、だった。
このまま強行突破で、突っ込んで入っていったら、完全に不法侵入になるな。ボクは思った。しかも、現行犯だ。110番通報されたら、緊急再逮捕は間違いない。
……一瞬、とまどった。しかし、思いなおす。
それでもいいじゃないか。こうなりゃ、再逮捕されてやるッ！
他に方法があるか。もう一息だ。これでボクが上に上がれば、小牧の会社員生命は「終わり」だ。やってやる！　だけど、ポスト編集部は何階のフロアにあるんだろう。
その時、後ろのほうから報道陣の声がした。
「宅さん、ポスト編集部は8階だよ。8階」「行かないの、宅さん。8階8階」
期待感に胸をはずませた無責任な声が飛び交う。しめた、この手かッ!!
わずか数日前も、代々木署は、報道陣の違法駐車は取り締まらなかったんだ。
よしッ！　ここが勝負どころだった。勝つか負けるか……。
「行くぞーッ、8階だ、8階！」ボクは叫んだ。マジックハンドが大きく弧を描いて急回転した。
ボクが声を上げて、第一歩を踏み出した瞬間に、テレビカメラ2台がバッとボクの前に回った。スチルカメラマンも目の前に飛び出す。

小学館に殴り込む宅八郎、を正面から撮影するためだった!!

勝った！　フフフッ、入った。ボクよりも先に記者が入った。イッツＯＫ！　アイアム・モンスター!!

クククククッ、ＯＫ！　ＯＫ！　ラリホーラリホー、ラリルレロッ!!

ボクはズンズンと歩いていく。約50人の報道陣は一群となっていっせいに、ボクとともにエレベーターに向かったッ。

脳裏には、何年か前に起きた「豊田商事・永野会長刺殺事件」が想い出されていた。しかし、腐っても言論機関に他の報道陣がこれだけ大量に侵入するなんて、前代未聞の出来事だ。タダではすむまい。いや、すまさない。しかし、かまうものか。

「いいのかなー、いいのかなー、入っちゃっていいのかなー」と言いながらついてくる報道陣の声が聞こえた。しかし続けて「いいの、いいの！」「行っちゃえー」という声も上がっていた。

ここで、ボクについてこなければ、彼ら取材陣の生活権は危うくなる。いい絵を取ってこい、面白い取材をしてこい、と命令されてきているからだ。

エレベーターに乗り込む。とっさに報道陣がワァーッと殺到し、たちまち満員になった。乗り切れなかった報道陣は、横のエレベーターに向った。それでも乗れない者は、とっさに階段で8階まで駆け上がった。

●エレベーターに殺到する報道陣（バクシーシ山下撮影）

ボクと同乗できた記者はうれしそうにニヤついている。誰かが、得意そうに8階のボタンを押した。エレベーターは上昇する。3階……5階……8階、そして、扉は開いた。

着いた、ついに週刊ポスト編集部のある8階に。

アアッ！　怪物の姿を見た小学館社員はどよめいている。あわてふためいて、一気に逃げ走っていく社員が多くいた。エレベーターフロアには報道陣があふれている。

ついに来てしまった。もう、不法侵入は間違いないだろう。取り返しなど、すでにつかない。フンッ。なあに、かまうものか。これだけの人間が入っているのだ。

言ってみれば、ボクは全マスコミを煽動し、当の小学館に対して「報道被害」を与える奇襲に出たのだ。ボクを犯罪に問うのなら、この報道陣も同時に裁かれねばならない。しかし、この場にいる誰もが責任は問われることはあるまい。しかも、ボクは再逮捕は覚悟しているのだ。もう怖いものなど、あるものか。フッフッフッ。

ボクの身体は青白い炎に包まれていた。灼熱の炎ではない。極北の冷たく凍った炎だった。今ここに立っているのは、高性能の殺人機械なのだ。そしてボクを止める者は、もう誰もいない。

「こっち、こっち、宅さん、こっち」ポスト編集部を知る誰かが先導していた。

完全に怪物化したボクは、ドアの中に入ると右奥に歩いていく。そして、ついにポスト編集部に到着した。何だガードマンは。ウソツキめ。やっぱりウソじゃないか。この出版社はウソが多い。

何人かの犯罪週刊誌編集部員が、あわてて人垣を作った。

＊

目をそむけるな！

こっちは逮捕までされてるんだ。こっちは命がけなんだ。おまえらとは、覚悟の総量が違うんだ。

言論機関にもあるまじき、小学館側の悪辣な行為が、結果的に今回の逮捕を生んだんだ。

ボンボンのボンクラ3代目社長の相賀昌宏は何考えてんだ。ボクがものを教えてやる。何があっても、

ボクはスジをとおす！

目の前に、デカい態度の男が出てきた。こっちが名のっているのに、名のろうともしない。後で知ったところによれば、副編集長の海老原高明だった。

「小牧三平はいるか！」

「いません」（チッ、何だやっぱりいないのか。運のいいヤツだ）

「じゃあ、岡成憲道編集長はいるか、五十嵐光俊発行人はいるか。編集部で、何らかのことを責任をもって答えられる人間はいないのかッ」

「今は、おりません」慇懃無礼に応える海老原。

「かつて、ボクは不当な取材を受け、捏造記事を書かれた。しかし、抗議をしても反論の場も全く用意しなかった。一方的に記事を書いて、事実無根があったと抗議した場合に、反論のスペースさえ用意しないのが、週刊ポストでは当たり前のやり方なのか！」

「……私は今すぐに責任をもってお答えできる立場では、ない、ので。我々に対して質問があれば、回答するような形が、できるかどうかを、聞きます」海老原は言った。

「聞きます、だって？　上にか」

「そうです」
「じゃあ、誰が、いつ、ボクに答えてくれるんだッ。回答できるかどうかだ、だと。そんなの書き逃げじゃないか」
「今そういう形で宅さんからそういう申し込みがあれば承りますが、じゃあ、いつ話すかどうかということについては、責任者に言って、回答させるかどうかを聞きます。それでいいですか」
海老原はもういいか、用はすんだか、とっとと早く帰れ、という態度だ。
「何だ。逃げるのか。ずいぶん、お役所的な答え方じゃないか！」
「だって普通そうでしょう」海老原はシラを切った。
「普通だって？　ポストがボクにした取材は普通だったたっていうのか。アポもない。夜中に突然やって来た。勝手に写真撮って、勝手に載せた。一方的に書いた。それに関して抗議があるのに、一切、反論のスペースも用意しない。どこが普通なんだ！」
しかし、海老原はまだ、お建前を言った。
「ですから、それについては、私がポストを代表して答えられない。アナタは個人で責任をもって行動されてるんでしょうが、こちらは週刊ポストの編集部としてやっていますから、組織を代表した人間が宅さんに対して答えないと」
責任者ではないので回答できないが、承ってはおく。回答をするかどうか、またそれがいつになるかも答えられない、と海老原は言う。
まさに、お役所的答弁じゃないか。それとも、おまえは政治家か。

ボク個人には、責任を持って行動してるんだろう、と無礼にも言うが、海老原や週刊ポスト編集部は、責任をもって行動していないのか。そんなことで記事を作られたら、たまったものじゃない。この男の言っていることは、会社組織の制度内に責任を逃げ隠れさせているだけにすぎない。だから、小学館の社員は無責任なんだ。

ふと、上を見る。編集部の天井から、ポスト最新号の広告が吊られている。ボクは、週刊ポスト編集部を包囲する約50人の報道陣に言った。

「ここにポストの電車中吊り広告があります（不倫暴露記事の見出しを指す）。不倫をゴシップ、スキャンダルとして覗き見趣味のもとに報じているわけです。しかし、ポストのデスク小牧三平自身が外国人女性と……」

すると、海老原は、ごまかすように言った。

「い、いいかげんなことを言うな！　この記事がどれだけ公共性があるか知ってるのか！」

「公共性だって。何だ、アナタは責任者じゃないんだろう」ボクは切り返す。

「責任者じゃなくても私はポストの編集者だ。記事の作り方とか報道のあり方については、一般的な知識があるから言ってるんだ。あんたはただの、単なるタレントだろうが！」

「ボクはタレントじゃないいっ」

「じゃあ何だ、言ってみろっ」

「ボクは、おたく評論家です！」ボクは正確に4年間使用している肩書を名乗った。

「何だ、そりゃ！」嘲笑する海老原。

「失礼じゃないか!!　何だ、そりゃっ、てのは何だよ」
おたく評論家でも何でもいい！　チンピラは黙ってろ。取材をするなら、勝手にうちの会社に強引に入って来て何だっ。

海老原はボクを罵倒した。勝手だ強引だ、というなら、ポストも同じだ。海老原の言動には、取材は我々マスコミにだけ許されるものだという、傲岸不遜な思い上がりしかない。「単なるタレント」だったら何も言っちゃいけないのか。

責任者じゃない、と言うクセに、取材や報道のあり方については一般的な知識があると、海老原は大見得をきる。だったらボクが、「書き逃げするのが週刊

上●怪物は叫んだ「小牧三平はいるか！」と（11月8日放送「モーニングEYE」）下●お役所的にふんぞりかえる、ポスト海老原副編集長（バクシーシ山下撮影）

ポストのやり方か」と言った時に、「ポストは絶対にそんなことをしない」となぜ反論をしないんだ。できないからだろう。

おまえら、何が学習出版社だ、何がピッカピカの一年生だッ!

*

やり取りしていると、弁護士の斎藤さん梓澤さん二人が飛んできた。

マズイ、という顔をしている。急いでボクを連れ戻しに来たのだ。確かに今、ボクがしているのは不法侵入になるのだろう。玄関先に行っただけで、住居不法侵入だと騒いでる小牧事件の場合とは違う。

弁護士という職業は、すでに起きてしまった「悪」は弁護できても、目の前の「悪」は困るのだ、ということは理解できた。両弁護士には悪かったが、しょうがない、これも自分の選択だ。

ところが、海老原は悪辣な小学館社員らしく、弁護士の青い顔を見て、大会社をカサにきて居丈高に、梓澤弁護士にまで「不法侵入だ」などと、なじりだしたのだ。責任者でもないクセに。そして、さらに、とんでもないことを演説しだした。

「個人の取材なら何をやっても許されるが、企業の取材は配慮されなければならない。我々も、踏み込む

（叩く）企業は選んで、取材している。無断でわが社に入り込むとはどういうことだ！」と。
「単なるタレント」発言といい「組織が個人を取材することは自由だが、個人は組織に文句を言うな」というのが海老原、つまりは小学館の考えのようだ。こんな男が、週刊誌の副編集長として雑誌を作り、しかも、取材や報道のあり方について見識があると広言しているのだ。スゴまれる梓澤さんを前に、ボクは悔しくてたまらなかった。
しかし、弁護士の深刻な表情と「全員、階下に降りるように」という強硬な説得には、ボクも従うしかなかった。確かにボクの行動は、弁護士に対する裏切り行為だったのかもしれない。
そしてボクは、この日は小学館を後にしたのである……。

＊

すまなかった、斎藤さん梓澤さん……。しかし、ボクには他に方法はなかった……。
その日の真夜中に、ボクは別れた二人に「自分の行動を先生方は関知しておられなかったことを確認しておきます」という文面のＦＡＸを入れている……。
ボクは魔法使いならぬ、メディア使いさ。ボクの行動原理はこうだ。
いわゆる報道被害がメディアの暴力なのだとしたら、それに対する反撃はメディアの暴力性を最大限に逆用した戦略に基づかなければならない。攻撃は最大の防御である（この過激な考え方は、誤解を覚悟した上で今までボクが通してきたやり方だ）。
この方法論が、この日もボクを突き動かしていたのだ。
ところが、その後、驚くべき「噂」が流れてきた。じつはボクが乗り込んだ時に、ポスト編集長・岡成憲

道は社内にいた、というのだ。ボクの姿を見て、逃げだしたというのだ。そのせいで、編集部内でも「岡成は何を考えてるんだ」と非難されている、という。真偽は確認していない……。

今も想い出す。このボクに向って、海老原が「自分は小学館に入社できたのだ」と豪語したことを。

海老原よ、小牧よ、そして小学館の全社員よ。確かにおまえらは日本を代表する出版社・小学館に〝入れた〟男だ。

しかし、ボクの名は宅八郎。その日本を代表する出版社にタテついている男だ！　ボクは個人で、たった一人でもやってやる。

小牧が渡った「三途の川」を、いつ、おまえらが渡ったとしても不思議はない。いつ相賀昌宏社長が、小牧と同じ運命を辿ったとしても不思議はないのだ。

いくら会社がデカかろうが、この世には、どこまでもスジをとおす人間が一人いるのだ、ということを知っておけ。

この世の果てに、いずれ、さらなる陰惨な地獄絵図を見るのは、おまえらだ！

地獄に住み、瘴気を食らい、極限を生きている人間の恐ろしさを見せてやる。ボクは何度でも蘇ってくるだろう。きさまらに処罰を与えるために。

人、われを怪物と呼ぶ!!

（了）

●そして、今も小学館から回答はない……

第4章 怪物誕生――ゆきゆきて、宅八郎

第5章 報道犯罪

❶日本の週刊誌が死んだ日！

11/8スポーツ紙トップ5

（TBS調べ）（※数値はTBSが独自に算出したポイント数）

1	宅八郎「週刊ポスト」乱入	73.8
2	長谷直美ヘアの花道	61.2
3	木梨憲武プロゴルファー目指す	30.1
4	たけし顔面麻痺日記出版	27.1
5	小田茜、16歳バースディ	25.7

この週のテレビ報道トップ5

（ＴＢＳブロードキャスター調べ）

1	横浜港・母子殺人事件	6時間39分40秒
2	皇太子さま雅子さま、アラブへ	3時間52分18秒
3	宅八郎、釈放→週刊ポスト襲撃	1時間14分56秒
4	天皇皇后両陛下、京都へ	1時間12分20秒
5	三田寛子流産 橋之助悲しみ	1時間06分28秒

日本の全週刊誌は94年11月7日に死んだ！　日本の腰抜け週刊誌どもは、すべてこの日に終わったのだ!!

11月2日、ボクは別件不当逮捕され、4日に釈放された。記者会見を開いたのは11月7日のこと。そして会見終了後に、抗議の意味も込めてボクは小学館の週刊ポスト編集部へ「殴り込み」直撃取材したのである。

ボクの「襲撃取材」は、集まった約50人の報道陣にさらに「取材」された。そして反撃会見の模様と「週刊ポスト討ち入り事件」は、翌8日の全スポーツ紙で報じられ、朝からの全ワイドショーで放送された。

新聞メディアでは、報知、サンスポ、夕刊フジ、デイリースポーツ、東京スポーツ、トーチュウ、スポニチ、日刊スポーツ……と、ほぼ全紙での扱い。放送メディアでは民放ネット・キー4局。これらの取り上げ方がいか

にスゴかったかは二つの表を見ればわかるだろう。
しかし、なぜか週刊誌ではまったくこの事件は報道されなかったのである。
当の週刊ポストはもちろんのこと、週刊朝日でも週刊文春でも週刊現代でも一切触れられていない。週刊宝石、週刊新潮、サンデー毎日、週刊プレイボーイ、アサヒ芸能、週刊大衆、週刊実話……また、フライデー、フォーカス、フラッシュといった写真週刊誌でも、微笑、女性自身、女性セブン、週刊女性など女性週刊誌でも、どこにも書かれていない。
これだけある、どの雑誌を見ても「小学館ポスト事件」は一切、たったの1文字も取り上げられていないのである。『SPA!』以外では。全テレビ局、全スポーツ紙で大きく取り上げられた事件が週刊誌では、完全黙殺されたのだ(また、その後、月刊誌を含めても)。
こんな例はこの国において、初めてのことである。この件がたんに「ボクの自意識過剰」でないことは、こうしてデータを見れば一目瞭然だろう。
「取り上げるに値しないから、掲載しなかった」という言い訳も予想されるが、そんな「まったく取り上げるに値しない事件」は放送・新聞だって取り上げやしないよ(笑い)。他メディアで大きく扱われたから公的な事実になったともいえる。それを後追い取材して、より深く追及していくのが週刊誌の唱えるお題目なんだろ。
逆なら、わかるのだ。テレビで報じられないことを週刊誌が掲載するのなら。テレビのほうが幅はせまいはずだから。たとえば天皇、部落差別、創価学会、佐川一政、ジャニーズ事務所など……。テレビでは困難なことも週刊誌は何でもやるもんだ、と思われてきた。
しかし今回の報道を見れば、これはもう、暗黙の規制が働いたと解釈するよりない。何らかの自主規制があったとしか思えない。そう、週刊誌が扱えない最後にして唯一のタブー、それはボク。宅八郎だ!
ボクが道交法で逮捕されたら、ここぞとばかりに群がってきて「当て逃げ」と騒ぎ立て、いざボクが反撃反論して「宅八郎VS小学館」という図式が見えだした瞬間に、素知らぬ顔をしたマスコミも多かった。
小学館の形勢不利を見て、同業者ポストと自分らと

の「差異」を発見できなかった各週刊誌の腰がサーッと引けてしまったのだ。
まさに腰抜けとはこのことだ(嘲笑)。
何とか言えんのか、週刊誌さんよ。全週刊誌編集長に告ぐ。あんたら、キンタマあるのか!
この腰抜けどもめ! タブーを破ったのは『SPA!』だけじゃないか!!(『週刊SPA!』94年12月7日号では「宅八郎はなぜ不当逮捕されたか!?」という6ページ大特集が掲載された)
週刊誌だけじゃない。今回の事件を報道したメディアの中にも、小学館を「某出版社」、週刊ポストを「某週刊誌」と実名を記さなかった新聞もあった(日刊スポーツなど)。
対立する一方の当事者が、同業者だからだ。犯罪報道では、容疑者段階で犯人扱いし、被害者の実名やプライバシーさえ暴き出すマスコミが、こうしてマスコミ同業者には配慮するのである。
弱い者いじめとどこが違うんだ。同業者には手心を加えるのがマスコミの正体か。個人は攻撃しても組織は攻撃しないのがおまえらのやり方か。おまえら、よくも言論だのジャーナリズムだのと言ってられるなあ。
これは、週刊ポスト副編集長・海老原高明の「われわれは個人はともかく、企業の取材には配慮している」というトンデモナイ発言と一致する。
バカ言ってんじゃないよ。逆だろ。個人こそが尊重されなくって、何だ。その「配慮」をされずに、ひどい取材を受けたのがボクなんだ。
ボクの記者会見と同じ11月7日は、筒井康隆とてんかん協会の和解記者会見も行われている。このことは確かに、活字メディアでも報道されている。つまり、マスコミは自らの立場・責任を問われない場合には、「言論問題」を、さも重要に取り上げるのだ。
そして、ボクがマスコミ内ではタブーとして「黙殺無視」される情況を客観的に見れば、これはまさに「いじめ」じゃないか、と思える。ボクが逮捕された時の報道もそうだった。他人がよってたかってイジメられているのに、それを黙殺無視しようとする周辺に、さらに陰湿な「いじめの構造」が見える。コアになる「被害者と加害

者」がいて、便乗する人間がいて、その回りに見て見ぬフリをしようとする疑似加害者がいる。これこそ、いじめの多層構造である。何層かの構造を含めて全部が、いじめになっているのだ。

誰からともなく、一人の人間がいじめられた（報道された）時には寄ってたかっていじめに走って（見て見ぬフリも含む）、過剰になっていく。そして、いじめが問題化した時（自殺でも復讐でもいいが）には、多重構造に隠れて、結局誰も責任を取らない（生徒も学校側も）。

マスコミは「われわれは、読者・視聴者が喜んでいるものを提供しているだけだ」などと自己正当化＆責任転嫁するが、読者・視聴者は「たまたま、テレビで見たり、本に載っているから見てみただけで、別に望んだわけじゃないよ」と言うだろう。言ってみれば、転嫁した責任はどこにも引き受け手がいないことになろう。読者・視聴者に報道責任を押しつけるなよな。

追及すべき責任の所在がきわめて不明なところも含めて、マスコミの体質そのものが、「いじめ体質」なのだ。

（『ＳＰＡ！』95年1月18日号「週刊宅八郎」（仮題）に加筆訂正）

●『週刊ＳＰＡ！』94年12月28日号
12月7日号の特集に続いて、宅の新連載が開始されたこの号は何と、手錠・腰縄をかけられた、宅八郎の連行写真が表紙になっている

②報道データ・ファイル

8:37

おはようナイスデイ
フジテレビ/1994年11月3日

VTR

松本結花レポーター──宅さんは、いつ頃からこちらのマンションに?

大家──2年前。

松本結花──2年前から。どうですか、特に当て逃げということは、気づいてらっしゃいましたか?

大家──私、あとで聞いたんですけれどね。お家賃を4カ月入れてないんですよ。それでね、催促すれば入れる人なんですけれどね、ルーズでしょう、あの人は。だけど4カ月も溜められるとうちもたまらないから、不動産屋さんに泣きついたりなんかして、いろいろやって、27日の日にやっと入れてもらったんですけどね。

大家──あの人のところに小包が来ても、取りに来ないいんですよ。1週間も2週間も。それでドアのところへ、荷物預かってますって。ポスト見ないんだから、あの人は。(略)

大家──警察官は、大家さんは、彼がいる時に鍵を開けて入っていって、家賃を催促してもいいですよっておっしゃったの。それで私が入って行ったら、私のこと訴える

って言うから、逆だって言ったの。

松本結花―**宅容疑者が？**

大家―うん。私があんたを訴えてやりたい。家賃を4カ月も溜めといて、そこらへんへ迷惑かけっぱなしで、何を言うかって言ったの。この年になって、世の中にはいろいろな人間がいるなと思ってね。（略）

STUDIO

松本結花―一言言ったら、出るわ、出るわ。本当に、こんなことまでお話ししてくださっていいんだろうかということまで話してくださいましたけれども、（略）家の中に行っても、部屋の中は洗濯物が散乱していて、どこに寝るのかしらっておっしゃっていたんですね。

生島ヒロシ―**足の踏み場もないほど？**

松本結花―そうですね。水道料金の督促状とかも郵便ポストの中に、こんなにごっそり入っていたんですよ、ですとか。本当に芸能人の方って、こんなにルーズなんですかって、私に聞かれまして。

生島ヒロシ―宅さん一人を見て、全部決めてもらっても、ちょっと困ってしまいますけれども。

松本結花―ええ。でもそういうのもあったのかも知れないですけれども。（略）

生島ヒロシ―しかし何となく、（宅の）口調とか聞いていると、おとなしそうな感じなんですけれども。でも心理学者の富田先生ですけれども。富田先生、そういうおたくで、こういう行動に出るというのは、どういうふうに分析するんですか。

富田隆―うーん、僕もあの人、何回か番組にご一緒したことがあるんですけれども、普通ですよね、番組なんかで話しているぶんには。その辺が、こういうことになっちゃうというのは、どこかで思い込みを溜め込みやすいというか。深く考えれば考える方向がなんかちょっと違うかなという方向に行っちゃうんじゃないかなと。

生島ヒロシ―**被害妄想とか？**

富田隆―（苦笑）……そこまでは、言いませんけれどもね。だけども、そういう思い込みになりやすいようなところがあるから、本当は周りにそういうのをちょっとたしなめてくれる人がいるといいのになと思いますね。

生島ヒロシ—でも本当ですね。物事をどんどん悪く悪くとって。
富田隆—そうそう。それで相手との関係もどんどん悪くなっていく。保険にもちゃんと入って、ちゃんとやらなければ。
松本結花—本当ですよね。修理には出さなかったらしいですよ。
生島ヒロシ—あっららー。けっこう、**見栄張る**ところもあるんですかね。
松本結花—運転技術がもう少し達者だったら良かったのかもしれないですけれどもね。
生島ヒロシ—けっこう、下手そうだものね。と言うことでございました。

POINT

事件を宅の人間性と結びつけようとする問題点のすり替え(大家のコメント)、レポーター・司会者の恥知らずな誘導、無責任に加担するコメンテーター発言など、犯罪的ワイドショーの悪質な報道テクニックのすべてがここにある。

モーニングEYE
TBSテレビ/1994年11月3日

8:34
当て逃げの被害者は…

VTR

被害者—俺と話をしたければ、時間を買えとか言うので。
山形美房レポーター—だって、自分がぶつけて、**そんな言い草というのは**。
被害者—そうなんです。(略)
山形美房—これまでに事故にあう前に、彼の奇行と言いますか、彼が反対側のマンションに住んでいたわけですけれども、(略)**ずいぶん怖い目をされましたよね**。

被害者―本当に一生分の怖さを味わったような気がします。悔しさと怖さのすべて。だからちゃんと生活していても、そういう災難というのは、どこから来るか分からないって。本当に何時間前では、明日、市原のほうに行くのに楽しみにしていたら、そうしたらそういうことが起きていたので、次の日の市原行くのを中止して、それで夜中ずっと待って、そういうことだったので。本当に人生ってわからないなと思います。

山形美房―**でもよくあきらめないで**、ここまで頑張られましたね。

被害者―そうですね。体力があったからじゃないですか。そうだと思います。

POINT

前日の深夜に行われた弁護団の記者会見に、TBSは取材にも来ていない。つまり、被害者とされる女性の言い分だけを大きく扱ったわけだ。しかも、女性に相槌をうって、明らかに加担しながら紹介するレポーターは、視聴者に大きな予断を与えてしまっている。それにしても、市原っていったい何だ？（笑い）

ルックルックこんにちは
日本テレビ／1994年11月3日

STUDIO

岸部四郎―私は日本テレビの地下の駐車場で、この間、コツンと当てただけでも、その方がわからないから、30何分そこで待って、責任を感じて、その方がいらっしゃるまで、私がやりましたと。そうするのが**正直な人間**でしょう。

三笑亭夢丸レポーター――私もそう思います。

米森麻美アナウンサー――それが**本当の誠意**というもので

すよね。
三笑亭夢丸―どうも、不思議な事件ですよね。
米森麻美―私も宅さんと一緒に番組をやっていたんですけれども、その頃からしょっちゅう車をぶつけるって言っていたんですよ。でも交通事故だけは、本当に気をつけてくださいねって話していたことがあったんですけれどもね。
三笑亭夢丸―恐ろしいですね。
米森麻美―運転はあまり上手じゃないって言っていましたよ、本人が。
岸部四郎―**運転しないほうがいい**かもしれない。
三笑亭夢丸―逃げたって済む問題じゃないのにね。

POINT

本当の誠意というものをわかっていない報道例（笑い）。宅の運転が下手だと予断に満ちて決めつけている。一緒に番組をやっていた人間に対する誠意は？

やじうま6
テレビ朝日/1994年11月3日

STUDIO

福岡翼―交通事故、当て逃げをして、その被害者のほうに弁償金も払わなかったということで、そちらのほうから訴えられたわけです。
さてそのことが本当の筋なのか、あるいは宅さんが今までいろいろ、ある週刊誌の記者のほうに抗議を続けている。そのことのほうが、本当の問題ではないのか、いろいろ取り沙汰されておりますが、支援者のほうは、不当逮捕というふうに怒っているようでございます。さて、どういう展開になりますか。気になるところです。

POINT

この時点では、まだハッキリしていないことを並列に情報として紹介している。視聴者に予断を与えないよう配慮された報道ともいえる。当たり前か（笑い）。

スーパーモーニング
テレビ朝日／1994年11月3日

STUDIO

伊藤聡子アナウンサー——はい。今日のコメンテーターは吉永みち子さんにお越しいただいていますが。おはようございます。（略）どうですか。これは。

吉永みち子——まあ、普通、この程度のことで逮捕というようなことはあり得ないんだと思うんですけれども。やはり最初のちょっとした、きちんとうまく話し合ってうまくやれば良かったのに、それがもうどんどん感情的にもうまく行かなくなって、これはけっこう警察も感情的になってしまいますよね。こんなに何回も何回も呼び出しても。でもそういう人は悪質だと思われるわけで。でも宅八郎だと、普通の感じがしちゃうんですね。他の人だったら、こんなことをと思うけれども。**やりそうだな**という感じがして。

POINT

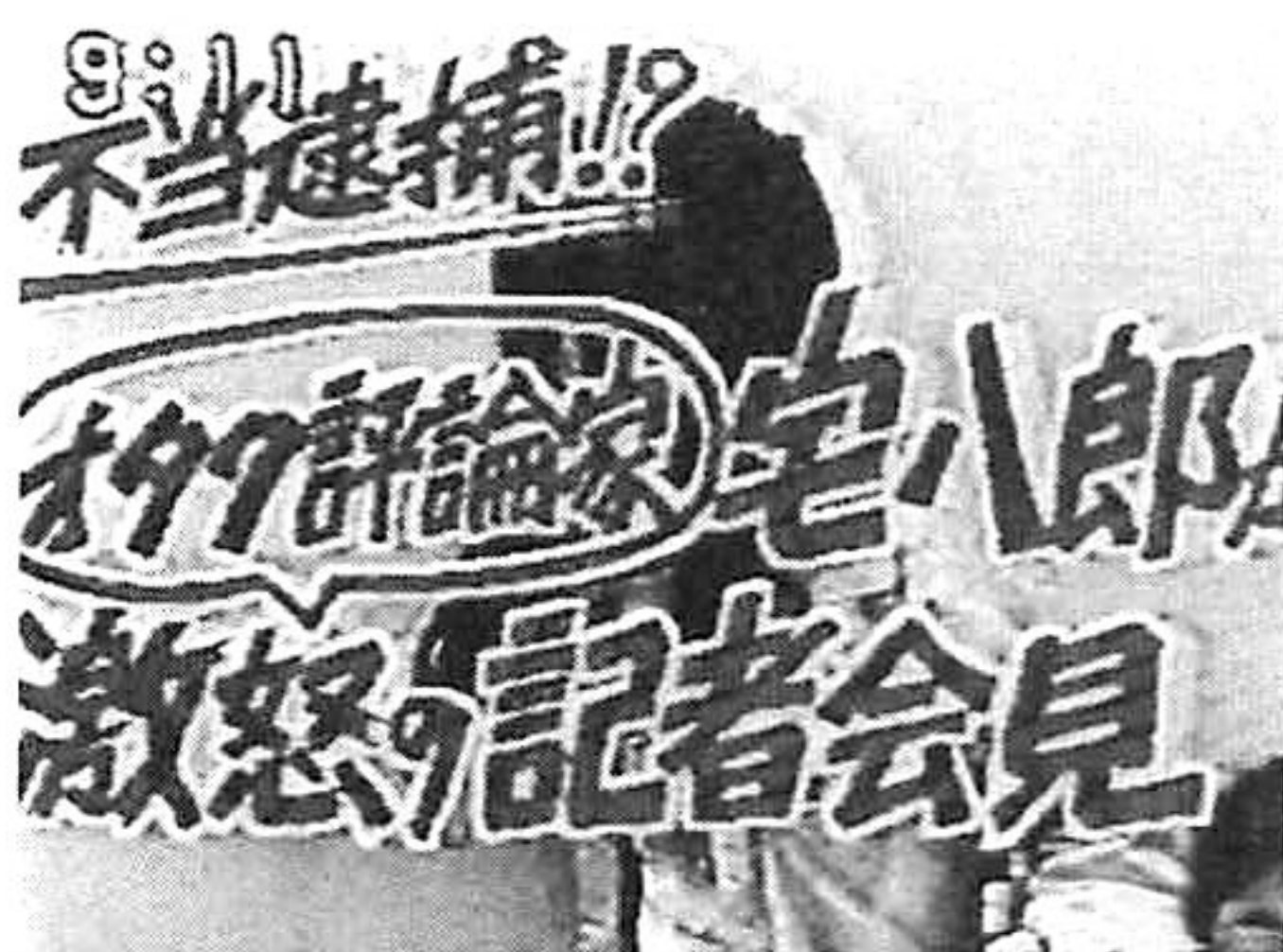
宅バッシングに拍車をかけたコメンテーター発言例。ここには、宅の人間性は奇怪だから逮捕されてもかまわない、という論理しかない。これが大宅賞作家？

スーパーモーニング
テレビ朝日/1994年11月7日

STUDIO

伊藤聡子アナウンサー——一貫して不当逮捕ということを、この人はおっしゃっていますけれども。

牧義行—恐らく、この当て逃げのことで逮捕されたんだけれども、実際の調べは別の、たとえば住居侵入か何かで、要するに調べをするんだろうと。そのための別件逮捕だと言っているんですけれども、恐らくは警察は、そんなことはしないでしょうから。

それでこの当て逃げ、当て逃げと言っていますけれども、要するにこれは事故不申告と言って、**立派な犯罪**で、一番重いのは懲役3カ月ということになりますので。これはもう任意出頭に応じない、何回も応じないということであれば、これはもうそれ自体で逮捕されてもやむを得ないということでしょうね。

POINT

「疑わしきは罰せよ?」弁護士とは思えない発言で警察の肩を持ち、宅をおとしめる発言。こうして、宅はとてもひどい人間だ、と演出されていく。

ルックルックこんにちは
日本テレビ/1994年11月8日

STUDIO

岸部四郎―だいたい、我々も取材しているんですけれども、宅八郎さんというのは、一体何なんだろうなという気がするんですけれども。

城下尊之レポーター――おたく評論家で、いろいろ取材されたということで。

岸部四郎―おたく評論家というのは、何の評論をするんですか。

城下尊之―まあ、**おたく関係のことを**。ちょっと待ってください、これをちょっと見ていただけますか。代々木警察署で事故があって、そのことで逮捕されたということですけれども、宅さんの主張としましては、小平署の問題が端を発しているのではないかということで。

岸部四郎―本人は車のことではないと思っていたと。

城下尊之―ええ。本人はこの影響があって、逮捕ということになっちゃったんだというふうに主張しているわけです。ですからその辺を明らかにしていきたいということですけれども。でもそれ以上にポストとのトラブルは、これからも続けて行くと。(略)

岸部四郎―どういう展開になるんでしょうかね。

城下尊之―合法的にどうやるんでしょうか。

POINT

宅の記者会見＋小学館討ち入りの後、紋切り型報道ができずに困惑しているワイドショーの姿勢が現れている。まあ、おたく関係のことを、ちょっと(笑い)。

モーニングEYE
TBSテレビ/1994年11月8日

STUDIO

山形美房レポーター――宅さんはあくまでも、週刊ポストに

抗議するということで、何ですか、僕の気持ちに時効はないと。
いつまでも、向こうが真摯な対応をするまで、その態度を続けると。
渡部真理アナウンサー――ポスト側としては、じゃあどうすれば、宅さんは気が済むというか。
山形美房――そうですね。10分ぐらいのやりとりがあったんですが、言い分が事実だったら対応すると、ポストも言いました。そこで今後の対応と、それから昨夜の宅さんの行動についても、あらためて検討をしようということでした。
渡部真理――それで当て逃げじゃないんですけれども、その当てられた奥さんの事故のほうというのは、大丈夫なんですか。
山形美房――あれは9万3000円はまだ弁償は済んでいないんですが、それは早いうちに弁償する意思があると、会見ではっきりおっしゃっていました。
渡部真理――でも宅さんが、殴り込みって似合わない感じがするんですよね。

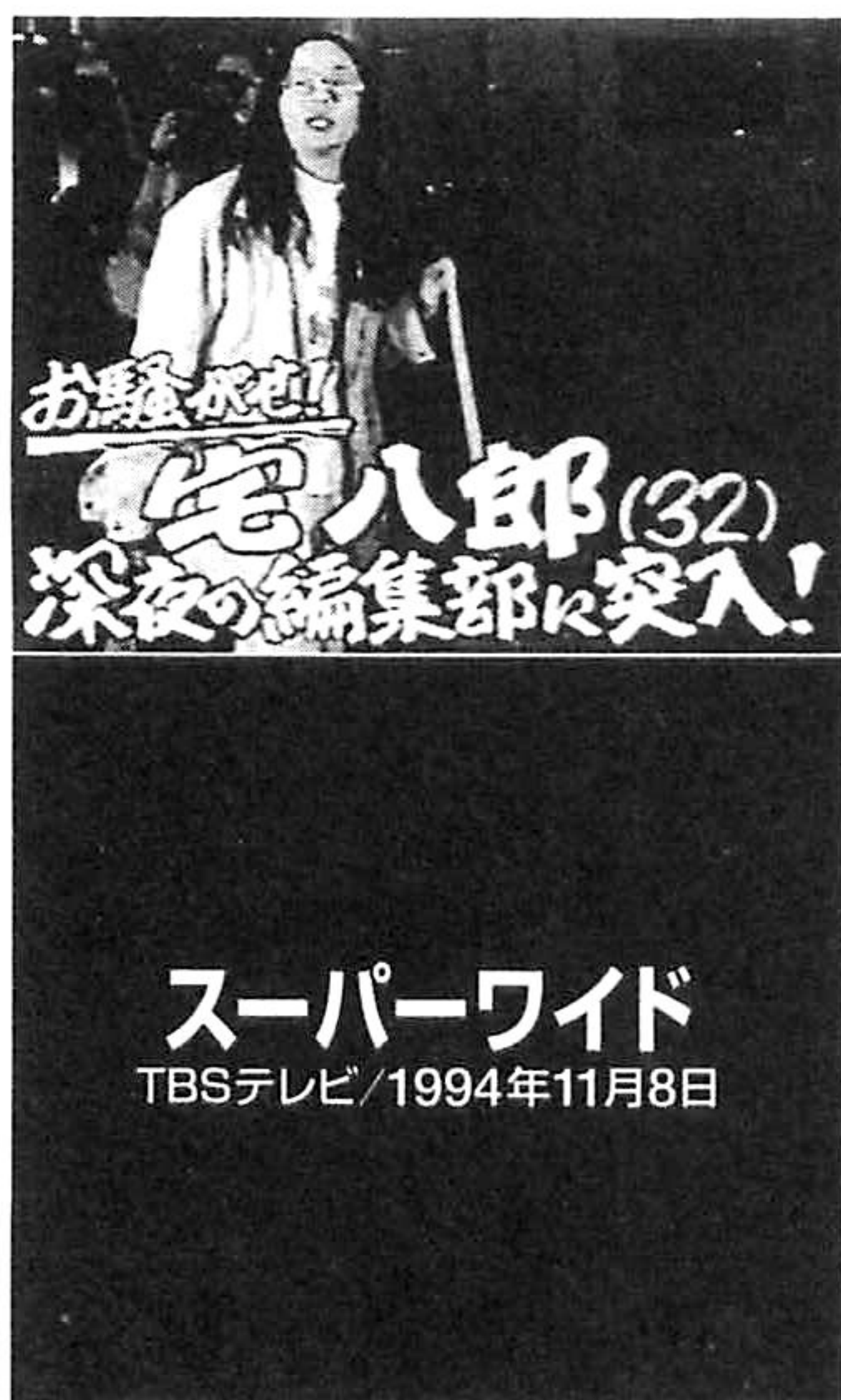
山本文郎――表現はそうでしょうね。今回は、一方的に宅さんのほうの行動を取材して、ご紹介したわけですけれども、両者の言い分、はっきりと比べる必要があるんじゃないでしょうか。

POINT

初期報道から一転して、両者の言い分を報道していく必要がある、とは確かに正論。しかし、同番組の一方的だった初期報道(11月3日)も反省してほしい。

お騒がせ!宅八郎(32)深夜の編集部に突入!

スーパーワイド
TBSテレビ/1994年11月8日

STUDIO

亀和田武――ただ、これは決して宅さんのほうの味方をするわけではないんですけれども、やはり宅さんの側の言い分に対しての、週刊ポストの対応というのは、ちょっといかにもお役所仕事的な、そんな感じがちょっと僕もしたんですけれどもね。
宮崎総子――宅さんは、なんか行ってホッとしたような表情も感じられましたね。
亀和田武――うん。胸のつかえがとれたという感じがありましたね。
宮崎総子――昨日の宅さんは、大変ハイテンションでしたけれどもね。
（ＣＭへ）
亀和田武――さっき、僕も、週刊ポストの編集部側の対応に対して、ちょっとお役所的なんじゃないかななんていうふうに言ってみたんですけれども。これはやっぱり、直接の担当者が不在だと、正確な答えができないのも、これはちょっとしょうがないかなという感じがしますからね。ただ、だから、宅さんの側だけではなくて、週刊ポストの側の、直接の担当者の言い分というのも、聞いてみたい気もします。

POINT

司会者・亀和田発言は正論。しかし、前言訂正に関しては、まるでＣＭの間に小学館からクレームでも入ったのか、という疑問を強く感じるタイミングだった。また、リッパな言論機関である、小学館側の言い分は１７２ページに記されている。

おはようナイスデイ

フジテレビ／1994年11月8日

STUDIO

生島ヒロシ―おはようナイスデイ、すかっと爽やかにお送りしたいところでございますが、なんと、またまた宅八郎さん。
大林典子アナウンサー―お騒がせ。
生島ヒロシ―ええ。当て逃げ逮捕を不当逮捕と言って、**なんかわめいて。**
大林典子―そうそう。釈放はされたんですけれどもね。
生島ヒロシ―昨日、またなんか出版社のほうに。
大林典子―はい。深夜に駆け込んだということで。どうなっているんでしょうか。
生島ヒロシ―ちょっと興味があるかどうかわかりませんけれども、ご覧いただきたいと思います。どうぞ。
（略、ＶＴＲへ）
生島ヒロシ―宅八郎さん流に言えば、目には目をというゲリラ活動なんですけれども、僕は大変気になっているんですが、**当て逃げ**をされた女性がいて、その方にもきちんとした対応をしていないと。
大林典子―お詫びを入れるとか。
生島ヒロシ―その辺のほうが、かえって気になってしまうんですけれどもね。さて、今朝のゲストコメンテーターは、内海好江師匠です。
大林典子―はい、おはようございます。
内海好江―おはようございます。（略）
生島ヒロシ―師匠。しょっぱなは宅八郎さんでしたけれども。
内海好江―知らない、私、この人。
生島ヒロシ―女性から見ると、どうですかね。
内海好江―なんか、よくわかりませんけれどもね。どう

いうことをなすっている方か知りませんけれども。
生島ヒロシ―おたく評論家。
内海好江―**なんですか。おたく評論家って。**
生島ヒロシ―いろんな物に関して、徹底的につきつめていくと。
大林典子―すごくこだわるタイプの。
内海好江―だから、こだわってこういうことやっているわけ？　だけど、自分が悪いところは悪いって詫びて、そしてきちんとするところはしなくちゃいけないんじゃないですか。今の。
生島ヒロシ―**共感を呼ばない**んじゃないかと。
内海好江―呼ばないですね。あまり見たくはないわね。

POINT

極めて悪質な生島ヒロシの発言。小学館事件から目をそらさせ、別件の交通事故に視聴者を誘導しようとしている。また、フジテレビの取材班も出席した記者会見で、すでに、当て逃げでないことは証明された。その際、会見の冒頭で「納得いかなければ、この場で質問してくれれば、全部説明する。それでも『当て逃げ』という言葉を使うのなら、極めて挑戦的であるとみなし、訴訟を含めた手続きを取る用意がある」と弁護団が言っている。しかしそれでも、あくまで「当て逃げ」の言葉を使う生島には何らかの考えがあるに違いない。近いうちに直接、お話をうかがいに行くことになるだろう。

8:13
不法逮捕主張
宅八郎 深夜の大パフォーマンス

スーパーモーニング
テレビ朝日/1994年11月8日

VTR

荒木茂彦レポーター――宅さん、たくさんのマスコミを引き連れて、結果的に……。

宅八郎―いや、引き連れたわけじゃないですよ、みなさんがついて入られて来ただけです。
荒木茂彦―今日の会見の続きで、こういうふうにされると、何か一つの**パフォーマンス**のような気がするんですけれども、その点はどうですか。会見の続きでね。
宅八郎―パフォーマンスと言えば、僕は人生そのもの、朝起きてから夜寝るまで、すべてがパフォーマンスだと考えておりますので、それに対しては、どこからどこまでがパフォーマンスか、ちょっとわかりません。
荒木茂彦―懸念するのは、会見自体が、要するにパフォーマンスの引き続きのような気がするんですけれども。

STUDIO

川野太郎―うーん。なんか思わぬ方向へ発展していって。（略）
眞木準―なかなか怪しいキャラクターというのは面白いんですけれどもね。宅さん、もうこの話は「**たくさん**」だという（笑い）。朝の話題としても。なんだか不思議な話に発展しちゃいますけれどもね。（略）

荒木茂彦―今回、僕が思ったんですけれども、要するに記者会見中も、2台のテレビカメラが、ビデオが、報道陣のほうに向かって回っているわけなんです。
伊藤聡子アナウンサー―ありましたね。あれは私は何だろうと思っていたんですけれども。
荒木茂彦―要するに、我々を、誰が何を言うかということを、資料映像にしようということなんですが。あまり普段そういう記者会見で、向こう側から撮られるということがなかったので、ちょっとした**恐怖感**と言うんですか、彼が持っている「業界恐怖新聞」というのがあるんですが、その中のまたネタにされるんじゃないかということで、発言を控えた記者の方もいたようです。
伊藤聡子―プレッシャーを与えたということなんでしょうか。宅さんの場合が、このねちこい性格というのが、ウリになっているとは思うんですけれども。眞木さん、いかがですか。
眞木準―いや、ご本人も、最後のお話、荒木さんのインタビューで言っていましたけれども、ドラゴンクエストみたいな、ロールプレイングゲームと言うんですかね。

あれを自分で演じているような感覚をお持ちなんじゃないですかね。マジックハンドを持って攻撃しに行くとか。ある種、パフォーマンスという感じですね。

POINT

パフォーマンスという言葉をネガティブにとらえて、非難する姿勢が見え見え。「朝の話題としても、もうたくさんだ」いいかげんにしてくれ、というが、朝の話題にしているのは誰なんだ。しかし、レポーター荒木は「報じる側・報じられる側」という問題を考えた時に、かなり本質的なことを言っている。毎日、人に恐怖感を与えているのはアナタたちだ。

❹

違う両者の言い分

宅容疑者 警察は宅を殴ってもいいと彼女に言った

▶宅が弁護団に衝撃の告白

弁護団は徹底抗戦の構え崩さず

被害者女性が本紙に胸中を再激白!! 宅容疑者を殴ったなんてウソ

示談成立報道も否定、交渉は中断したま…

❶

当て逃げ 宅八郎逮捕

恐怖の告白

被害者女性 ひかれそうになった!!

私に向かって車を!!

私をボンネットに乗せたまま100mも爆走も

10万円の修理費払わず

被害者が同行して来た男に宅は殴られた

弁護団は不当逮捕を主張

❷

当て逃げ容疑で 宅八郎逮捕

〝おたくタレント〟として知られる宅八郎容疑者（32）が2日、道交法違反（当て逃げ）の疑いで警視庁代々木署に逮捕された。調べによると今年7月、自宅前の駐車場で自分の車を他人の乗用車にぶつけながら、警察に届け出ず逃げた疑い。宅容疑者は最近、仕事上のトラブルなどで週刊誌の編集者の自宅に〝抗議〟を続けたことでも話題になっており、周囲の関係者からは「警視庁から身辺をマークされていた」との声も出ていた。

警視庁〝身辺マーク〟覚悟していた

宅八郎容疑者

最近では編集者への抗議で話題に

❸

宅八郎容疑者逮捕 当て逃げ

〝おたくタレント〟で有名な宅八郎■容疑者（三二）が二日、道交法違反（当て逃げ）の疑いで警視庁代々木署に逮捕された。

調べによると、宅容疑者は七月二十二日夜、東京都渋谷区■の自宅前の駐車場で、自分の車をバックで出そうとして、道路反対側に止めてあった近くに住む会社員の女性（四七）の乗用車と接触、左側ドアなどを壊したが、警察などに連絡しなかった疑い。

女性は、宅容疑者の車が事故を起こしたとの目撃者の話などから、翌日、宅容疑者を訪問。宅容疑者は事実を認めて修理を約束したが、結局約束を果たさなかったため、女性が同署に届けた。

同署では約三か月にわたって、再三、宅容疑者に出頭を求めたが、「任意捜査には応じない」などと拒否したため逮捕した。

❺

本多勝一さんらが書く

〝おたく評論家〟の宅八郎容疑者（32）が道路交通法違反（あて逃げ）の疑いで逮捕された事件をめぐり、宅容疑者を支援するジャーナリストらが4日こ…

宅容疑者は4日、警視庁代々木署から身柄を東京地検に送検されるが、支援者らは「逮捕も拘留も異常。（別の事件を取り調べるための）別件逮捕…

…のトラブルをめぐり小平署に呼ばれ朝から晩まで事情を聴かれ…

…々木署員で、容疑も全く別の事件だった。宅容疑…

明

⑦

宅八郎容疑者逮捕

おたく的!?当て逃げ

なんと月刊誌に自ら予告コラム

宅八郎容疑者

"おたくタレント"として知られる宅八郎■■容疑者(32)が2日、道路交通法違反(当て逃げ)の疑いで警視庁代々木署に逮捕された。

調べでは、宅容疑者は7月22日午後7時ごろ、自宅のあるマンション前の駐車場から自分の車を出そうとバックしたところ、止めてあった近所の会社員大田恭子さん(46)の乗用車に衝突。左前部の車体やドアを壊したが、警察に届け出ず逃げた疑い。

目撃者の話から、宅容疑者が当て逃げしたことが分か

❶東京スポーツ94年11月3日発売
❷報知新聞94年11月3日
❸読売新聞94年11月3日
❹東京スポーツ94年11月4日発売
❺報知新聞94年11月4日
❻デイリースポーツ94年11月3日
❼内外タイムス94年11月3日発売
❽日刊スポーツ94年11月3日

⑥

宅八郎逮

"おたく"前の「駐車場」で当て逃げ

修理代9万3…

知らん…

被害…

今度こそ観念!?当て逃げの疑いで逮捕された宅八郎

報知

『不当逮捕だ』

宅容疑者

支援者きょう抗議

宅八郎容疑者

…夫馬徹さん(29)が明らかにしたもので、声明文はジャーナリストの本多勝一さん、評論家の中森明夫さんらがすでに書いており、作家の安部譲二さんも準備中という。

…雑誌編集者と…

…捕に来たのは代…

…ところが逮…

…だったが、修理工場に一緒に行くと約束した当日、被害者の女性が男性を伴って現れ、男性がボクを殴ったので交渉がこじれた」と話しているという。代々木署は「小平の(編集者宅の)事件と、今回の逮捕は全く関係がない」と相手にしない様子。あて逃げ事件を届け出ず、出頭にも応じなかったことを逮捕理由としている。なお、宅容疑者の弁護士は3日、「不当逮捕」に抗議する準抗告の手続きを、東京地裁で行った。

⑧

日刊スポーツ　平成6年(199…

宅八郎

当て逃げ逮捕

被害の女性現場で「仕返し怖い」

宅八郎容疑者

❸

宅八郎「週刊ポスト」突入

怒りの会見後"許可なく写真撮

当て逃げ→逮捕→釈放…今度は

宅八郎 深夜の報復口撃

週刊ポストへ

平成6年（1994年）11月8日 火曜日

「不法侵入」で訴え検討 小学館側

記事内容めぐり

「不法侵入だ」と週刊ポストの編集者（左）に抗議される宅八郎（中央）と宅の弁護士（右）＝東京・一ツ橋の小学館前

❶

小学館「週刊ポスト」乱入

編集部で15分押し問答

記者会見後、支持者らと共に

「逮捕の背景には取材巡るトラブル」

会見後、"殴り込み"に行く宅八郎さん（東京・一ツ橋の小学館前で）

❹

---

❺

東京

（19）B版

平成6年（1994年）11月6日（日曜日）

宅 警察へ抗議訪問

罰金払い釈放

東京地検は4日、女性会社員（46）の乗用車に当て逃げしたとして道交法違反の罪でタレントの宅八郎（32）を略式起訴。東京簡裁は罰金1万5000円の略式命令を下した。同日夜、釈放されて代々木署から出てきた宅は報道陣に「僕は当て逃げはしていません。明らかに別件不当逮捕です」と訴えた。宅は取り調べで『週刊ポスト』編集者宅について聞かれたと語っており、今後の"逆襲"の成り行きが注目される。

祝釈放

警察で週刊ポスト編集者宅の"襲撃"について聞かれた

❷

---

❶サンケイスポーツ94年11月8日
❷東京スポーツ94年11月5日発売
❸スポーツニッポン94年11月8日
❹報知新聞94年11月8日
❺毎日新聞94年11月5日
❻東京スポーツ94年11月8日発売
❼デイリースポーツ94年11月8日
❽日刊スポーツ94年11月8日
❾日刊スポーツ94年11月5日

③報道加害者・小学館の対応

［取材・文］加藤将輝

11月7日、宅八郎は小学館に討ち入りを敢行、あらためて『週刊ポスト』における報道の問題を突きつけている。それにもかかわらず現在まで、小学館は何の回答もせず、全くとりあおうともしない。『週刊ポスト』、小学館はこの間、いったいどのような対応をしたのか？　その対応とも呼べない対応を細かく検証し、学習出版社という仮面に隠された暗黒の部分を明らかにしたい。

＊

まず、宅八郎が不当取材をされた92年も週刊ポスト編集長だった、岡成憲道氏に電話。

――宅八郎が編集部に殴り込みをした件についてお話を聞かせてください。

「ああ、それはもうノーコメントだから」

――テレビでも、小学館は犯罪出版社だ、という宅の言葉が流されてますけど。

「もうほんとに全部ノーコメント」

――あの時対応された海老原さんが、自分は責任者ではないから、と言われてますけど、編集部としての見解はどうなんですか？

「それもノーコメントですから」

――宅八郎の無断侵入には何か対応されますか？

「みんなノーコメントです」

――宅八郎が海老原さんに、ポストの取材方針に関する質問を託してゆきましたが、それにも答えず、逃げるつもりなんですか？

「逃げはしないよ。回答する用意はある」

――ではその御回答はどのようなものになりますか？

「それはノーコメント」

——編集長さんといえば、雑誌の最高責任者でいらっしゃいますよね。

「そうですよ」

——その最高責任者のお方でもお答えいただけないんですか。

「もうポストだけの問題じゃないから」

——それは小学館、社の問題になっていると考えてよろしいんですか？

「そうそう」

——すると会社のほうと協議して、宅八郎に回答するということですね？

「はいはい。もうほんとにこれ以上はノーコメントなんで」

あくまでも逃げ腰、知らぬ存ぜぬの岡成氏に呆れ果て、次は海老原氏に直接聞いてみる。

——承っていただいた宅八郎の質問はどうされましたか？

「上に話はしましたよ」

——その結果、回答はどうなりましたか？

「だから俺は責任者じゃないから。雑誌を代表できる立場じゃないんだもの」

——宅が、ポストはこんなひどい取材をやっているのかと言ったとき、なぜ反論されなかったんですか？

「自分が担当した記事ならね、責任も持てるけどさ。小牧のやり方はよくわからないからね。セクションがぜんぜん違うし」

海老原氏は、正論ではあるのかもしれないがあまりにも誠意のない返事をしてくれた。こうなれば小学館という会社としての見解を伺うしかない。番号案内を調べ、総務部に。

——社としての見解をお聞きしたいんですが、こちらでよろしいですか？

「編集部に聞いてください」

——いや、もう岡成編集長さんとはお話ししまして、ことは社の問題になっていると言われましたので。

「そういうのならね、編集総務というのがあるから、そこで聞いてください。ここは建物とかの管理をする部署だから」

――それなら、先日の宅八郎の無断侵入を問題にされるお考えはありますか？
「その予定はないです。考えてません」
編集総務か。また、実のない話をされるのも嫌だ。社を代表しているのは社長だろう。社長室のようなものはないのだろうか。代表番号にかけてみると、受付らしい女性が出る。
――宅八郎問題について、社としての見解をお聞きしたいんですが、社長室のようなものはありますか？
「少々お待ちください」
「もしもしこちら総務ですが」
さっき話した人が出る。なんてことだ、これじゃたらい回しじゃないか。
――いや、社長室のようなものがあったらと思いまして。
「だから、編集総務に聞いてください」
まったく、こうなりゃもう編集総務に聞くしかない。
――宅八郎問題についての社としての見解はこちらで聞いてくれ、と言われたんですが。
「べつにありません。お答えしません」

――いや、何か社としてもお考えはないんですか。テレビでも犯罪出版社とか言われてるんですから。
「本当にないです。だからお答えできません」
――宅八郎は報道陣の前で、御社に問題を突きつけたわけですが、それに対しての御回答は？
「だからそんなものはないです」
――ない、とおっしゃるのは、回答しない、ということですか？
「そうです」
――回答を宅八郎側が要求し続けても、永久に回答しないかもしれないということですか？
「そうです」
――編集部に聞いたら社の問題だと言う。社の意見を伺いたくてこちらに聞けば回答してくださらない。いったいどこに聞けばよろしいんでしょうか？
「知りません」
――どなたか社を代表してお答えしていただける方はいらっしゃらないんでしょうか？
「いません」

――御社といえば、社員数が一〇〇〇名にも及ぼうという日本有数の大出版社じゃないですか、その中でただの一人もお答えしていただける人がいないんですか？
「そういうことです」
――では、永久に答えないかもしれない、誰も答えられないと言われた、と書きますよ。
「けっこうです」
――すみません、お名前をお聞かせくださいますか。
「名のりません」
――こちらは媒体も明らかにし、名前も名のってるじゃないですか。
「そんな記事は承認しませんから、名のりません」
――じゃあ、名前も名のれない人がこう言った、と書きますよ。
「けっこうです。勝手にしてください」

＊

あまりにも不誠実で無責任極まりない小学館の対応。

いくら取材をかけてもらちがあかない。これでは宅八郎に「書き逃げ」と言われても文句は言えないだろう。
取材によって利益をあげている企業が、こんな形で他からの取材を拒否してよいのだろうか。他人の弱みは暴いても、自分に都合の悪いことは答えない。これが日本で最も部数の多い週刊誌とその版元の実態である。
小学館よ。一刻も早く、宅八郎の質問に答えるべきじゃないのか。そうでなければいつまでたっても事態は進展しない。警察の力を借りず、自分の言葉で答えろ。仮にも出版社、言論機関じゃないか。税金で運営されている警察は、もっと重大な事件の時に動けばよいのだ。
まあしかし、岡成編集長は、「逃げない。回答する」と一応は答えているのだから、いずれ正式に宅八郎が御返事を伺いにゆくことになるだろう。それでもだめならもう、相賀昌宏社長のところへ、直接行くしかないのかもしれないけれど。

④報道被害者対談——なべやかんVS宅八郎

なべおさみ、なべやかん親子の場合

宅―君が元々、この道に入ったのは91年の明治大学裏口入学・替え玉受験事件以降だもんね。「やかん」っていう芸名をもらったのが、そもそも。

なべ―アレがあったからですから。事件後、1カ月半ですね（※夜間=明大二部の意）。

宅―『北野ファンクラブ』が始まった頃だろう。番組の目玉が君だったんだから。

なべ―91年の6月です。ゴールデンウイークぐらいが事件のピークでしたから。

宅―あの不正入試事件の時って大騒ぎで、君の実家の前なんか、押しかけた報道陣がたかっちゃって、すごかったもんね。

宅―君とは91年の『お笑いウルトラクイズ』ロケの時に初めて会って、もう3年半のつきあいだよね。会う前に、師匠のビートたけしさんを介して手紙を渡していたんだっけ。

なべ―『イカす！　おたく天国』（小社刊）を出版する直前に、たけしさんにお会いになったでしょ。「おいッ、宅さんから預かって来たぞっ」て、殿（たけし）から手紙を受け取ったんです。その後ロケで会って、その後には宅さんの出版記念パーティに呼ばれたんですよ。

宅―パーティは91年10月18日です。その後、92年のお正月に当時住んでいた小峯マンションで、カレーやトムヤムクン（タイ風スープ）を作って、君が部屋まで来て食べてったんだ。その直後の3月、ポスト事件が起きて。今こんなことになっちゃった……（笑い）。

なべ―その報道陣が帰った後がすごいんです。ゴミだらけ。タバコの吸い殻、空き缶……。
宅―それでお母さんとかノイローゼでしょう？
なべ―チャイムがピンポン、ピンポンですよね。出るまでピンポン。「チャイム鳴らしても隠れて出てこない」って、ワイドショーは責めるように言うじゃないですか。でも「2時間押し続けたけど出てこない」って、そこまで言ってくれればね。それは取材してる方もひどいよって、突っ込むスキを与えるんだったら、まだ、いいんですけど。
宅―そりゃボクか（笑い）。お姉さんなんか会社にも行けなかったでしょう。
なべ―そうです。家を出入りするところを狙われるから、結局行けないというか。ずっと張り込んでるわけです。
宅―家なんか、困っちゃうよね。近所なんかは。大丈夫なの、君の所は。
なべ―だから母親はご飯とかスーパーに買い物行くのも大変でしたよね。今日は当時の記事を持って来たんです（『週刊女性』などを取り出す）。

息子は怪獣作りと車いじりに夢中なおたく〝少年〟
長男、明大〝替え玉〟事件渦中
衝撃
Sくん・20

●『週刊女性』91年5月28日号
表紙にも「明大替え玉受験 なべおさみ長男Sくん20歳の驚くべき素顔」と大きく刷り込まれる

宅―「息子は怪獣作りと車いじりに夢中な〝おたく少年〟」。ははは。明らかなおたく差別（笑い）。「お母さんに似ればハンサムなんだろうけれど……なべさんに似ちゃったようだ」「なべ家では長女が20歳になるまで家族が一緒に入浴していた」だって。それから別の記事では「近所の人によれば息子は小太りの少年」だって、君が？

なべ——昔から体型変わってませんよ（笑い）。「おたく少年」とか書くじゃないですか。結局、そういうイメージを作っちゃうんですよね。

宅——本当にいい加減な物語を作っちゃうから。「おたく」だから非常識な人間だとか。

なべ——親が溺愛して子供はおたくの世界に閉じこもっていたんだ、とか。

宅——そうそう。それで「バカ息子がおたくになってしまった。その恥ずべき家庭の悲惨な結果が不正入試として、今問われている」みたいな報道になってしまうわけだし、「おたくで、怪獣と車に夢中になっていたために、大学も入れなかった」と言われてしまう。

なべ——入れなかったんですけどね（笑い）。

宅——解決がつかなくって、事件の報道も長かったものね、君の時は。

なべ——だから、あの時うちら親子は、早く勝新太郎さん、ハワイから帰って来てくれって。それを願っていたんですよ。勝新さんが帰って来れば、マスコミはそっちへ行くでしょうから（笑い）。

宅——でも、事件の時は君もお母さんも姉さんも一般人だよね。マスコミは家族でも平気で追い回して報道するでしょ。松坂慶子や林葉直子の親父、石田ひかり姉妹の親父。梅宮アンナの場合は父親も芸能人で梅宮辰夫だけど。大林雅美なんか単に上原謙の奥さんだっただけでしょう。君も、なべおさみ長男ということで、いくらで

も報じられたわけだ。
なべ―それに、罪に対して、罪以外のことを書くじゃないですか。
宅―便乗報道ね。
なべ―たとえば三浦和義だったらスワッピングとか。何にも関係ないじゃないですか。
宅―ボクだって、たとえば部屋が汚いっていうのと交通違反って何の関係があるの。
なべ―部屋が汚い(笑い)。
宅―汚いのは事実なんですけどね。
――前、伺った時も宅さんの部屋すごかったですよね(笑い)。
宅―日本は世間体の世の中だから、報道(被害)によって、手の平返したような世間の反応ってありますよね。
なべ―それはもうスゴイですよ。
宅―だけど結局、君の事件って立件できなかったわけでしょ。告訴取り下げでしょ?
なべ―はい。明治大学が有印私文書偽造ということで僕も告訴されたんですけど、結局、明大職員も絡んでいるしで、「事件」にならなかったわけです。
――でも、あの事件が不起訴になったって誰も知らないんですね。報じられてないですよね、ちゃんとは。結局不起訴だったと、私も今初めて知りました。
宅―でも、その時起きた報道被害って、マスコミの人は救ってくれないものね。
なべ―だから今だに、あの明大事件がまだついていますからね。
宅―まあ芸人として

はそれをネタにするようなやり方はあるんだろうけれどさ。
なべ――それは自虐芸ですよ。ちょうど事件の時、蓮舫がワイドショーやってて。僕や親父がこの事件をネタにするじゃないですか。ところが「刑事事件で世間を騒がせたのに自分で笑いにするのは、けしからん」と蓮舫は怒っていたわけです。だけど蓮舫って殿の前に行くと「たけしさんの笑いが好き」とか言っている。殿の笑いって自虐芸ですよ。それを認めてこっちは認めないのは、結局、「好き嫌い」を言っているだけじゃないですか。
宅――で、たけしさんは刑事事件になってるけど、結果的に君はなっていないし。
なべ――結局、「好き嫌い」なんですよね。
宅――フライデー事件の時でも、たけしも軍団も、留置場に泊まってないですよね。講談社襲撃が明け方だか未明。それで、その日のうちに即時釈放されてる。何か不公平を感じますよ。だってボクは交通違反でしょう。
なべ――こっち（たけし側）は暴力沙汰ですからね（笑い）。刑事事件の。
宅――おかしいよ。たけしとか好感度もある人の場合だったら、いいのかと。そういうパワーバランスって考えちゃう。ボクは初日で取り調べが全部終わってるのに2泊させられて身柄送検ですよ、交通違反で。普通、身柄まで持っていかないじゃないですか。
なべ――同じ交通事故でも、殿のバイク転倒事件は結局起訴されてないですしね。
宅――でも飲酒運転でしょ。間違いなく道交法違反でしょうね。厳密に法を当てはめたら、違法じゃない人は誰もいなくなってしまいますよ。法の基準もわかんないし。あの事故が、もしボクだったら「酔っぱらい宅、自業自得」とかスゴイ報道になってただろうなあ。

のぞき報道、日本的な報道の病

なべ――法律と同じく、マスコミで一番よくわからないのも基準なんです。たとえば、この間、スポーツ新聞とか見ると、たとえば栗尾さんが藤島部屋にいたという写真を、望遠で撮ってるじゃないですか。ああいうのって覗

きではないんでしょうか。
宅―覗きですよね。要するに本人の許可を取っていないから、明らかにそれは盗み撮りだし、覗きなんだけど、微妙なところが、それは「報道の自由」という……。
なべ―当時、ウチもやられたんです。ウチの向かいの家に勝手に入って、2階のベランダから写真を撮っていて。気づいたら向こうから狙っていたんですよ。
宅―そんなのは、明白に不法侵入しているわけだし、プライバシー侵害なんだけど。現場に来ている人というのは、指示されて、いい絵を撮って来いとしか言われていないし、そのためには相当デタラメなことをやると思うんだ。ポストもそうだった。
なべ―フリーだから会社は知らない、で逃げる手口。
宅―それは通らないよ、仕事してるんだから。
なべ―前に、政治家の金丸信が家の中でマージャンやってる写真を撮られたじゃないですか。あれも、あんな時にマージャンやっているのはひどいじゃないかと言うけど、覗き撮りするほうも、いいのかなという……。
宅―たぶん政治家の場合、明白に公益性のある仕事で、しかも国民に投票されているということで免罪はされるんでしょうけど、それにしても報道の自由の名のもとに盗み撮りをするということの罪悪は、本当に問われてないんですよね。
なべ―前も写真誌か何かで、高校野球部の選手が女風呂を覗いているっていう写真が載っていて、あれは女風呂も撮ってるわけじゃないですか。完全にピーピングですよね。
宅―『フライデー』創刊の時のテレビCMって覚えてないですか(笑い)。「見いちゃった、見いちゃった」ってナレーションで、マンションの一室みたいなのをファインダーが覗いてる映像で。あのCMって、相当やばい。今考えれば、覗きのCMだったから。
――(笑い)今、あんなCMを流す勇気はないんじゃないですかね。
宅―もちろん人権100%尊重で考えていくと、あらゆる報道が一切できなくなっちゃうし、報道とプライバシーとかを含めた人権というのは、ギリギリの所で押したり引いたりしてると思う。だからやる側というのは、自

分の罪を明らかにした上で、覚悟を持って自分が逆にやられてもかまいませんと、勝負をかけて来るのなら、ボクは認めてもいいけど、現実はあまりにも本当に卑怯なんだものね。

なべ―事件後に親父が朝日新聞の人に会ったんですって。そうしたら「なべさん、ここだけの話、今だから言える話なんだけど。なんであんなに叩いたかと言うと、記者たちが行った時に、なべさんの家があまりに大きくて、何でこいつがこんな大きな家に住んでるんだって、記者が皆、頭に来たんだ」と言うわけ。結局、人間的に情けないセコい嫉妬心で、誰を攻撃するか、取り上げるか、やっているから、バカみたいで。

宅―貧乏な家だろうが豪邸だろうが変わらないはずなんだけど、そこに逆差別があるんだろうし、心理学者・岸田秀さんが10年前に言った『嫉妬の時代』を感じるんですよ。明らかに嫉妬とか、そういう思惑で動いているというのは、写真誌なんかのキャプション見てもそう思うし。ボクは「日本的な報道の病」を感じる。

有名税ではあきらめられない

宅―君なんかはもう親子2代「芸能」じゃない。そこで「有名税」という言葉をどういうふうに考えてんの。ある程度しょうがないと思う?

なべ―マスコミとは持ちつ持たれつだし、やられるの

はある意味しょうがない。しかし、たとえば芸能人が家を建てた、ここが誰々さんの家ですってやる。でも住所まで写ってるんですよね。これは有名税だからやっていいというワクを超えてる気がするんです。

宅―住所は困るとかありますよね。有名人にも公開できるプライバシーと見られたくないプライバシーはあるよ。たとえば、ストリッパーが劇場で裸になってるからっていって、いつでもどこでも裸を見られていい、わけがない（笑い）。だから有名税っていう言葉は、だいたいマスコミ側が言い訳する時に使うものね。ただタレント側にも、何かあったらマスコミにゴマするという過度過剰な甘えはやめたほうがいいと思う。有名税なんて言葉で泣き寝入りするのはよくないよ。「みそぎ」ってあるじゃない。世間をお騒がせしましたって、謝って逃げようというのは、やめたほうがいいと思うよ。

なべ―それから、有名税という言葉を置き換えると、職業差別という気もするんですよ。デーモン小暮さんが子供を認知するとかってあったじゃないですか。

宅―悪魔の三角関係ね。

なべ―「我が輩は」って会見やったじゃないですか。その後、スタジオで芸能レポーターとかが「私生活のことを聞いているのに何で悪魔のフリしてるんだ」と怒ってるんですよ。でもデーモンはあのキャラクターで芸能界で生きているわけです。彼があれを押し通して、それが芸能じゃないですか。素顔の普通の人だったら記者会見す

る必要はないわけじゃないですか。芸能レポーターが、そういう根本を崩すようなことを言う。

宅―たぶんデーモンさんが素顔で出て来たら誰だかわからなくって（笑い）、さほどの報道価値はないわけですよね。逆に言うと、あのメイクで来て「我が輩」と言ってくれることによって、ワイドショーは成立したわけで、お礼を言わなきゃいけないんだけどね。

なべ―それを何を勘違いしたのか、説教しているヤツがいますからね。

宅―現実には、有名税として見せても仕方がないと思うプライバシーの範囲があって、これは明らかに困るという範囲もあるんだけれども、全部踏み込んで来るものね。

なべ―たとえばマッチがこの間、「じつは6月に入籍してました」って言ったら、「何で今まで言わないんだ」って、ものすごい犯罪者のような怒られ方をするわけですよ。それでマッチは「お母さんが命日があって、その命日の日に母に一番最初に伝えたかったから、それまで発表しなかったんだ」と。それでようやく「ああそうですか、それならしょうがない」と納得するわけですよ。こんな失礼な話はないですよね。

宅―そんな説明する必要さえないのにね。

報じる側の論理

宅―たけしさんと自分の事件のことを話したことはないの？

なべ―最初に入った時に歓迎会で焼肉屋に連れてってくれたんですよ。その時に殿は、とにかく辛いかもしれないけど、やめるなよと。やめたらマスコミの思うツボだ。これは喧嘩だから相手が嫌がることをやってやれって。おまえがやめたら向こうは喜ぶぞって。

宅―ボクは、嫌がることしかやらないから（笑い）。

なべ―一番困るのは、ワイドショーでも何でも編集権が向こうにあるのが、一番の問題なんですよ。たとえば1時間の記者会見を撮ったとしたら、向こうに有利な面は、たとえば5分とかじゃないですか。その繰り返しを、延々、流しているわけなんですよね。結局、向こう

の都合のいい所を編集でどんどんつまんでいくわけです。

宅―記者会見は、建前では、当事者に釈明の機会を与えて、当事者の言い分を報道することによって、バランスを取ろうというのが、本来の建前なんですけれど。

なべ―ウソだ、そんなの。親子会（なべ親子の漫才）がこの間あったんです。

宅―『フォーカス』にも出てたもんね。

なべ―あれのインタビュー受けた時も楽しい雰囲気の取材だなと思って。ところが次の日ワイドショーを見ると、重々しい雰囲気でそれを報道するわけです。それでスタジオは重々しいのに、僕ら親子の映像だけ明るくやっているわけ。そうすると「不謹慎だ」「何考えているんだ、こいつらは」って、そこの番組内でやるわけです。

宅―ワイドショーの仕組みは、撮ってきた映像を、スタジオに持ち込んで、司会者がうなるっていうの？ これはワイドショーだけじゃなくて、今のテレビのあり方だし、大橋巨泉なんかが、大昔に発明したやり方なのかもしれないけど。後出しジャンケンで「まったく何を考えているんでしょうか」ってコメントするんだもんね。

なべ―ちょうど明大事件の時に親父が芝居をやっていたんです。その時は「お客さんが来なくて閑古鳥が鳴いてる。興行打ち切りか」という報道だったんです。でも実際は渦中のなべおさみが見られるというので、満員立ち見が出るぐらいだった。結局、そういう映像は流したくないんです。つらい顔、怒っている顔。それだけを流したいわけなんです。

宅―報道は見出しが先に決まってるから。「世間をお騒がせして、不幸のどん底にいる、お客も入らない」という絵を流したいわけだし。さっきの君の家の話で言えば、大邸宅を手放すようなことになって欲しいなと、報道する側は考えてるんだもん。

なべ―そうなんですよね。

宅―ボクが今回やった記者会見の時は、応えるボクの背後からビデオカメラを回したんです。記者席を正面から全部撮っているわけ。そうすると最初にあいつら、ものすごい不安に陥るわけ。「何に使うんですか、それは」と言うから、「宅八郎の好きなように使います」と言った

ら、あからさまに嫌な顔をしているんですよね。非常に非常識だと。でもそれって彼らが日常的にやってることでしょう。勝手に撮って行くんだもの、どんどん。やめろって手で払いのける映像さえ撮って、編集して使うんだから。編集の恐さをわかっているからこそ、不安な顔をしてるんだよ、あいつら。
なべ—そうですよね。
宅—やってみて理解したんだけど、カメラやマイクを持ったりする時、暴力性というのを、すごく自覚するのよ。何か銃でも持っているような。
なべ—あの内田裕也さんの映画ですよね。『コミック雑誌なんかいらない!』。
伊従マネージャー(オフィス北野)—事務所として僕も取材を受けたことがあるんですけど、対話の距離じゃない。グーッとパーソナルスペースをどんどん侵略して来るんですよね。何人にも囲まれたら相当な精神的プレッシャーになりますね。冷静な判断ができなくなります。
宅—やられた方は、攻撃って感じちゃうものね。気性の荒い人だったら、殴っちゃうかもしれない。そのぐらいカメラやマイクというのは、暴力的だよ、本当に。
なべ—勝新さんが著書『俺、勝新太郎』で、本当にカメラマンを殴りたくなったって書いてる(笑い)。だいたい報道の正義ってあるじゃないですか。カメラがある所の正義って。たとえば雲仙普賢岳。土石流が来て、それを近くで撮って報じた時に勇気あるカメラマンだ、すごい映像を撮ったって、皆ほめるじゃないですか。だけど現場では消防隊の人が、そこは危ないから入るなと。だけどそいつらは行くじゃないですか。消防隊の人は危険を冒して、そいつを助けに行くじゃないですか。大迷惑を起こしているじゃないですか。
宅—だから果敢な行動とか、ジャーナリストとしての姿勢をまっとうしたとかという言われ方をするんだけど、現実にはそんなきれいなことではないと思うし。ところが、カメラの世界だけが正しいことになってしまう。
——そうですね。ピューリッツァー賞の、ハゲタカに食われる子供の絵を撮った人は、それで自殺しちゃいましたものね。あんなのを撮る前に助けなかったのかと。
なべ—結局、ファインダーの中に専念しちゃう人の習性

かも知れないんですけど。

マスコミの体質はいじめ体質だ

宅―まるでマスコミが裁いている意識ってあるじゃない。全部、価値判断を司会者ができると思っている。ところがその結果、本人だけじゃなく家族が仕事を失ったり、もしかしたら自殺するかもしれない。そこまでの責任も負えないクセに「裁いて」いる。君の姉さんなんかも事件の時に会社を辞めたりしたでしょう。

なべ―そうですね。辞めてますね。この間、大河内清輝君が自殺しましたけれども。結局、いじめは良くないと言っているマスコミがやっていることもいじめに近いことがあって、たとえば栗尾さんにしたって、裕木奈江にしたって、あれはいじめですよね。

宅―マスコミの体質はまさにいじめ体質だよ。誰かがレッテルを張る。そうしたら、その人はもう何を報じてもいいんだと、どんどん便乗する人間が現われて、さらに過剰になっていくのは、まさにいじめだ。

なべ―コメンテーターが、またひどいんですよね。いじめの形態を考えると。バカ丸出し。あおる。けしかける。はやしたてる。

宅―ボクは『イカす！　おたく天国』の中で、いじめっ子よりも疑似いじめっ子が一番タチが悪いとも書いた。あれも、いじめを加速させている。さらに、またイジメられればいいと思ってる。言いつける発想もあるし。

なべ―羽賀研二と梅宮辰夫をケンカさせたり……。

宅―こっちにも考えがある。ボクはいじめられっ子が復讐に立ち上がった時しか、いじめは解決しないと思っている。「仕返しっ子」ですよ。もはや報復以外にない。いじめられっ子は自殺する前に、相手を「殺せ」ばいい。痛いしっぺがえしがあったと歴史に残しておかないと、歯止めがきかなくなるんじゃないか。それでボクは「報じる側が報じられる」というケースを、歴史上1回作っておくしかないなと思った。

なべ―同感です。抑止力みたいなものですよね。

宅―だから、君が今後、復讐を考えたらボクが全部代行してもいい。ボクは、この本を読んだ有名人、タレント

が相談してくれれば、協力してもかまわない。
なべ―記者会見で、宅さんが必ず横にいてくれて（笑い）。まず皆様の名刺をくださいって。名刺くれないならけっこうです、こっちで調べますって言って（笑い）。
宅―代理人から一言申し上げますと。皆様の自宅住所もすべてこちらで調査させていただいて、質問の趣旨、報道姿勢についても検証いたします、と（笑い）。
――報道のカメラを向けている人っていうのは、まさか責任追及が自分個人に来るとは思っていないんです。会社に来ると思っているから。
宅―だから無責任でいられるんだ。現場の人間が責任を追及されるような局面にならなければ、何かが動くとは思えなかった。個人攻撃だ、陰湿だ、と誤解されても、ボクはかまわない。小牧やコミネにはなりたくないと思ってもらえれば成功なんだ、ボクは。卑怯でも何でもないもの。だってボクは名乗ってやっているんですよ。建前なんかいらないよ。ボクは宅八郎です。不気味でしつこい、恐ろしいおたくです。それでいいじゃないか。これ以上の正々堂々があるか。

もはや復讐しかない

宅―ところで、師匠のたけしさんがバイク事故起こす前、細川ふみえさんとの不倫疑惑の会見をやった時にレポーターを怒鳴ったでしょ。
なべ―僕もいたんです、あの会見。その人は殿に、不倫はみだらなことだからいけないことですって言った。じゃあアンタはやってないのかって、たけしさんが言って、私はやっていませんと。それで日本では不倫しちゃいけない法律はないだろうって話したら、でも道徳的に良く

ないじゃないかって。おまえ、道徳なんて言葉を言うのかって。じゃあ道でツバも吐いたこともないのか、おまえは。道徳を犯したことは何もないのか。レポーターはありませんって言い張った。そんなヤツいるか。だったらうちの若いのにアンタを全部尾行させるからって。

宅―ボクは現にやってますよ。さらに腹立ったのは、他の雑誌がそのレポーターを責めて書いていたでしょ。おまえらにそんなこと書く資格あるのかって感じた。別の例だと、ポストなんか「筑波の母子三人殺人事件の報道に行き過ぎの声」なんてワイドショー批判の記事を書いてる。でもポストはその2週ほど前に、殺人の被害者が第三者に出していた手紙というのをどこかから強引に回収して来て、勝手に載せていたわけ。死人に口なしで。そんなポストが報道の行き過ぎを批判できるのか。マスコミは当事者意識がないから、自分のことはすぐに棚に上げて、言える資格もないのにやるんだ。もっとも、悪の「自覚」がないから、ボクといっしょに小学館の8階まで行ったとも言えるけど(笑い)。

伊従マネージャー―事務所でも「業界恐怖新聞」で、芸能レポーターを逆にレポートしている宅さんの話はネタにもなっているんで、それを殿もやりたいって。皆内心では思ってるんじゃないですか。

宅―でも、逆取材逆報道には、ものすごい覚悟と体力と精神力と時間がいりますよ(笑い)。

なべ―ケーブルテレビとか、自分たちで作って、そういう番組を作りたいですよ。

宅―「悪魔のワイドショー業界恐怖TV」。ディレクターやりますから(笑い)。あとは、いずれスタッフ集めて「季刊業界恐怖新聞」とい

うのをやりたい。太田出版でどうですか(笑い)。
なべ―それは見たい、読みたい。俺だったら、宅さんに×××××とか処刑してほしいな。
宅―ハハハ。ボクは局のアナウンサーって職業が嫌なわけ。都合良く自分はタレントだって顔をして、いざって時には自分はテレビ局員ですって威張っている。危ない所では会社員になって。芸を売ってたった一人で勝負してるのがタレントでしょう。守ってくれないじゃない。だからボクは女子アナにはお茶汲んで欲しいもの。社員なんだから。女子アナで嫌なのは、いわゆるランクの高いタレントの所に挨拶行って、ランクの低いとされるタレントにはハナも引っ掛けないような顔をしている。ボクは許せないよ。
なべ―○○にすごく感じました。「お笑いウルトラクイズ」の時。僕と宅さんがよく飯食ってるじゃないですか。それで「○○さん、一緒に御飯どうですか」って誘ったりしても……。
宅―無視してんのね。それで、ビートたけしの所に行ったりするの。

なべ―ああいうの、おかしかったな。でも宅さん言ってましたよね。○○にはもう1回チャンスを与えようかって(笑い)。あの時は笑いましたけど。
宅―ある程度ランクの世界ってしょうがないと思うけれど。でも社員はそれをしちゃあいけない。基本的にテレビ局としては、どのタレントさんにも御出演していただいているんでしょ。
――そうそう、編集者みたいなものでしょう。
宅―誰かいますか? 他に処刑を依頼したい人は。
なべ―△△とか、あの辺。芸能レポーターランクで言えば上のほうじゃないですか。レポーター四天王みたいな。あの辺、本当に処刑したいですよね。
宅―でも今回の報道で一番ちゃんとコメントしてたのが、福岡翼だったよ(笑い)。当て逃げ報道のことも、道交法でこの逮捕は不自然だから、裏がある可能性がありますとか、ちゃんと言うことを言ってたよ。福岡翼。逆におかしかったんだけれど。

生島ヒロシを〝殺す〟

なべ—記者会見とかしますよね。すると、結局こっちも、守りたいものがあるじゃないですか。自分のために何かしてくれた人がいるとか、この人は傷つけたくないから、守るじゃないですか。リポーターも、ああ守っているなというのがわかっているんでしょうけれど、それに対しての思いやりが無さすぎですよね。嘘つき扱いしたりとか。だから宅さんみたいな逆襲があるわけじゃないですか。人間的な思いやりの無さに対して。

——あの人たちって、宅さんみたいな「行為」でやらないとわからない人たちですから。

宅—それは感じた。ボクが復讐に向かったのは議論の無意味を知ったからです。理屈はある程度、論理的な人にしか通じない。あいつらと議論しても意味がないから。

なべ—だから、親子会の時はほぼ全部のワイドショーが来たんですけど、特にひどかったのはフジの『おはよう!ナイスデイ』。生島ヒロシですね。他のチャンネルは、けっこう好意的に扱ってくれたのに。すべてのワイドショーを全部見た時に、やはり生島が一番むかつきますね。モノの本質がわかってないですものね。宅さんの報道の時も、生島には皆、腹立ててましたよ。しかしテレビ関係者の間でもけっこう評判悪いみたい。

宅—ああ、そう。生島は評判悪いな。でも、あいつは田中康夫と仲がいいらしいんですよ。

——あの人はテレビ見てても、責任をスタッフになすりつけている。

宅—スタッフが用意した素材を、俺が欲しいのはスクープなんだよなとか言ったらしい。こんなつまんないVTRを撮ってきやがってとかって。

——それじゃあ、おまえが撮って来いって。

なべ—おまえが一番つまんない男だって。

宅—田中康夫と一緒に湾岸戦争に反対する文学者の署名の時にも来てたんでしょ?

——来てましたよ。

宅—『ダカーポ』(95年1月8日号)でも「ワイドショーは何を報道するべきか」という記事で、事件報道のあり方を、生島はエラソーに語っているんだけれども、てめえ

にそんなことが言える筋か、と感じるし、アンタそんなに正義づらしてられるのかとも思う。何かを評しようとした時に、生島はすごくサディスティックだと思うよ。「叩き」というか。いじめだよね。
なべ――僕から見ても、切り口がひどい。切り方がね。
宅――まるでいじめっ子を見ている気になる。疑似いじめっ子というか、子供の世界で言えば、何か先生に言いつけるようなタイプに見えてきたり……。
なべ――言い方が意地悪なんですよね。すごい意地悪な言い方をするんです。宅さんの報道の時だって、ド頭のトップニュースでしたよね。でも「まあ視聴者のみなさん興味ないと思いますけれども、VTR見てみましょうか」って、そんな感じですものね。言い方が。
宅――「朝にふさわしくない話題ですけど」って感じ。そんな話題を、みなさんに興味がない話題を、何で朝からトップに持ってくるんですか。狙いはわかるよ。明らかにこれから紹介するVTRの宅八郎という人は不愉快な人間です、と先入観（レッテル）を先に与えるわけでしょ。

なべ――あいつ、やってくださいよ。
宅――世間のみなさんがアナタを処刑して欲しいって言っているんですけどって（笑い）。
なべ――でも、僕は本当に芸能界に入って良かったと思うことがあるんですよ。結局、報道されている時は一方的じゃないですか。芸人になって舞台に立てば、そこでやっと僕は発言権を持てるんです。その時のうっぷんを言えるんですよ。それで、やっと返せたというのがあるんですよね。返せない人ってスゴイ辛いと思うんですよ。報道されてた時に言いたかったことが言えるようになって、やっとホッとしたなというか。
宅――その時、取材にどう答えていても、報道では発言を使わないものね。使ってくれないもの。一般の人じゃ、どうしようもないものね。君やボクはまだいいよね。
なべ――今、僕も宅さんも発言権を奪われたら、すごいうっぷんたまってしょうがないでしょうね。だから宅さんの「業界恐怖新聞」もっと読みたかったたな。

第6章
支援者

①支援声明文

今回の宅八郎の不当別件逮捕に抗議し、宅八郎支援のために多くの著名人支援者が、記者会見に同席、また声明文を発表した。さらに、本書の元になった『週刊ＳＰＡ！』94年12月7日号「宅八郎はなぜ不当逮捕されたか!?」特集で発表された声明文もある。
彼らは一定の団体に属さない、それぞれ思想・信条・立場・年齢の異なる人たちだ。
まさに、宅八郎でなければ、ありえない組み合わせの顔ぶれ。そんなバラバラな人々が宅を支援したのである。
(言論系の本多勝一氏から渋谷系の小山田圭吾氏まで)
一定のイデオロギーに属する人たちの意見であれば、そのイデオロギー自体が間違っていることもあろう。
しかしそうではない。このことも、宅の持つ「真実」を証明することなのかもしれない。
ここにその支援声明を掲載する(順不同)。

本多勝一

【本多勝一（ほんだ・かついち）ジャーナリスト（新聞記者）『週刊金曜日』編集長】１９３２年、信州・伊那谷生まれ。京都大学農林生物学科から朝日新聞入社。東京本社校閲部・北海道支社報道部・東京本社社会部・編集委員を経て現在、朝日新聞社友。退社後、『週刊金曜日』に関わる。近著として、宅八郎との共著『本多勝一対宅八郎』を準備中。

宅八郎氏が逮捕されたが、理由は「報告義務違反」だった。逮捕するほどの事件とはとても考えられない。不当な「別件逮捕」と宅氏が怒るのも当然であろう。
その「別件」とは、宅氏による「復讐取材」と「報復報

道」である。つまり宅氏は、日本型週刊誌・月刊誌の無茶苦茶な私事暴露（人権侵害報道・プライバシー侵害取材）に対して「目には目を」を実行すべく、やられたと同様なひどい「取材」を敢行して復讐し、『業界恐怖新聞』で「報道」したのであった。

宅八郎氏は、日本の多くの週刊誌や一部月刊誌がつね日ごろやっている犯罪的行為に対して、被害者として反撃してきた。つまりプライバシー侵害などによる人権侵害の加害者に対して、自分がやられたと同じレベルの行為で「お返し」してきた。

したがって週刊誌などがやった「取材」に対し、当の週刊誌記者に向けて個人として「取材」しようとしたにすぎず、宅氏の取材にかれらが応じていれば問題は起きなかったであろう。

かつてチャップリンは、一人殺せば殺人犯だが何千人も殺せば英雄だ、といった趣旨の映画で侵略の本質を訴えた。宅氏の行動はこのことを連想させる。

体制側の御用マスコミに無茶苦茶な人権侵害取材をやられても、ほとんどの被害者が泣き寝入りをしているのだ。ごく一部が裁判に訴えたところで、今や三権分立どころか一権集中の行政癒着機関と化した主流裁判所によって御用マスコミが免罪され、勝訴しても「ウン十万円」ていどの損害賠償にすぎない。こんなハシタ金などいくら支払っても、マスコミ商売は人権侵害して書きまくる方がモウカルのである。このひどい状況はとくに日本が著しく、欧米「先進国」であれば雑誌がつぶれるほどの賠償金が判決されるであろう。

だが、人権侵害マスコミの暴力取材に対しては甘い体制権力が、宅氏個人の同じ行為に対しては弾圧をもって望むのだ。日本の今日的情況が、ここに象徴的にあらわれている。

今日の日本は、もはや「目には目を」以外に被害者救済の道がないほどに司法権力が腐敗堕落している。宅氏の「目には目を」は正当性を評価せざるをえない。それ以外に日本では方法がないからだ。

となれば宅氏の行動も、無法社会・日本での唯一の手段として、たとえばサルトルがジャン＝ジュネを評価した意味以上に当然と考えざるをえないのである。

大泉実成

【大泉実成（おおいずみ・みつなり）ノンフィクション作家】１９６１年生まれ。中央大学大学院文学研究科・哲学専攻。20世紀最大の哲学者と言われるヴィトゲンシュタインを学ぶ。著書『説得 エホバの証人と輸血拒否死事件』（現代書館）で、89年度講談社ノンフィクション大賞受賞。選考委員である立花隆氏、築紫哲也氏らの絶賛を浴びて、20代では初めての受賞だった。新鮮な文体と視点でノンフィクションの新地平をひらく。宅八郎とは89年からの友人。

僕は特定の組織に属さない、いわゆるフリーライターである。フリーで仕事をしている人間はたいてい、巨大メディアに属する人間のあまりにも非常識で傲慢な態度にあきれはてたり、スジの通らない組織エゴむき出しの要求に激怒したりしたことがあるはずだ。

一般のライターがこうした事実を問題化しないのは、なによりそういうバカを相手にするのが時間のムダだからである。そんなヒマがあったら、巨大メディアの中でも話のわかる人を相手にして仕事を進めた方がよっぽど生産的だからだ。

宅君が、あえてそうした「時間のムダ」を始めた時、僕は彼の意図がわからずに「こいつは何をするつもりかな」と不思議に思った。ところが、そういうバカをどこまでも追いつめることで、巨大メディアの持つ高圧的で傲慢な態度を暴き出す、という成果を得たのである。

これには僕も驚いた。と、同時に、彼のやることを応援する気になった。なぜなら、彼の「復讐」と銘うった逆取材は、結果的に、フリーの立場で仕事をしている人間の無念やルサンチマンを晴らすことになるからだ。フリーランスの人間でひそかに彼のファンという人間は多い。

今回の逮捕に関しては、これは議論以前の問題である。現場で取材するライターたちにとって、もし玄関に入って話を聞くことが全て「不法侵入」になるのであれば、仕事そのものが成立しないのだ。しかも告訴した人間が同じジャーナリズムで働いている人間だというのだから話にならない。自分ではさんざんそうした取材をしておきながら、自分だけは取材されることのない特権階

級だとでも思っていたのだろうか。
僕は法や警察を基本的にあまり信用してこなかったが、今回その思いを一層強く持った。「いいかげんにしろ」と抗議させて頂く。

【追　記】逮捕を予期して以上のような抗議声明を用意していたところ、十一月二日深夜「宅八郎当て逃げで逮捕」の報が入って来た。
これは明らかな別件逮捕である。宅君は被害者と修理工場に行こうとしていた。駐車場で誤って車をぶつけ、しかもその損害を弁償する意志のある人間が、どうして逮捕されなければならないのか。こういう人間をいちいち逮捕していたら、警察官が何億人いても人手不足になるだろう。
不当逮捕を隠蔽しようという警察のやり方には吐き気がする。こういうムチャクチャなやり方でジャーナリストを強引に逮捕するということがいかに危険なことか訴えたい。改めて言う。「いいかげんにしろ!!」

小山田圭吾

【小山田圭吾(おやまだ・けいご)ミュージシャン】1969年生まれ。血液型B型。89年、小沢健二とともにフリッパーズ・ギターとしてアルバム「海へいくつもりじゃなかった」でデビュー。91年、グループを解散。93年9月、ニュープロジェクト、コーネリアスとしてデビュー。「太陽は僕の敵」「パーフェクト・レインボウ」などをリリース。94年、「ファースト・クエスチョン・アワード」をリリース。

宅さんとは3年ほど前からの友人です。当時、宅さんが復讐反撃していた「小峯事件」にエールの手紙を送り、彼の出版記念パーティで初めてお会いしました。つまり最初から彼の「復讐」に対する応援がキッカケになっていたわけです。
宅さんとぼくは、礼儀礼節を重んじる性格が似ています。だからこそ宅さんの、無礼者を許さない潔癖な「怒り」と孤高の「復讐」がぼくにも共感を呼んだのです。
宅さんファンとして今まで「業界恐怖新聞」は読んでいました。

しかしスジを通し続けたことで、宅さんは不当別件逮捕されました。ジャンルは違うけど、同じクリエイターとして、恐るべき宅さんの才能異能を認めてきたからこそ、今回の事態を悔しく残念に思うし、このまま宅さんの表現の場が奪われるなら許せない。
　宅さんが今回「ボクはおたく評論家だ!」と宣言した時に、ぼくはカッコイイと思いました。本当にカッコよかった。最初の出会いに立ちかえって、今こそ宅さんを支援します。

中森明夫

【中森明夫(なかもり・あきお)作家・ライター・コラムニスト】1959年三重県生まれ。明治大学付属中野高校中退。85年『朝日ジャーナル』〝新人類の旗手たち〟欄に登場し脚光を浴びる。著作に『東京トンガリキッズ』『オシャレ泥棒』『瞳に星な女たち』、共著に『Mの世代』など。現在は、『週刊SPA!』誌上で「ニュースな女」「中森文化新聞」など、さまざまな活字メディアで執筆活動を展開する。宅八郎とは10年来の友人。

今回の宅八郎氏の不当な逮捕に抗議します。宅氏はその発言や行動、多彩なパフォーマンスがメディアを通じて注目されてきました。しかし、宅氏の出発点が89年夏の連続幼女誘拐殺人事件に関するM被告の逮捕と、その後のマス・ヒステリーとも思える国家的な〝おたく〟バッシングにあったことは、彼の著書『イカす!　おたく天国』(太田出版)にも明らかです。
　その誕生の瞬間からさまざまな誤解にさらされることを一つの覚悟として選び取ってきた宅氏は、あえてマス・メディアによる悪意の誤解に対しては相応の手段をして抵抗してきました。時に行き過ぎと思われる報復も、しかし匿名的な巨大メディアと対抗する誤解にさらされた一個人の選び取りうる手段であったと考えれば、客観的な情状の余地が考慮されてしかるべきでしょう。
　宅氏の執筆による『噂の真相』誌連載の「業界恐怖新聞」の丹念な読者であるなら、彼の報復が単に根拠のない嫌がらせではないことは理解されると思います。彼の対立相手がマス・メディアに属する言論関係の人々であることを思えば、刑事及び民事の訴訟に至るまでのあい

だに、宅氏の抗議に対する直接の対話、あるいは書面による応答……等々、何段階も対処しうる方法はあったのではないでしょうか？

言論に端を発する対立が、充分な議論のないまま徒らに公的検察力の介入に及ぶことを、同じ言論に携わる者の一人として危惧します。

長年の友人であると同時に、年下の優れた表現者の一人である宅氏の人間性に鑑みて、いかなる団体・集団に属するのでもなく、まったく個人としての資格で、今回の宅八郎氏の不当な逮捕に抗議します。

なべやかん

【なべやかん（なべ　やかん）タレント】1970年生まれ。東京都出身。松濤幼稚園を経て、成城学園高校卒、明治大学入学未遂。91年、明大裏口入学・替え玉事件で、なべおさみの長男として騒がれる（「第5章」対談参照）。事件後に、ビートたけしの弟子として入門し、なべやかんの名でタレント活動を開始。怪獣手踊り人形にかけては日本一のコレクターを自任。

宅八郎さん逮捕！　みんな驚いただろうね。俺は宅さんと友達だから、ちょっと前に本人から逮捕されるかもしれないって聞かされてたんだ。

しかし、マスコミはひどいよね。「当て逃げ逮捕」だなんて。不当逮捕だよ、これ。別件逮捕もいいところだよ。「業界恐怖新聞」でバトルしている小牧の事で宅さんと警察がもめて、ポスト―小牧事件では何もできない警察がメンツで、別件逮捕したってのが素人目にもわかるよ。結局、宅さんは小学館側が頼んだ警察に不当逮捕されたんだ。

芸能人の俺が、こうして宅さんを支援するってことは、マスコミ対応的にいってマイナスだと思うんだよ。でも、そんなもんじゃ収まらない物があったんだ。

だけど実際に事件がどうあれ、一般市民の頭には《宅八郎が逮捕された》しか残らないんだ。マスコミなんかその後のフォローーなんかしないもん。とくにワイドショーなんかひどくて、絶対自分たちが不利になるところはカットするからね。それに大体、その事件を面白くするためにはマスコミは事実を曲げて報道するからね。俺の

時もそうだったよ。
　事件には裏も表もあって、それで（報道する側にとって）都合の良いところをテレビで流す。そんなもんなんだって。その表面だけ見てコメントしてるバカがいるけど、あいつら何考えてんだろうね。
　特に酷いのが生島ヒロシ。あいつはバカ丸出しだね。鼻糞ほじりながらせんべい食ってテレビ観てるオバチャンと変わらないもん。宅さんの時もそうだったけど、都合の良い編集テープ見て文句言って、あいつは物の本質わかってないの。

ケイ・ティー

【Kei-Tee／ミュージシャン】1973年東京生まれ。血液型B型。B83・W56・H85。93年1月「ガールポップ94」で本格的な活動を開始、「DA-キ・ラ・イ」でCDデビュー。94年、写真集『月の輝く夜に』を出版。同年、「オールナイトニッポン」出演開始。ユニット・Kei-Tee＋LOVE DYNAMIGHTSで「WILDルビイ」「愛は極嬢」をリリース。

宅八郎は潔くカッコイイと思う。
　私自身、父親が「角川春樹」という事実だけで「例の事件」の時は、マスコミの常識を疑う事ばかりだった。
　突然来襲の取材強要、平気な顔して家宅侵入。本人がいなければ家族はおろか、近所や友人にまで取材しまくった。それでサーッて引くように離れていった友人もいた。大学にも人目を気にして行けなかった……。
　母親はノイローゼになるし、周囲の心配や、好奇心にあふれる目もあったので、平気なフリするのが大変だったっけ。
　だから宅ちゃんの気持ちが痛いほどわかる。私に出来ること全部してあげたくて支援することにした。
　宅ちゃんは、いつも一人で裸で戦ってきた。宅chanがやらなきゃ、誰もしない。素直にカッコイイなと思った。

宮台真司

【宮台真司（みやだい・しんじ）東京都立大学助教授・東京大学講師・社会学博士】1959年生まれ。87年東京大学大学院博士課程修了、社会システム理論を専攻。学生企業の取締役から東大助手・東京外大講師を経て、現職に。93年、朝日文化面紙上「ブルセラ論戦」を皮切りに、『現代』『諸君！』などに関連する文章を発表、興味深い世代論・戦後論へと発展させる。主著は、『権力の予期理論』、『サブカルチャー神話解体』（共著）、『制服少女たちの選択』など。事実の発掘に執念を燃やす新しいタイプの社会学者である。

宅八郎氏への不当な別件逮捕を断固糾弾する。マスコミによる物書きへの搾取は目に余るものがあり、宅八郎氏の近年の果敢な振る舞いは、多くの物書きに多大な勇気を与えるとともに、新たな方法論を提示してきた。

今回の不当逮捕は、我々物書きの結束をますます高めるものであることは、明らかであろう。

バクシーシ山下

【バクシーシ山下（ばくしーし・やました）アダルトビデオ監督】1967年生まれ。17歳で童貞喪失。21歳でAV業界入り。ウンコ処理を中心としたAD業務を経験後、監督デビュー。「女犯」シリーズ、「ボディコン労働者階級」などが代表作。他人が目をそむける変態たちをひたすら撮り続けていたら、自らも変態の仲間だと、目をそむけられ、現在にいたる。職業はAV監督なのだが、なかなか胸を張って言えたものではない。

僕は仕事柄、イヤというほどAVギャルと接している。お金のために何でもする、正直で清々しい彼女たちに、今回の事件と宅さんについて尋ねてみたところ……。

「車、盗んだんでしょ？　えっ、違ったっけ」

別の子は、

「ひき逃げしちゃマズイよ」

さらに、

「前々から何かやりそうだったもんね」「逃げきれなかったのは、ダサい」「ホントに怖い人だった」

いくら僕が、ことの成りゆきを説明しても彼女たちは耳を貸そうとしなかった。宅さんが犯罪者のほうが、おもしろいからだろう。

そう、確かにおもしろいが、嘘で盛り上がるにもほどがある。「悪人っぽい人」が「悪人」になってしまう、これが報道被害の現実だ。

今回の不当逮捕とそれに便乗した悪意あるマスコミ報道に抗議する。警察が正義の味方じゃないって知って愕然とした昔を思い出した。あームカムカする。

(記者会見で流れた電話録音テープ)

安部譲二

【安部譲二(あべ・じょうじ)作家】1937年生まれ。バクチ打ち、キックボクシング解説者、三島由紀夫の用心棒、日航パーサー、競馬予想屋など職を変えた後、本人をモデルに書かれた三島由紀夫の小説「複雑な彼」の主人公の名からペンネームを取り、作家になる。86年『塀の中の懲りない面々』を執筆(87年・日本新語流行語大賞受賞)。以後、ベストセラー作家になる。

安部譲二です。仕事があってどうしても出席することができませんので、テープで私の考えを申し上げます。

私は宅八郎君の闘う姿勢をとっても愛してきました。それはなぜかといえば、現在の青年が長いものに巻かれ闘う姿勢を失った時に、宅君だけは敢然として大きな相手、不当な相手に対して闘ったからです。僕はその宅君の「やられたらやり返す」という、現代の青年が失ってしまった心をとても愛していました。

そして今回、宅八郎君はまったく普通の人であれば逮捕されないような事件で警察に逮捕されました。事件のあらましを皆さんがお聞きになれば、何でこんなことで2日間(※2泊3日間)も身柄を拘束されたのか、ビックリされると思います。

しかし、警察というものは市民を逮捕しようと思ったら、このようにどんな手段を使ってでも逮捕するものです。私もこれまで過ごしてくる間にこういう逮捕のされ方は何回も経験があります。苦笑いするようなことで何度も逮捕された覚えがあります。

これはとても恐ろしいことで、たとえば宅君のような

青年の立場にしてみたら、この警察の逮捕ということで、すべての生活手段を奪われるのです。すでに「噂の真相」社の岡留社長は宅君の連載を打ち切ることを公表しています。さらにレギュラーで出演していたテレビ番組の製作者も宅君を降ろすことを決定しています。

まともな納税者である市民にとって、警察に逮捕されるといえば「好ましからぬ人物」という焼き印を押され、生活手段をすべて失ってしまうことになります。

ああ。こうやって電話で録音していても、今の宅君の心情を思う時、胸がふさがれる思いがします。

これは巨大な組織が動いた結果で、宅君は逮捕され生活に窮することになりました。これは誠に忍びないことであります。

そして考えてみると、これは私たち市民が共通に持つ恐怖で、警察ににらまれ警察を怒らせれば、私にしてもたちまち宅君と同じようなことになってしまうのであります。これが恐怖でなくて何でしょう。私にしても、今の私の状況で警察を刺激し怒らせることは本意ではありません。

ただこの事態に際して皆様に、宅君がいかに不当に逮捕され2日間（※2泊3日間）、身柄を拘束され、さらに生活手段を奪われたか、そしてさらにそれが宅君のみの問題ではなく、私たちが等しく共通して持っている潜在した恐怖であることを御理解いただきたいと思います。

よろしく宅八郎君の御支援をお願い申し上げます。さらに宅君の活躍する分野の皆様、宅君に発表する場と仕事の場をどうぞ与えてください。

年上の友人としてお願いを申し上げます。

鶴師一彦

【鶴師一彦（つるし・かずひこ）『週刊SPA!』編集長】１９５５年生まれ。早稲田大学法学部卒。卒業後、国学院大学文学部に学士入学後中退。みのり書房に入社、おたく雑誌『月刊OUT』で、ドラクエの堀井雄二らを担当。退社後、サンケイ出版（現・扶桑社に統合）に入社。88年『週刊SPA!』創刊以来、編集部に在籍（扶桑社）。伝説の連載「宅八郎のイカす！おたく天国」（単行本は小社刊）を担当後、93年編集長に就任。小林よし

のり「ゴーマニズム宣言」などを手掛け、発行部数を飛躍的にのばす。

「いやあ、あんな特集よくやりましたね」「あんな連載、大丈夫なんですか？」

会う人ごとにそう言われた。いや、今でも言われることがある。これは、『ＳＰＡ！』94年12月7日号の特集「宅八郎はなぜ不当逮捕されたか!?」のことであり、12月28日号から新連載を開始した「週刊宅八郎」（仮題）のことである。

『ＳＰＡ！』は、不当逮捕された宅八郎が仕事を失っていく中で、支援大特集を組んで、連載まで開始させたわけだ。それも何と、連載開始時には表紙にまで彼を起用しているのだ。

「なぜ宅八郎を（あんな奴を）支援するのか」と聞かれることも多い。

宅八郎の誕生は確かにこの『ＳＰＡ！』だったし、伝説の連載「イカす！　おたく天国」の担当編集者は、ほかならぬ僕だった。しかし、彼と仲がいいからなどという理由で宅八郎を支援したわけじゃない。

報道、そして取材はどこまで許されるのか？　取材は報道機関にだけ許された特権なのか？　個人には取材し、報道する権利はないのか？　報道責任は会社にあるのか個人にあるのか？　大出版社の「取材」は公共性があると認められ、個人である宅八郎が行った「取材」は、なぜ「犯罪」と、とられてしまうのか？

宅八郎は、そうした問題を突きつけてきたように思う。彼の逮捕をあくまでも「つまらない人間が起こした、当て逃げという下らない事件」という矮小な物語として片づけようとしたメディアは多かった。マス・メディアにとって都合の悪いことを宅八郎は暴きだしてきたからだ。

僕が彼を支援したのは、彼がマス・メディアに提起したさまざまな問題を同じマス・メディアの一員として考えていきたいからだ。

だが、この事件が言論にとって、これほど重要な問題提起をはらんでいたとは、僕も初めはわかっていなかった。しかし、特集を組むことを決め、動きだしていくうちに、ことの重大さがわかってきたのである。

『ＳＰＡ！』の若手編集者たちも、あまりにも不当な逮捕・拘禁、あまりにもひどい小学館側の対応、という現実を実感し、この企画に熱がこもっていった。編集長である僕にとって、これは嬉しかった。活気のある編集部から面白い雑誌は生まれると確信しているから。

予想どおり、特集も連載も評判を呼んでいる。宅八郎に眉をしかめる人たちも、みんな『ＳＰＡ！』の記事を気にして「こっそり」読んでいる。とにかく理屈抜きに宅八郎のやっていることは面白いのだ。

だったら雑誌編集者として、このような記事を作り続けることは、あまりにも当たり前のことだろう。僕は宅八郎を今後も支援し続けていく。それは、僕が編集者であり続けてゆく、ということと全く同じ意味を持っているから。

②宅八郎弁護団は語る

「小学館討ち入りの夜、一度は弁護団解散をかんがえましたよ」

斎藤健児

【斎藤健児（さいとう・けんじ）弁護士】１９４６年生まれ。埼玉県出身。76年に弁護士登録。東京弁護士会所属。神田で法律事務所を経営し、一般市民事件を中心に、キャリア20年の実績で、活躍する。

私は宅八郎さんについては、今度の事件でお会いするまで全く知らなかったんです。どこかで聞いた名前だなという程度の認識しかありませんでした。

宅さんが小平警察署から住居侵入などの容疑で呼び出しを受けているということで、弁護を引き受けることになり、宅さんの書いた、例の「業界恐怖新聞」なるも

のを初めて読んだんです。読んでみて「いや、これはすごい反撃だな」と思いました。『週刊ポスト』の小牧デスクは、これは生きた心地がしないだろうと。いや、本当に、ここまでプライバシーを暴かれたら小牧さんは大変で、恐慌状態だろうなと思いましたよ。

プライバシー侵害などのマスコミによる報道被害に対して、〝目には目を〟と報道した側の責任者を逆取材して反撃すべしという考えがあることは知っていました。が、こう絵に描いたように見事に反撃しているのを読んで、こういうやり方でひどい取材に対抗している宅八郎という人物について、面白いという印象を持ちました。

あそこまで執念を持って他人の決定的なプライバシーを暴くというのは、なかなかできることではないですよね。しかも、宅さんがきちんと裏付けを取って書いているということは記事を読んでわかりました。

裁判に携わる弁護士が、こんなことを言うのは不謹慎だと思われるかも知れませんが、プライバシーが侵害されても、その被害を裁判で回復するというのは、実際は容易なことではない。裁判手続きに要する大きな費用や時間、苦労にくらべ、判決で認められる賠償額は微々たるものという裁判の現状が告発されているのだと思います。

それに、こういう私事暴露は、それこそ小牧デスクなり、『週刊ポスト』の編集部からすれば、日ごろやっている行動そのままでしょうからね。彼らは日ごろ自分たちがやっていることが、「報道される側」にどんな事態をもたらすのかということを身を持って思い知らされたわけで、そういう部分も含めて、〝目には目を〟はとても興味ある方法論だと思いました。

ただ、宅さんの「業界恐怖新聞」を読んで抵抗があったのは、小牧さんの息子さんについて触れた部分です。息子さんを「バカ者っぽい」と評した部分がありましたよね。宅さんに「あれはマズイですよ。小牧氏本人への逆取材を徹底的にやるのは理解できるけど、家族までを標的にするようなやり方については賛成できない」と言ったのです。「これでは、向こうのレベルと同じにならないか」と。

宅さんは「バカ者ルック」という形容が一応流行語に

なっていることの弁明をしてから、開き直ったようにこう言うんです。
「ボク自身も、自分のやっていることが全面的に正しいとは思っていません。しかし、マスコミの側、小牧氏の側は取材対象者の家族を巻き込もうがどうしようが、そんなことはお構いなしでひどいことをやっているんです。ボクはやります」
ここが宅さんが「悪魔（サタン）」を自称するゆえんであり、私がときおり彼と距離を置きたい気持ちにかられる部分なのです。いまでも私は、この宅さんの抗弁は納得いかないけれど、彼は「悪魔」として報道する側を告発しているわけで「一理あるかな」と思ったりして、私の気持ちとしても揺らぐ部分があるんです。
しかし警察にとっては、特に私事暴露を越えた直接行動というのは、〝目には目を〟を越えているとして、ある種の許しがたいものがあると思いますよ。取材として小牧宅を訪ねても、報復的な動機がくっついているわけですから。だから今回の「小牧事件」も、実は例の小峯氏の件あたりから綿々と続いている事件として、警視庁は見ていると思いますね。警察は宅さんをマークし「危険人物」として位置づけているんではないかなと感じます。
今回の宅さんの逮捕についてのマスコミ報道の姿勢については、改めて「ひどいものだ」と思いました。マスコミは第四の権力だと言われていますが、実際、裁判所が判断する前にペンと写真で人を社会的に裁いてしまう力を持っている。それだけにきちんとした取材と報道の姿勢がなければ、それこそ世の中はおかしくなってしまうと痛感します。
例えば、宅さんの報道に関しての「当て逃げ」という言葉。警察発表を鵜呑みにせずに、事実を正確に取材していれば、使えない言葉でしょう。彼は別に逃げていないし、被害者の女性とは事実上示談も成立していたのですから。それを三大新聞を含むほとんどのマスコミが、バーンと「当て逃げ逮捕」「逮捕したら（当て逃げと）認めた」と報道してしまうんですから。被害者の言い分に耳を傾けないマスコミ報道の怖さを改めて知らされました。

11月7日の記者会見の後、小学館の『週刊ポスト』に

宅さんが〝討ち入り〟をした夜は深刻な議論になりました。梓澤弁護士と二人で「もう辞任しかないのでは」「弁護団は解散しよう」という話になってしまったのです。

目の前で、事前の相談もなく突然ああいう行動を取られたら、もう彼を弁護しきれないのではということで……。

しかし、翌日のテレビや新聞の報道を見て、また、考えてしまった。小学館のビルに入ったから宅さんの言い分が取り上げられた面があると感じたからです。つまりあの問題の行動によって、ようやくこの事件が、実は「週刊ポスト――小牧事件」なんだということがクローズアップされたのです。

そんなわけで、今でも弁護団というわけです。

一部には宅さんのやっていることは小牧氏との泥仕合ではないかという疑問が出されているようですが、私としては宅さんが投げかけている〝報道被害の告発〟〝報道の在り方の批判〟という問題提起が、その行動によって少しでも深められるといいなと期待しています。

「報道と人権に関して、これだけの要素がつまった事件は前代未聞だ」

梓澤和幸

【梓澤和幸（あずさわ・かずゆき）弁護士】1943年生まれ。群馬県出身。一橋大学法学部卒。71年弁護士登録。人権と報道、外国人の人権など、人権に関する事件を多く手がける。現在、日本弁護士連合会人権擁護委員、同人権と報道に関する調査研究委員会副委員長、民間放送連盟番組調査会委員。著書に『悲しいパスポート』（同時代社）、『外国人が裁かれるとき』（岩波書店）。

この宅さんの事件には、実は三つの要素があると思うんです。

一つは、一般の犯罪報道によって引き起こされる人権侵害の典型的な事象であるという側面です。

報道と人権の問題には、80年代の半ば頃から大きな問題としてスポットが当たっています。その頃、私が議長をしていた弁護士学者合同部会は、朝日・読売・毎日の三大朝刊紙で報道された事件記事の当事者（容疑者・または容疑者の家族）に「報道によって、どんな被害を受けましたか？」という質問のお手紙を出したわけです。

そうしたところ、回答はさほど多くはなかったんですが、その返事のほとんど全てが「あまりにも警察発表寄りの報道である」といった内容でした。警察発表をなぞっただけの新聞記事で、非常に一方的な書かれ方をしたと。

そして、そういう警察発表寄りの犯罪報道によって、例えば、近所づきあいができなくなって引っ越しを余儀なくされたりとか、仕事がダメになったり、就職がダメになったりとか、そのあげく離婚したりとか……容疑者、その家族の方々が、惨憺(さんたん)たるありさまの被害を受けていたことが浮かびあがってきたんです。

それ以後も、私はずっと報道による人権侵害の問題に取り組んできているんですが、今回の宅さんの件も、基本的にはおんなじだな、と。犯罪報道と人権問題の典型的な例だなって思いますね。

新聞記事、テレビのワイドショーもすべて「当てて、逃げた」という代々木署の警察発表だけに基づいて報じているし、別件逮捕の疑いについても、まともに論及してもいない。

しかも、宅さんが逮捕されたああいう状況の中で、宅さんが手錠をつけられ腰縄を縛られた連行写真がマスコミによって撮られて、テレビや新聞で流されたりしてたら、もう取り返しがつかないくらいのダメージを受けていたかもしれない。もし連行写真が出てたら、世間一般の人には、「宅は凶悪な犯罪者だ」みたいなイメージが定着してしまったと思う。恐ろしいことです。

だから、絶対に連行写真をマスコミに写させるなと、警察に申し入れをしたのです。11月4日の朝、宅さんが留置されていた代々木署から検察庁へ移送される、その瞬間が一番写真を撮られる可能性が高かった。その前の晩に警察の当直の人間から無理やりFAXナンバーを聞き出して、弁護団として文書を送りました。午前一時半頃のことです。

あんな微罪で、連行される姿がマスコミで報じられるなんてことがあったら大問題だぞ、と。それに三浦和義さんの件でも、人権侵害っていう判決が出てるじゃないかと。あの時、なにも手を打たなかったら、宅さんの手錠・腰縄姿の写真がテレビや新聞にデカデカと掲載され

たでしょうね。
　そして二つめに、有名人に対するプライバシーの侵害という要素も、この宅さんの事件にはある。こういう犯罪報道の問題と、有名人のプライバシー侵害の問題の両方が重なっている事件っていうのは珍しい例なんですよ。普通は、どっちか一つだから。
　それから三つめに、弁護団と宅さんを支援する会、そして宅さん本人がおこなった「反撃」についてです。
　犯罪報道によって人権を侵害された側が、報道にたいする反撃を最初から計画して行動したというのは、極めて稀な例です。例えば、宅さんが逮捕された当日（11月2日）の深夜に開いた弁護団と支援者による緊急記者会見です。
　逮捕された側の言い分というのは、なかなか報道陣には流れません。それが、その逮捕当日に、しかも様々な資料まで用意された形で記者会見をやったというのは前代未聞です。
　私自身、報道と人権の問題を長くやってますから、あの緊急記者会見には力をいれてやりましたけど、あれは今後のとてもいいテストケースになったはずです。逮捕当日に、しかもわずか数時間のうちに、警視庁の記者クラブに連絡して、報道陣を50人近く集めて、容疑者の側が反撃の記者会見をやったという事実はね。
　この事実と、そして準備態勢、方法論というのは、今後起きるだろう様々な事件の時の、とてもいい参考例になると思いますよ。ああいう風にやれば、逮捕された側・容疑者の側だって、報道被害にたいして反撃可能なんだっていうことを実証したわけですから。
　そういう意味では、11月7日に、宅さん本人が出席しておこなった記者会見も意義は大きいんです。報道被害を受けた人間自身が敢然と正面に登場して、問題提起をした。普通ね、報道によって人権を侵害された人っていうのは、あまりもう、表に出てこないんですよ。公然と出てきて、権利を主張して、報道機関に挑みかかるなんて人はまずいません。
　宅さんのように、徹底的に報道被害の問題で闘うという人は、有名人のプライバシー侵害の件としても支援するべきです。また、一般市民の人で報道被害にあわれて

いる多くの人々にとっても、彼の行動は大きな励ましになるはずです。こういう風に堂々と姿をさらして闘っている人もいるんだってことで。
そういう三つの要素を考えていくと、この事件は物凄い意義をもつ事件なのです。
それから、ある意味で、今回のこの事件というのは、報道する側・マスコミの側にとっても、実はチャンスだったとも思うんです。例えば、『西日本新聞』が被疑者側・弁護士側の意見にも紙面を割く、「言い分取材」というのをやって、93年度の新聞協会賞を受けているんですね。西日本新聞がやったことは、従来から言われ続けて来たマスコミの犯罪報道の一方性にたいする注目される実験だった。
そういう報道に関する流れがある中で、この宅さんの事件は、報道被害に関しての多くの問題をマスコミ全般に発信したんだけども、それを、どこも受けとめなかった。朝・毎・読あたりのどこかがやってくれるかなと期待はしたんだけど、警察発表のまんまの報道でしょ。毎日新聞がちょこっと、警察側と弁護団・支援会の意見の対立みたいなのを報じてくれましたが……。
逮捕された側の言い分を聞いたときに、警察の情報と異なる事実関係が出てきたときには、いったん警察発表の信憑性を逮捕された側の主張と同列に置いてみることが必要だと思います。その上で、警察発表の信憑性を検証してみるのです。
ところが、いまメディア側は逮捕された側の言い分を聞く機会があっても、警察からの情報を疑ってみるとか、検証し直すとかの作業をしていない。だから、進歩がみられないのです。
新聞を始めとするマスコミは、とてもいいチャンスを逃したなぁと思いますよ。マスコミが変わる大いなるチャンスだったんですよ、この「宅八郎事件」は。
だから宅さんが、これからもこの問題を発言し続けていくということの意義は、凄く大きいものがあるんです。そのことに、日本のマスコミは早く気づくべきです。
宅さん自身に関して言えば、ああいう「嫌われるパーソナリティー」っていうのは、面白いと思います。彼の

行動は、毒をもった批判、毒による批判です。
　宅さんの逆取材については、とても興味深いんです。ジャーナリストのあり方として、大報道機関だけが「取材の自由」という特権を主張していいのかという、法律的な論理の面からみても面白い問いかけを、宅さんはしている。それが興味深い。
　そして、それを彼なりのやり方、逆説的な、波風の立つ言葉で問題提起しています。普遍的なところをついていると思う。毒による批判、毒の力を持った人だと思います。毒による批判っていうのは、だれにでもできるもんじゃないからね。必ず敵を作っちゃうわけだから。しかし、ある種独特の力を持つんだ、毒による批判は。敵を作るけども、その敵自体が宅さんを嫌がっちゃうっていうか、そういう奇妙な力だね。
　それに彼の毒は、紙の上だけじゃないからね。身を捨てて、やるからね。そこが、私なんかは、まぁ、ついていけない部分でもあるんだなぁ。怖くて、おっかないというか、危ないわけ。
　私は宅さんのことを「彼は、危険な誘惑だ」って言ったことがあるんだけど、そういう部分だね。せめて、フグの毒くらいにしとかないと、宅さん自身が生きてけないんじゃないかと心配したりもします。

③「宅八郎さんを支援し、不当逮捕に抗議する会」事務局スタッフになった理由

報道加害者でもある僕は、だから宅八郎を支援する

藤井良樹

【藤井良樹（ふじい・よしき）ルポライター】1965年生まれ。バンドマン、活動家、コピーライター、フィリピン・ネグロス島での日本語教師などの職業を経て、ルポライターに。ブルセラ問題の分野では第一人者として、数多くのルポ・評論を発表している。著書に『女子高生はなぜ下着を売ったのか？』（宝島社）、『ガキのきもちはわかるまい』（共著・風雅書房）他。

94年11月7日、宅八郎が小学館・週刊ポスト編集部に討ち入りした夜。

僕も、そこにいた。

「宅八郎さんを支援し、不当逮捕に抗議する会」の事務局スタッフとして、そこにいた。そして、ちょうどその時、週刊ポスト編集部には、僕の担当をしてくれている編集者もいた。9月から10月にかけて、僕は3回にわたって週刊ポストに署名原稿を書いている。原稿は3回とも、僕が2年間以上ずっと追い続けている「ブルセラ問題」に関するものだ。

宅八郎の小牧家襲撃につきあったりしながら、一方ではポストで仕事をしていたわけで、無節操極まりないと言われれば、その通り。だいたい宅八郎の行動を支援している僕がポストで仕事をしていたことも無茶だけど、逆に僕が宅八郎を支援するのもまた、大いなる矛盾なのだ。

なぜなら僕こそは、宅八郎が忌み嫌い、攻撃対象としている「報道加害者」だからだ。

僕は、「ブルセラ問題」のルポを写真週刊誌や男性向け雑誌、エロ本などで書いて行く中で、多くの16歳や17歳の少女たちのプライバシーを侵害している。僕が取材し書いた『フライデー』の「女子高生デートクラブ記事」の掲載写真の目線が薄かったために、デートクラブ通いが友人やバイト先にバレてしまった高校2年生もいる。

フジテレビ、TBS、テレビ朝日、日本テレビのワイドショーにもコメンテーターやレポーターとして数回出演している。警察に手入れを受けたばかりの「デートクラブ」の下で、補導調書を取られたばかりの女子高生を呼び止め、僕がインタビューし、ワイドショーで放送するなんてこともやった。

正直言って僕は、宅八郎に攻撃されてもおかしくない立場の人間だ。そして、だからこそ、宅八郎の一連の復讐を断固支持するんだ！

でも、宅と共に、週刊ポスト編集部に押しかけて、自分の担当編集者と目があった時に、僕が思わずお辞儀をしてしまったのも事実です。

なんか、申し訳ないなぁと思ったからだ。週刊ポスト編集部や、小牧デスクや、彼の家族にも少し申し訳ないと、僕は思っている。「宅八郎逮捕が近い」の情報が入り、宅支援に本格的に乗り出した時も、「あぁ、これでもう、いよいよポストの仕事はできなくなるなぁ」とか思って、それなりに考えこんだりもした。

でも、宅八郎を支援した。なぜなら、僕はやっぱり、報道加害者だからだ。

文章を書き、それを世間に発表することを自らの表現と生活の糧を得る術とし、そしてその文章表現の方法にルポルタージュを選ぶのならば、どう考えても、自分が報道加害者であるという自覚を抜きにルポライターという仕事はできないと、僕は確信している。

罪のない、だれも傷つけない、良心的な仕事なんて僕にはできないし、やりたくもない。宅八郎が、報道被害への抗議の意味をこめて小牧さんの家のドアをたたいた時、僕はその光景をそばで見ていた。小牧さんは姿を表さず、数分後、パトカーが数台駆けつけて来た。

きっと、小牧三平さんは、自分のことを報道加害者だなんて思っていないんだろう。自分のことを「だれも傷つけない公正中立なマスコミ人」だと信じているんだろう。

悪いけど僕は、小牧さんのようにはなりたくない。だから、僕は宅八郎を支援する。

宅八郎は、〈回転体〉の感覚が理解できると言ってはばからない人だ。

〈回転体〉とは、あの青物横丁駅で大学病院の医師をトカレフで射殺した犯人が「自分の身体の中には医者によって埋め込まれた回転体が、いまも回っている」と、テレビ局に送り付けた声明文に書いていた〈回転体〉のことで、宅八郎は、トカレフを撃った男の身体中を駆け巡

ったその〈回転体〉の正体がボクにはわかる、と言うのだ。
医師を射殺した男は、本当は弱い人間だったんだろう。彼が持つべきは、本当はトカレフなんかではなく、彼が撃ち殺すべきは、本当はあの医者なんかじゃなかったんだろう。
しかし、宅八郎は僕に、「ボクはヤツの気持ちがわかるよ。ボクの身体の中にも回転体はあるぜ」と言うのだ。
彼は、たぶんヒーローにはなれないだろう。カリスマにもなれないだろう。人から疎んじられることはあっても、なかなか尊敬されたりはしないだろう。これからも、警察からは付け狙われるだろうし、マスコミからは叩かれるだろう。なぜなら彼は、自分の中に〈回転体〉があることを自覚してしまった人間だからだ。
そして本当は、だれの中にも〈回転体〉はある。マジに。要は、自らの内にある、そのどうしようもない〈回転体〉と、どう向きあうのかなんだ。青物横丁の犯人は、人を撃ち殺した。いじめられた大河内君は、自殺を選んだ。そして、宅八郎は、復讐を実行し続けている。
この本を読んだあなたは、自分の〈回転体〉とどう向きあうつもりですか？　僕自身は、僕自身のどうしようもない〈回転体〉とどう向きあえばいいんだ!?
その答えを探すためにも、僕は宅八郎を支援する。

なぜ、わたしは宅八郎を支援するのか
加藤将輝

【加藤将輝（かとう・まさき）フリーの取材者、ディベーター】１９６２年生まれ。中卒。北朝鮮ルポ、海外映画館事情、天皇御大葬研究、大木金太郎物語などを執筆。テレビドキュメンタリーの企画・構成にも携わり、筑波研究学園都市の検証、部落差別の現状、などの番組を発表。テレビディベート、ドラマ、アダルトビデオ男優などの出演も多い。近刊に『笑えない北朝鮮』『どいつもこいつも朝鮮人』『犬の死骸を喰い散らし』「韓国人としての大山倍達」を書かせてくれる媒体を募集中。

なぜ、わたしは宅八郎を支援するのか。それは、彼の行動がマスコミ、ジャーナリズム、報道、メディアといったものの根幹を揺るがす問いかけになっているから。
なぜ、わたしは宅八郎を支援するのか。それは、わた

し自身が取材者として、個人の資格でものを伝えようと思っているから。

＊

小学館の週刊ポストに、宅八郎は悪質な取材をされている。その取材は、住居侵入、無断撮影など、一般人の常識で考えれば許されざる行為であった。しかし、わたしはこういう取材方法があってもかまわないと考えている。もちろん、こんなことをやれば批難されるだろう。そのことをわかったうえで、自覚して取材をし、結果にともなう責任をとる覚悟があるのなら、いっこうにかまわないと思う。

宅八郎が小牧氏の自宅に行った逆取材も、考えてみればひどいものだ。プライバシー、人権の侵害かも知れない。しかし、宅はきわめて自覚的にこの逆取材を行っている。自分の行為が「悪」と呼ばれてもかまわないというほど、自覚的に。

宅の行為をひどいと思う人も多いだろう。それならそれでよい。宅がひどければ、小牧氏たちもひどい。宅の行為がくだらなければ、小牧氏たちの行為もくだらない。宅が騒ぎを起こし、問題を大きくすればするほど、小牧氏たちに代表されるようなメディアのどうしようもなさが浮かび上がってくる。宅の行動は、物事を戯画化し、問題の本質をわかりやすくしてくれるのだ。

宅は責任をとる覚悟ももっている。なぜなら自分の名前を明らかにして逆取材を行っているからだ。同じようにひどい取材をしても、メディアの場合は『週刊ポスト』とか、○○とか、メディアの名前に隠れ、どこの誰がやっているのかちっともわからない。

宅は名前を明らかにしたことで、警察に告訴され、とうとう別件で逮捕までされた。これが取材を行った結果にともなう責任、というのはあまりにも本人にとって酷だが、自分の信念を貫くことによって、いわば堂々と逮捕されたのである。

このように宅八郎の行動は、メディアのもつ欺瞞性を告発する。自覚もなしにプライバシーや人権を侵害し続け、匿名性に安住していつまでも反省しないメディア。こういった構造がなぜ成立してしまうのか。

理由のひとつは、報道というものが特権意識にあぐら

をかいているからだ。
マスコミの役割、ジャーナリズムの使命、そんなものに果たして意味があるのか？　大事な取材だから御協力を、そんな綺麗事を言って作った記事、番組、ニュースがそんなにたいそうなものなのか？　取材という名目を掲げればそれが免罪符になるのか？　報道とはそんなに偉いものなのか？　もっと根本から疑ってみてもいいんじゃないのか？
もうひとつの理由は、なぜ報道をするのかをきちんと考えていないからだ。報道には何を伝えるか、どのように伝えるか、なんのために伝えるか、という三本柱がある。
しかし、なんのために伝えるかはあまりにも考えられていない。何を伝えるか、だけはみんな考えているから、トピック、トレンド、スクープ、特ダネなどといった、わかりやすいものばかりが横行することになる。どのように伝えるか、の工夫も非常に遅れていて、ありきたりの取材、紋切り型の物言いだけがあふれ、金太郎飴のようにそっくりなものばかりが生み出されてゆく。

なんのために伝えるか、を考えることは最も大事なことのはずだ。それをないがしろにするから、出来もいいかげんになるし、作ったものに責任がもてなくなる。
『週刊ポスト』が宅八郎を報じた記事は、まさにその典型だろう。でたらめな取材で悪意に満ちた構成をし、反論されれば答えない。どうして自分たちのやったことに責任がもてないのか。自信があるなら、宅の抗議を堂々と受けて、逆に宅の批判でもすればいいじゃないか。なんのために伝えるか、を考えず、その場しのぎのセンセーショナリズムで記事を作ってるから、こんな当たり前のことにも答えられないのだ。
しかし宅八郎は、なんのために伝えるか、を常に考えている。なんのためか？
それはもちろん、復讐のためだ。だから自分の身を拘束されるという経験をしても、宅は逆取材の方針を変えない。
『週刊ポスト』など、組織の名で取材をするなら、無自覚、無責任でも済んでしまうのが現実だけど、個人でやるのならそうはいかない。なんのために伝えるか、その

理由があるかぎり、あくまでも自分自身がやり続けなければいけないだけのことだ。

　だからこそ、個人による取材の極限をやってのけた宅八郎が、言論ではなく警察権力という暴力でその行動を束縛された今回の事件は、わたしたちのような仕事に携わる者が、等しく自分の問題として受けとめなくてはいけないのである。それなのに、この一件を宅八郎の単なる「お騒がせ」事件としか考えていないメディア、言論人があまりにも多い。

　このようなわけでわたしは、宅八郎を支援し、彼が提起する問題の重要性を、今後も声高に訴え続けてゆくつもりである。

＊

　なぜ、わたしは宅八郎を支援するのか。それは、彼が、ほとんど無意識なままに行動していても、いつもこのように重要な問題を提起してしまう、あまりにも稀有な存在だから。

あとがき

前著『イカす！　おたく天国』（小社刊）発行から、すでに3年以上の月日がたった。
そして、その間もボクはずっと処刑を続けてきた。そのために数々のトラブルにも襲われた。しかし、最大のトラブル（別件不当逮捕）がもとで、こうして単行本が出版できたのも、結局は運命なのだろう。
国家はボクに反権力者のレッテルを貼った。しかし、国家の拘束を解かれ自由の身になった時に、この本を書き出していた。不自由を知った時に、ボクは自由を認識したようにも思っている。
さて、本書を読めば、いかにこの国のマスコミが、当て逃げならぬ「書き逃げ」「流し逃げ」体質であるかは、理解できるだろう。週刊ポストだけではない。
何しろ全国紙では、逮捕だけは伝えておいて、釈放されたことも報じていない（毎日新聞を除く）のだから。現に、逮捕後1ヵ月が経った12月にも、街を歩いていたボクを見た女子高生は、「いつ出てきたのかしら」とささやいたりしているのだ……。
事件後の11月22日、ボクは弁護士とともに朝日新聞に乗り込み、その見解を質した。応対した社会部長代理のS氏は「訂正はできない。〝当て逃げ〟という言葉はこれまでも慣例として使われてきた〝用語〟である」という話のみを延々とした。
「過去はともかく、このような申し入れがあった今、どう対処するつもりか」と何度も繰り返すと、ようやく

「全国の本社が用語の定義を話し合う会議にかける」と約束したが、結局、どのようになったのかよくわからない。また、同席した読者広報室のN氏とY氏は、このことをどこかに書くのか、と居丈高に声を荒らげた。約800万部も発行されている全国紙で、先に「当て逃げ」などと書いたのはアナタたち、天下の朝日新聞なんだ。

＊

週刊ポストの岡成編集長は「逃げない。回答する」と大見得を切ったにもかかわらず、ボクに対しての回答はいまだにない。小学館にはいくら取材をかけてもらちがあかない。結局、ヤツらは逃げ隠れしているのだ。「書き逃げ」週刊誌めッ！

こうなれば、また直撃しかない。ボクが週刊ポスト編集部に乗り込んだ、あの日から約1か月後の12月12日夜。ボクは週刊ポスト忘年会（謝恩の会）会場を襲撃した！

パニックを起こしながら、殺到する編集部員。渦巻く怒号。ゴロツキのようにボクを侮蔑する若手社員。そんな中で、何と週刊ポスト発行人・五十嵐光俊なる男に、ボクはまさしく暴力でド突かれてしまったのだ！

その後、偶然にも副編集長の海老原に会った。すでに去勢された彼は言った。

「自分は、小牧や岡成編集長が呼ばれた社内会議にも出てないから、あなたの質問には答えられない。話は、岡成か発行人の五十嵐に聞いてくれ。このことは、社の上層部でも大問題になっている。ただ、編集長は逃げていて、答えるのは嫌だ、と言っている。こうなればポストも謝ればいいと思うが、会社は馬鹿だから、わかっていない」のだと。

これらの事実については、いずれ続刊として「業界恐怖新聞」を単行本化した際には、詳しく書こうと思っている。また、ボクが乗り込んで以来、小学館は厳重な警備体制になり、「宅八郎に注意せよ」という貼り紙さえされている、という……。

＊

そして12月21日、ボクは東京弁護士会・人権擁護委員会に人権救済の申し立てをした（笑い）。その中では、今回の報道に対して、適切な謝罪、訂正、名誉回復の措置をとるよう、各報道機関に勧告するように求めている。そして、弁護士会講堂で弁護士とともに記者会見も行った。

多くの報道陣が取材に来た。しかし、この日の記者会見はマスコミではほとんど報じられなかった。報じたマスコミも小さく書いただけ。報知新聞、スポニチ、共同通信は会見に来ていながら、何も報じていない。テレビなどは全民放各局が来ていたのに、やはりどの局も一瞬一秒たりとも報じなかった。

そして多くのマスコミは、今日も報道をつづけている……。

＊

ボクの復讐は、まだ完全には終わっていない。

マスコミは、司法・立法・行政につぐ第四の権力と呼ばれ、まるで何かを裁いているかのように機能している。マス・メディアに従事する人間もまた、何かを裁く権利があるかのごとく錯覚しているように思えてならない。

しかし、何かを裁こうとする人間は、何かに裁かれなければならない。そして、ボク自身もまた、裁かれる時がいずれ来るのだろう。しかし、それでもボクは「処刑宣告」を発しつづけていく。

宅八郎

1995年2月